を開らき、頽家に至りて洛東に建仁寺を立て、榮西の爲めにす。此に於てか禪宗大に隆んなり。

之より先き禪宗を傳ふる僧なきにあらざりしと雖も、皆な其僧徒の本領にあらずして、寧ろ附屬物として、僧徒の博識を示めすの具たるに過きず。之に加ふるに其の說く所、直指心身、見性成佛にして、小乘大乘の素養なき國民をして悟らしめんには、餘りに高遠に、其指さす所は、小乘權敎を破するにありて、小乘權敎の國民宗敎とならさるに先つては之を破すべき目標あらざりし也。故に凡へてを破するの目的を有する三論宗が、何んの宗派も存せさるに先つて我國に來りて、遂に法相宗の爲めに凌駕せられたるが如く、禪宗は其の傳來の早きに係らず、遂に大勢力となる能はさりき。然るに今や多くの宗派は傳られたり、多くの敎學は敎へられたり、其の浮華繁縟の理論は、多くの人に厭れたり。故に淨土、融通念佛の如き、直裁簡明なる他力成佛宗を歡迎したる社會は、また禪宗の如き直裁簡明なる自力救拯宗をも歡迎したる也。殊に豪健にして武斷、疎大にして實行を尊とぶ北方武士に取りては、此宗派最も能く歡迎せられたり。而して禪宗につぎて生じたるものは、他力成佛の極點、易行道の終末、魚肉を禁せず、妻帶を禁ぜず、坐して云ふべく、立つて行ふべき親鸞の一向宗にして、後ち日蓮の法華宗に至つては加ふるに軍隊的氣風を以てして宗敎の躰相一變す。最澄空海の時代より、源空、親鸞、日蓮の時代に至るまで、佛敎の歷史は難行道より、易行道に移るの歷史也。少數貴族の手より、多數平人の手に移るの歷史也。是れ正しく政治上に於ても、政權南方貴族の手より、北方野人の手に移ると同じく、時代を一貫せる一大精神は、平人の勃興にてありしが故也。北條氏の權力北方に固く、鎌倉の權勢、天下を制する所以は、實に此の時代の精神を握れるが故也。

二百二十七節　皇族鎌倉に媚附す、泰時の死去

斯の如く北條氏が時代の精神に鞭つて出で來るに方つて、皇室は少しも此の精神と相觸着せず。堀河の位を去り、其子秀仁立つて四條帝となるや、嬉戲を事とし滑石を宮廊に塗り、宮女の顚倒するを見て樂とするに至り、遂に自ら滑石に倒れて崩ず。四條の崩するや、皇室の連枝多く、各々鎌倉に通じて立たんことを求む。泰時、土御門が承久の變に與せざりしを以て、其子邦仁を立んと欲して秋田城介安達義景を京師に上らしむるや、義景道より歸りて問ふて曰く、若し他の皇子にして立たば之を如何せんと。泰時曰く之を廢すべきのみと。遂に邦仁を立てゝ後嵯峨とす。鎌倉の京師を見る此の如きものありし也。之を藤原氏の專權に比するに、彼は君主を易置するも、猶は天下の刑賞は其府中に於て爲されし也。今や名實共に權力、鎌倉の執權に移るに至り、前後雲泥の差あり、藤原氏は陽成帝を廢するも、其狂疾の故を以て之を廢するのみ。北條氏に至ては、其の意中の帝にあらざるの故を以て、之を廢せんとす。是れ實に古今權勢の大變と雖も、而かも當時の人心は、全く北條氏に依賴し天下の治平、人民の安樂は、唯だ北條氏に於て擔保せらるべかりしが故に、天下之を如何ともする能はす。源空徒弟と七條の譽文な書して和解を求め、僧聽かす龍顏を召して宗論を試む。源空博辯宏辭、能く風を靡す、是れ宗敵を源空知慧、第一の名を得、其勢天下を動す。已にして後白河上皇の寵姬二人、源空の說を聞きて出家するや、朝廷女徒に授戒せしを以て、朝廷源空を流す。斬に弟住蓮安樂を流す。恨來治二年、源空寂す、覺鸞に肥前國鹽寶郷を賜ふ。

屈すると。鑁慨然として僧となり、天仁四年、天台新義を唱ふ。

根來寺を立て天

＊＊＊榮西は備中吉備津宮の人、仁安三年宋に遊ひ文治三年、また宋に入り印度に入らんとして果さず。歸つて禪宗の敎理を弘む。其の禪師に遇ふや、其を知る所以は臨濟宗也。長元年四月、日蓮を伊豆に流す。二年十一月親鸞死す。

ず。六十餘州唯だ命を奉ずるを競ふの外なく、仁治三年、六月泰時病を以て死するや、天下痛惜して賢者となし、帝王の崩御よりも、深甚なる感情を以て追悼せられ、天下其皇室に對する專權を議するものあらざりき。

二百二十八節　北條經時、將軍賴經を廢す

然りと雖も北條氏の權勢信用は歷史的のものにあらずして個人的也。一の『朝』を立てたるが故によりて力あるものにあらず、現下の實際政治より來るもの也。故に巨頭の去るや、內動搖を免れず、泰時の孫、經時の立つて執權となるや、時に經時の從弟光時あり、其父、名越朝時は泰時の弟にして、鎌倉の政治に參與して重きを爲す。朝時死して光時執權たらんと欲して得ず、即ち賴經に親近して權勢を作らんとす。經時、賴經が年漸く長じて野心を生じ、政權爭奪の孤柱たらんことを慮り、寬元二年、諷して其位を去らしめ、其子賴嗣を立て將軍とす、賴經時に二十六歲にして賴嗣は六歲也。光時望を失して快々として樂まず。已にして經時病あり、寬元四年三月を以て死し、弟時賴代つて執權たるや、光時兵を擧げて叛す。然れども鎌倉大族の應するものあるなし。光時遂に髮を剃りて降る。

二百二十九節　三浦氏敗れ、五攝家生ト、皇子將軍となる

此時に方りて賴朝以來の北方の大族、多く夷平せられて存せず、獨り三浦氏のみ、常に北條氏と力を併せしかば、其聲望、稍〻北條氏に次く。其族長泰村は義村の子にして、泰時の婿たり、累代名家の故を以て北條氏に親近せられて機務に參與す。安達景盛は時賴の母、松下禪尼の父たり、生平三浦氏と權勢を爭ふて勝たず。三浦氏日に專橫なるを見て、怫然として去つて高野山に入る。今や其孫時賴の世となりしを見て鎌倉に入り、子、秋田城介義景等を集めて之を激し、三浦氏を謀らしむ。時に時賴、其親北條重時を六波羅より召して機務に參せしめんとす。泰村之を遮る。之より三浦氏北條氏と惡しく、時賴が前將軍賴經を京師に歸すや、泰村の弟光村等、賴經と約して必らず再び鎌倉に迎へんと云ふ。此に於てか安達氏、私かに鶴ヶ岡に榜して曰く『若狹の前司、專橫驕恣なるが故に近時誅戮を加へん』と三浦氏、其の陰謀に中るの故を以て大に驚きて、急に一族郎黨を集め兵備を整て、變を待つ。時賴之を聞き遂にまた兵を集む、泰村恐れて人を遣はして他なきを陳せしむ、時賴即ち誓書を與へて他なきを示めし、其兵備を解かしむ。光村等猶私かに爲す所あらんとす。已にして安達義景等急に其族人を擧げて三浦氏を攻めしかば、三浦氏以て時賴の命に出るとなし、其の誓書の信なきを憤り、兵を發して之と戰ふ。鎌倉の諸士、多く分れて兩族長に屬せしかば、時賴已むを得ず兵を出して安達氏を助け、風に乘して火を放つて之を攻む。三浦氏事の爲すべからざるを知り徒らに燒死せんよりは右大將の像前に死し、前代の恩を報ぜんと、一族二百七十六人、郎黨、家の子二百二十餘人と共に、法華堂に入り、賴朝の像前に屠腹して死し、三浦氏全く亡ぶ。而して將軍賴經の父賴嗣、また北條氏に對して異圖あるの證ありとして、廢

文永元年再び日蓮を佐渡に流す。

せられて京師に送らる。時賴因つて重時を招きて連署せしむ。鎌倉に於ける政變は、直ちに京都の朝廷に於ける公卿政權の消長となる。初め一條道家は賴經の父たるの故を以て、北條氏と極めて親近にして、威權帝王よりも大なりしが、今や賴經の異圖によりて、北條氏の信任を失ひしかば、六波羅府より三浦氏の滅亡の變を奏上するも、其手を經ずして西園寺太政大臣實氏の手を經るに至り、西園寺氏の威權獨り赫々として同輩を越ゆ。初め攝政關白たる藤氏は唯だ九條近衛の二氏あるのみ。時賴、藤原氏を分裂して其權を輕ろくせんと欲し、仁治三年、良實を關白として二條家を起し、寬元四年實經を關白として一條家を起さしむ。已にして一條家の己に利あらざるや、更らに藤原兼平を關白として此に鷹司家を起し、今や宮中にありては、清華に西園寺家あり、攝家に鷹司家あり、交も北條氏の爲めにし、而して貴族の北條氏に媚附するもの、其家を起すを見て滿朝多く鎌倉に親まんことを競ひ、甚しきは言へも習はぬ東語を用ゆるに至る。大勢已に此の如くなれば、建長四年三月、時賴、重時、使を京師に發し、後嵯峨上皇の長子、宗尊親王を請ふて鎌倉の將軍たらしめんと請ふや、上皇驚喜して之を許す。親王は其母藏人平棟基の女なるがため、皇太子たる能はざるもの也。其鎌倉に下るや上皇自ら徵行して、其裝儀を窺ふて喜ぶ。之を後鳥羽上皇が政子の其皇子を請へるを拒絶したるに比して、如何に絶大なる變化なるぞ。

此の如く皇室、公卿の自ら見ること愈よ低くして、鎌倉の權益す張る。然れども時賴は其權勢の頂上に昇つて、驕るが如き愚かなる者にあらざりき。彼れ其の祖父泰時の風を慕ひ、且つ政府の立つ所、唯だ民信に存し、民心の來る所は、民政に存するを知れり。彼れ泰時の質實剛健に加ふるに、更らに禪宗に親炙して得たる讀書を以てし、古に鑑みて今を戒しめ、欲を少なくして情を節し、賢吏青砥藤綱を任用して民政を料理し、隱密を發して奸吏を發き、諸國を徵行して守護地頭の正邪を計較せしかば、天下益す治平となる。而して此間に鎌倉武士てふ一種の士風を生ずるに至りぬ。北方の風、古より疎獷、猛野、部落の少しく發達して、未だ民族とならざるものにして、其社會結合の連鎖は利益共同と、族長尊敬との二に過ぎずして、極めて薄弱なりき。之に反して其個人は殆んど其の頂上まで識認せられ、主從と雖も意氣相投せずんば即ち爭ひ、同族と雖も、利害相異るや即ち戰ひ、未だ曾て恭謙退讓の何たるを解せざりき。加ふるに其屈すべからざる猛獸的の野性は、一種叛逆的の氣質を生じ、其治者、勝者に對して、反抗するは、何時にても辭せざるの風を生じぬ。彼等の社會に於ても隣人、鄕黨の評判を省みるの風なきにあらざるも、併かも批評の標準は正邪是非にあらずして彼れは勇なる乎、怯なる乎の二點に外ならずして、家の面目と云ひ、勇士の恥と云ふは、唯だ強者に反抗する熱心の程度を云ひ現はすに過ぎずして、後世の武士の如き理想を有する者に非

ず、爭は勇者の名を博すべき一の手段なるが故に、爭鬪は常に社會に絶えざりき。而かも其爭ふや個人的也、部落的也、勇怯の爭也、利害の爭也、未だ曾つて一の道義的口實を有せざりき。否な彼等は其私心を暴露して敢て恥づべきことゝなさゞるが故に、名を道義的原因に藉るべきの要を感せざる也。然るに賴朝一たび起つて覇府を定め、其祖先英雄の記臆と、恩威とを以て人心を一統し、關東諸國の豪傑を網羅して、源家の族人となし、家人と號するや、鎌倉は坂東諸國北人の中心となり、諸人は悉く其一枝たるの姿となり、家人なる者の、恩寵權勢の大なるに從つて、此風益す盛となり、地方に於ては猶ほ族によりて黨を立て、數黨相合して一族を立て、純乎たる部落的生存の狀態なりしも、中央に對しては鎌倉なる一種の愛國思想を有し、鎌倉の存亡と云ひ、鎌倉の大事と云ひ、鎌倉の利害を以て個人の利益とするの風を生じて、稍々封建の民族的統一思想を有したるころ、時の文學はまた彼等に道德社會的の立法を與へたり。

二百三十一節　鎌倉の士風を作りし文學　是より先き唯一の文學とも云ふべき和歌は新たに起りたる人民に觸れて一大發達を爲し、新古今集時代に至りて其の頂上に達したりと雖も、未だ全く新國民の精神的需要を充たす能はざりしかば、散文興りて和歌に代り、其需要を充さんとするに至りぬ。散文は大同前後の竹取物語の佛說を翻案して小說を述べるあり、源氏物語の榮華物語の宮廷の生活を書けるあり、一個人の日記には攝政兼家の妻が著はせる蜻蛉日記あり、和泉式部の

日記あり、紀貫之の土佐日記あり、讃岐典侍の日記あり。阿佛尼十六夜日記ありと雖も、其調、軟弱にして其想凄婉、王朝の弱點を代表して、女性文學の範圍を脫する能はず。公卿の手中に發達せる纖巧なる和歌と同一性質のものにして、到底機心あり、爭心あり、野性ある剛健、尙武、簡質なる新國民の需要を充たす能はざりき。故に北人が其隣里鄕黨公會の席に於て、互に語りて其祖先を誇る所の源平の大戰は、此の新國民の需要に應ぜんがために書かれぬ。平家物語、源平盛衰記等の戰記的長詩是也。此二書、ヲデッセー、イリヤドの二大詩歌がホーマルなる盲人によりて作られしと云ふ傳說の漠然として存するが如く、唯だ葉室行長が、僧慈鎭のために作りて、琵琶に合して盲人に歌はしめしと云ふのみ。其作歌、年月を審にすべからずと雖も、鎌倉武士の欝勃たる大精神より燕生したる一大產物たりしや、疑ふべからざる也。其の漢文の剛猛壯快の調に交ゆるに、和文の輕妙、優雅の調を以てしいかば、已に女性的、貴族的、而して書齋的、孤獨の文學を飽きたる社會をして、靡然として之に傾かしめ、寺院の法會、豪族の會飮等、琵琶法師の至る所、猛氣人を凌ぐの北人をして、靑矜を霑はさしむ。而して其書中に包含する所の倫理的觀念は弱を憐み、衰へたるを哀み、榮華驕奢の恃むべからざるを敎へ、積惡の遂に酬なくして已まざるを說き、恭謙の美なるを示し、人倫の守らざるべからざるを論じ、勇武廉耻の何ものよりも尊ときを嘆美するにありしかば、悲愴感慨の聲の到る所、無學、

疎獷なる鎌倉武士をして、其の野性を和げ、其猛氣を純清にし、其叛逆的心性をして翻つて弱者に向ふの俠義たらしめ、其爭を好むの心をして、正しき面目を保つ、眞乎の廉耻心たらしめぬ。而して之を凡ぶるに健武を以てし、北人が無意識的に爲せる善行美事は、作家のために激賞褒美せられ、高調に語られしかば、此に鎌倉武士は倫理上の一大洗禮を領しぬ。而して流風遺韻の及ぶ所、坂東八州の武士をして多く此の理想を慕はしめしかば、此に坂東武者なる一個の士風を生じたり。

二百三十二節　將軍宗尊廢せらる、元の勃興、時宗元使を逐ふ

ものは北條時宗なりき。時宗は時賴の子也、康元元年、時賴病あり、剃髮して最明寺に閑居し、而かも最も能く坂東武者の秀粹を代表せる武藏守長時をして己に代つて執權となつて、時宗を助けしむ。時賴が泰時の風を承けしが如く、時宗は義時の風を承け、銳意して政治を改めんとし、越訴奉行を設けて奉行の裁斷を不正とする者の越訴を受くるなんど、剛果健武、鎌倉の望たり、文永二年將軍宗尊、病と號し僧良基、嚴慧を招きて入つて禱らしめ、實は亂を計る。長時直ちに之を廢して京師に送り、且つ二僧を追ひ、宗尊の子、惟康を立てゝ將軍とす時に甫めて三歲也。此時時宗、十六歲、五年、十八歲にして執權となり、諸政の衝に方り、政村之を助く。之より先き我順德の時、宋の寧王の世、蒙古部落の間に鐵木眞なるものあり。其父十三部落三萬家を領す。已にして父死し、鐵木眞其

難を襲ふや、部下多く其幼弱を侮つて服せず。鐵木眞即ち兵を擧げて其族人を征服し、勢に乘じて四方を攻伐し、遂に傍近の諸酋長をして幹難河（ナーナン）（外蒙古の北境）上に成吉斯汗の尊號を上らしむ。成吉斯汗は至大なる皇帝の義也。之より進んで支那內地に入り、燕京に都し、兵を四方に發して武威を輝かし、西は波斯よりシリヤに及び、人類の起原地たるチグリス、ユフレートの河邊を橫行し黑海、バルチック海に及びて、遂にハンガリーを侵略し、北は露西亞よりポーランドに及び、モスコウ、キーフ皆な灰燼となり、北人風を望んで靡附し、南は印度を略定し、東は朝鮮を慴服す。而して到る處、抄掠暴凶を縱にし、裏海よりインダス海に至る數百千里の地は、成吉斯汗の軍隊が五年の間蹂躙したるがため、五世紀の後に至るも容易に之を回復する能はざるに至りぬ。是れ世界ありて以來、最も人類を驚怖せしめたるものゝ一なりき。而して成吉斯汗の孫忽必烈（クブライ）に至り、支那を一統す。宋商、宋僧、朝鮮人は仄かに此の恐怖を傳へぬ。北條氏は禍の或は我に及ばんことを恐れ、兵備を治めて武事を勵ます。之より先き伊豆の僧日蓮、日蓮宗を創めしが、此外患を揣摩して人心を警醒す。形勢此の如くなるに係らず、後嵯峨上皇の一門は其父、土御門帝が承久の役に與らずして、北條氏に信用せらるゝを以て、揚々として得たりとなし、他の皇族の快々たるに方りて、獨り歡笑を主とし、朝廷の事、宴樂と改元の外なきに至りぬ。文永四年初めて內裡に樂所を設け、公卿の舞樂を練りしが、其技極めて熟せしを以て、

之より連日歌舞あり

*其書に曰く上天眷命大蒙古國皇帝奉書曰本國王朕惟自古小國之君境土相接尚務講信脩睦、況我祖宗亨天明命奄有區憂遐方異域、恐威懷德、者不可悉數、朕即位之初、以高麗無辜之民、久瘁鋒鏑、即令罷兵、還其疆域、反其旄倪高麗之君臣、咸載來朝、義雖君臣、而歡君父子、計王君臣亦已知之高麗朕之東藩也、日本密邇高麗開國以來亦時通中國、至於朕躬而無一乘之使以通和好尚恐王國和之未審故特遣使持書布告朕心冀自今以往、通問結好以相親睦、且聖人以四海爲家不相通好豈一家理乎、以至用兵夫孰所好乎王其圖之

五年正月、舞の御覽あり、中將實冬、少將經良、少將忠季、隆良等、相競ふて其技を鬪はし、關白の子、自ら童舞の胡飲酒を演じ、四條隆親の子陵王を舞ひ、一坐感嘆して日暮を惜しみ、二月に至りまた之を催さんとす。時に鎌倉の急使あり、電馳して闕に入り、一片の奏文を上る、曰く蒙古の王忽必烈、我を以て臣妾とせんとして*諜書を送ると。歡笑の夢は驚破せられ、滿朝の公卿色を失す。已にして公卿相議し官、外記以上の意見を徵し、菅原長成をして返諜を書せしめ、之を鎌倉に下す。時宗元主の文を以て無禮となし、朝廷の返諜を以て躰を失すとなし、返諜を與へず、使を責めて之を追ふ。時宗は鎌倉的膽氣を示しぬ。日本國民の心は此の膽氣に吸集せられぬ。

二百三十三節　第一回の元寇

之より先き元主忽必烈已に宋朝の大軍を覆して、威風四百餘州を壓し、列國先を爭ふて入貢すれども、日本獨り之を知らざるが如きを見、先づ虛喝によりて之を服せんと欲し、其兵部侍郎黑的を國信使とし、高麗に入りて其の重臣を嚮導として日本に入らしめんとす。黑的等巨濟島に至り、日本海の風濤險惡なるを見て志を得ずして歸る。然れども休する事なき大精神を有する忽必烈は、之がため一日も日本を征服するを忘れず、明年また黑的等を朝鮮に遣はし、日本をして入貢せしめんとす。朝鮮王己むを得ず、其臣潘阜をして日本に使せしむ。時宗が第一着に書辭の無禮を諭して追放したるものは此の使者也。此に於てか元主、

*或は云ふ此時彌四郎なるものを使として元に至らしむるも、要領を得ずして歸ると。（東鏡未記）外寇外より迫る時に方つてまた內紛あり、時宗の兄、時輔、義

一面、使を高麗に發して戰備を修めしめ、一面復た黑的をして高麗を經て日本に來らしむ。黑的の對馬に至るや島人鎌倉の令を奉じて之を拒ぐ。黑的其二人を擄にして高麗に歸り、更らに高麗の使をして、書を齎らして大宰府に至らしめ二擄を歸す。然れとも遂に答を得ざるを以て形勢、要害を偵察して歸る。元主、氣益す激し、趙良弼をして三千の兵を率ひて渡航せしめんとす。趙良弼兵力の以て屈すべからさるを知り、遊說の間に功を奏せんことを期し、僅かに秘書三十四人を從へて發し、仝九月筑前今津に着す。大宰府の少貳資經、自ら今津に至り趙良弼を見て、其使命を問ひ國書を求む。趙良弼、國書を匡中に收め鐵鎖を以て之を索きて曰く、國書は親しく國都に入つて呈すべし、若し國王に見ゆる能はずんば、將軍に呈せんと。經資强ひて其使命を問ふ、即ち國書を寫して之を示めす。其書、數ば使を却けしを詰り、十一月に至つて猶ほ報を得ずんば、直ちに兵を發せんと云ふ。朝廷また返諜を與へんと云ふ。時宗また書辭無禮の故を以て返諜を與へず。*頻りに鎭西の將士を催かして海防を嚴にせしめ、趙良弼を送りて對馬に放つ。趙良弼、高麗王をして更らに日本に說かしむ。時宗遂に聽かず。此に於てか元主、遂に口舌の間に屈すべからざるを知り、遂に其將、忻都、洪茶丘をして九百艘の戰艦に乘じ、二萬五千の戰士を率ひて、高麗軍八千を誘ふて侵襲せしむ、時に文永十一年十月也。

二百三十四節　元軍風濤に逢ふて歸る

之より先き後嵯峨上皇、院にありて政を聽くこと二十六年。文

永九年を以て崩じ、十一年正月に至り龜山天皇、位を皇太子に讓る、之を後宇多天皇とす。天皇時に年僅かに八、八歳の天皇は無學無識、討論辯難の後にあらされば、元主の諜文を解する能はず、蒙古の名、經史に見へさるを以て、茫然として爲す所を知らざる公卿に圍繞せられて、此の大難に當る、朝廷が爲し得たる唯一事は諸寺諸社に命じて、敵國退散の祈禱を捧ぐるあるのみ。北條氏なかつせば、一國の沈淪して南宋の後を追はさるもの偶然のみ。幸に北條氏の威權、能く全國を統御し、時宗の膽氣能く諸武士を率ひ、元兵我國に至る頃は九州の武士、太宰府の催促により筑前肥前に集るもの十萬二千人に達す、已にして十月、元兵壹岐對馬を攻むるや、對馬守護代宗助國、壹岐守護代平經高、皆な戰つて之に死す。元兵猖獗、婦女を虜にし、其掌に繩を貫きて之を縛し、戰士の腸を割きて之を食ふに至る。已にして進んで、肥前より筑前に寇し、今津、赤坂に連戰して博多に陣し、火を放つて我軍を攻む。此時に方つてや源平の大戰を去ること殆ど一百年、勇將猛士、已に去つて跡なしと雖も、其の父祖の物語によりて皷舞せられたる勇氣は、猶ほ全く失せず。戰士先を爭ふて進むと雖も、元兵は支那大陸に數十回の征戰を經たるものにして、部伍整ひ、進退度あり、自ら大軍繰練の法あるに反して、我兵は猶ほ未だ一騎打の勇のみを尚びて、部伍の戰なかりしかば、先づ敵人の爲めに膽を奪はれぬ。數萬の大軍、旗幟を盛にし、戰皷の響を大にするや、我馬先づ驚き、勇士身を挺でゝ敵陣に入

宗と共に南北六波羅を鎭す、時輔、執權たらざるを憤ることと久し、文永九年二月時宗、義宗に命じ急に擊つて時輔を殺さしむ。

るや、隊伍の制の爲めに、徒らに陣歿す。況んや鐵砲なるものに至ては、日本武士が千百年來未だ曾つて其名すら知らさる所にして、音響の發する所、彈丸の迸る所、軍士、茫然として爲す所を知らず。遂に退ひて水城を守る。已にして日暮に及び、元兵夜襲を恐れ、退ひて海中に入る、適ま風濤大に起り、元師轉覆して死するもの一萬三千人。元軍已に日本軍に勝つと雖も、日本の勇武また決して侮るべからざるを見、加ふるに風濤の爲めに氣を失し一夜軍を扳ひて歸る。我軍之を知らず、翌朝海面を見て大に之を怪しみ、僅かに一艘の敵船の期を失し、志賀島にかゝるを見て、恐れて之に近よるものなかりき。之を文永の役と云ふ。

二百三十五節　支那侵略の雛圖、第二回の元寇續覆す

元主思らく、筑前の勝利は以て日本武士の膽を寒からしめたるべしと、即ち口舌の間に屈せんとして、建治元年四月、*杜世忠、何文著、都魯丁等をして、高麗の使と共に來つて和を議せしむ。大宰府之を鎌倉に送るや、九月に至り時宗之れを斬り、以て我情僞を洩らす能はさらしめ、また公私の費用を節して國防の用に供せしめ、北條實政を九州に入れて、軍事を總督せしめ、宇都宮貞綱をして之を助けしめ、東國四國の兵を九州に入れて、肥前、筑前、薩摩の吾田を守らしめ、山陰山陽の兵をして長門を守らしめ、東山北陸の兵をして越前敦賀を守らしむ。部署已に成るや明年の春を以て、將さに大軍を提げ、海に航して高麗及び元を擊たんとし、西海の諸侯に命して水主、勇士、船舶、糧食を備へ**しむ、

杜世忠は、蒙古人、何文著は漢人、都魯丁は土耳古人也。元主あらゆる人種を用ひて戰ふ。

東寺文書に曰く明年三月比可發征伐異國也梶取水手等鎭西若全

不臣者可省宛山陰山南海道之内、被仰大宰府少貳經資了仰安藝國海邊頭風家人所一圓地等儲梶取水手等經資分令相觸者得彼配之員數早速可令送遣博多也者依仰執達如件
建治六年十二月八日
武藏守相摸守武田五郎次郎殿（鎌倉遺文）

＊元人多く勦猛を提へて來るを地方を占領して一根據となし、永久の謀を爲さんと欲せしか。

未だ果たさずして弘安二年、元將夏貴、茫文虎等其將周好福、欒忠をして我僧の宋に學べる者を携へ、和議を名として來らしむ。時宗また之を斬る。此時、高麗の忠烈王、元朝の女を娶り數ば元と來往し元の日本に志を得さるを以て其意を迎へ、兵を發して日本を攻めんことを乞ふ。此時元また宋の殘黨を厓山に擊つて之を殲くせしかば、即ち意を決して大軍を起し、一擧して日本を亡ぼさんとし、弘安四年征東行中書省を高麗に設け、征東元帥忻都、右丞洪茶丘をして蒙古、漢、高麗の軍四萬人を率ひ、九百艘の戰艦に乘じ、高麗より發せしむ。高麗の僉議中贊、金方慶之を導く。また右丞茫文虎は江南の軍十萬餘人を起し、戰艦三千五百艘に乘じて江南より發し、全軍十四萬、海を掩ふて來り、五月二十一日壹岐對馬沖に合す。＊二島は第一着に蹂躙せられ、例によりて男子は屠られて、婦女は擄にせられぬ。住民皆な山野に逃竄し、赤兒の聲により發見せられんことを恐れ、手づから其子を戮するものあるに至りぬ。敗報は矢の如く上國に達しぬ。風說は風說を生みて、國民歸嚮する所を失しぬ。或は云ふ、元兵已に長門より上つて、京師を衝くと。或は云ふ、怪物北より南の天に亙ると。或は云ふ神馬、天空に戰ふと、或は云ふ日本亡滅の神示ありと。擧國震驚、人事全く停止せられ、九州中國の米穀京師に上らず。蒙古未だ上らずして京師の民、先づ餓死せんとす。此に於てか朝議先づ後深草龜山の二上皇をして、難を鎌倉に避けしめんとす。龜山上皇最も國難を憂ひ、自ら宣命を草し、自ら之を

清書し、死を以て國難に代らんことを伊勢の大廟に禱り、後宮の之を止むるを聽かず。已にして六月五日、元兵、博多の沖に現はれ、玄界、志賀、能古の三島によりて博多を壓す。之より先き北條實政、九州の軍事を督し、箱崎博多の間に、二丈五尺の石築地を築き、前は亂杭を以て敵軍を遮り、後は馬に鞭つて上るに便し、高きにより、俯して元軍を射んとす。これ文永の役によりて得たる戰術なりき。日本の軍士謂らく、以て敵をして我か動靜を知らざらしむべしと。然れと案外にも、元軍は更に其船舶に近世の艦橋の如きものを作りて、高きによりて我軍を瞰視するの便を有したれば、我が動靜は秋毫も皆な視察せられき。殊に彼我の强弱、武器の精銳は、已は文永の役に於て知られたるに加へて兵食繼がずして、軍士鎧の重きに堪へず、多く弓を引くの氣力なしと雖も、唯だ神明の加護を頼みて、萬一を僥倖するのみ。已にして我軍進んで志賀島の敵を打つ。草野次郎夜襲に先頭し、＊河野通宗之に次き、大友貞親また之に次ぎ、各々元兵を破ると雖も、其石磬の强銳なる、其隊伍の整正せる、其戰艦の堅牢、廣大なる、到底我軍の敵にあらして、之に近つくもの、船は破れさるなく、人は死せざるなし。然れども我軍の勇武なる勝利の望なき戰をなすもの八日、元軍遂に上陸するを得すして、六月十三日、鷹島に退く。此の如くして一進一退、相持すること十八日、六月三十一日の夜半より、颶風驟かに起りて、波濤洶湧、元軍大半顚覆す。我軍之に乘して掩擊し、七月七日に至りて戰を已む。

＊河野は伊豫の人、十年の中に蒙古來らずば異國へ渡りて合戰すべしと起誓し、誓紙を燒きて灰となして飲む。

弘安の大敗より十三年永仁二年（元の至元三十一年）忽必烈死し子鐵木耳立つ、大臣策を立て日本侵略の志を捨つ。

此役元軍死するもの十萬人。高麗軍死するもの七千人。餘衆三萬三千人僅かに生命を全ふして高麗に逃る。

二百三十六節　鎌倉の内亂、皇室の爭奪、皇位有期の菊識となる

是れ實に古今未だ曾て有らざる所の大勝なりき。然れどもまた甚だ高價なる勝利なりき。何となれば鎌倉の衰滅、天下の大亂、實に此より始まりたれば也。弘安七年四月時宗、鞠究焦慮の結果として、三十四歳にして死するや、子貞時十四歳を以て繼で執權たり。北條業時、彈正少弼を以て加判す。時に北條時國、六波羅の南方を鎭し、聲望貞時より高し、貞時即ち目するに自ら執權たらんとするを以てし、事に托して鎌倉に招き、常陸に流竄し、後また之を殺ろす。此時に方りて鎌倉の老臣宿將、略ぼ盡きて、政所の大權悉く北條氏の手に歸す。貞時の外祖秋田城介泰盛、已に和田氏を亡ぼし、今や陸奥守に任じ、威名隆々、鎌倉の諸將皆な其門に出入し頗る專横の跡あり。貞時の家宰平の賴綱、泰盛と權を爭ふて之を倒さんとし、泰盛を劾奏するに、賴朝の血統を受けたるを名として、源姓を補するを以て叛逆を謀るの兆となして、之を誘殺す。已にして賴綱また專横放恣にして誅せらる。此の如く鎌倉の豪族、權家、交も相殺戮せらるゝ時、皇室もまた二派に分れて帝位を爭ひ天下の亂源此に萠す。初め後嵯峨上皇の未だ世にあるや龜山を殊寵し、後深草帝を强ひて位を讓らしめ、且つ皇位をして長く龜山の流に歸せしめんとし、後深草に與ふるに長講堂領、法

金剛院領、熱田社領、及び別納、播摩國衙及び其の別納を以てして、皇位を繼承せざる報酬とす。是れ事實に於て皇位を兩分せるもの也。故に後深草、龜山同母兄弟の間、互に疾視し、後嵯峨崩じ、龜山の太子、後宇多の立つや、龜山、後宇多、相共に後深草を冷遇す。後深草、憤懣痛恨、禁ずる能はず、哀を北條時宗に乞ふ。時宗即ち後深草の子、熈仁をして後宇多の太子たらしめ、弘安十年、貞時後深草をして位を熈仁に讓らしむ、之を伏見帝とす。龜山深く之れを憤る。北條氏以て意となさず、更らに正應二年將軍惟康亂を謀ると稱し、倒さまに網代輿に載せて之を京師に歸し、後深草の第三子久明親王を立てゝ鎌倉の將軍となす。時人以て將軍京師に流竄せらるゝとなす。龜山之を以て龜山の一統に對する侮辱となし、憤懣已まず。時を俟つて報復せんと欲す。正應三年、三月賊あり、夜禁門に入り、宮女を脅かして帝の寢殿を伺ふ。宮女之を欺きて空室に入らしめ、帝をして女裝して之を避けしむ。已にして衛士、合圍して賊を攻む、賊即ち紫震殿に上りて自殺す。其帶ぶる所の劍に姓名を刻みて、太政大臣爲賴と云ふ、爲賴は甲斐源氏の末流にして、淺原八郎と稱し、剛猛武幹あり、徒を聚めて盜を爲すものにして其佩刀を見るに前の參議藤原實盛傳家の名刀鯰尾と名くるもの也。時人、以て龜山上皇、太政大臣を以て爲賴を募り、伏見帝を弑せしめんとせるものとす。伏見帝之を以て貞時に告げ、且つ云ふ龜山上皇常に承久の事を憤つて已まず、其後をして帝統を承けしむるは鎌倉の利にあら

ずと。龜山之を恐れ貞時に誓書を下して事なきを得たり。故に貞時、伏見をして其子胤仁を立て皇太子たらしめ、永仁六年、天皇遂に位を之に讓る。之れを後伏見帝とす。時に年十一也。龜山の一統之れを見て益す憤懣す。後宇多即ち使を發して貞時に告げて曰く、後嵯峨の崩ずるや、龜山の一門をして、長く皇統を繼がしむべしと定む。卿今や之れを改めて後深草の一門をして位を重ねしむるは何ぞやと。北條氏の眼中、皇室なしと雖も、歷史的の積威は猶は蔑視すべからず、貞時其遂に北條氏を敵視せんを恐れ、即ち兩家を交綏せしめんとし、後深草龜山の二統をして、毎十年に更る〳〵皇統を繼がしむるの約を立て、先づ後宇多の第一子邦治をして、立て後伏見の太子たらしむ。太子は天皇より長ずること三歲也。此くて在位三年にして永仁六年、位を皇太子に讓る、之を後二條帝とす。また伏見の第二子富仁を立てゝ後二條の太子たらしむ。世に後深草の系統を持明院殿と稱し、龜山の系統を大覺寺殿と云ふ。此の如くして五人の上皇あるに至り。無限絶對の主權を示めしたる皇位は、持明院派、大覺寺派の二派の間に受授するものとなりぬ。是より以往、幾十年、南北朝の終に至るまで、二派の爭權は天下紛亂の基となる。

三百三十七節　皇族人物を出し、南北の武力平均し、北條氏民心を失ひ、曾倡再び武力を生す

然りと雖も飢腸奇策を出す、武家のために此くまで制肘せられ、此くまで窮乏なる生活を營まざるべからざるに至りし結果として、皇族の才幹は非常に發達しぬ。皇族は藤原氏の文弱的專制の時に際しては、貴族的の宴安驕奢の空氣に圍繞せられて、其心識微弱となりぬ。今や武家の武斷的專制に迫られ、窮乏に苦しむの結果は、其の智慧を磨き、其心識を敏ならしめ、其播弄機巧の才は、殆んど陰謀を以て生命とする公卿にも劣らざるに至りぬ。中にも龜山帝の如きは過失多く、女事に於て人倫を破りたるの名ありと雖も、膂力の强よき、氣象の濶達なる、古今多く見るべからざる君主なりき。而して伏見の第二子富仁、後二條の後を承けて花園帝となり、花園の後は大覺寺派なる後宇多の第二子後醍醐出でゝ、朝廷は益す有爲の君を出すに方つて、鎌倉に於ては貞時花園の應長元年を以て死し、其子高時續て執權となり、驕奢淫逸を縱にして、朝野南北强弱の勢將に一變せんとす。貞時賢相の風あり、時賴の遺風を慕ひ、民の疾苦を以て心となし、親しく民政の局に當りて、守護地頭の奸曲を發く。然れども貞時の獨力を以て支へんとには、天下の大勢は餘りに甚しく傾きぬ。鎌倉が天下の主權を掌握したるより已に一百三十年。古來未た曾てあらざる治平にして、民生の保安、物貨の生産、前古比なく、且つ久しく京師の政治、諸國の武士を苦しむるを見て、其負擔を輕ろくせんがため、三年在京の古制を改め三年に一度鎌倉に勤務するの制となせしかば、諸國の豪族餘裕を生じて、意滿ち氣驕り、下民に向つては奸曲を弄して民田を侵し、法令以外の徵發を命じて、上、鎌倉に向つてはまた訴訟を起し、命を

奉せざるもの多くを出すに至りぬ。此の如く諸國の武士が泰平によりて自由を味ふに方りて、蒙古の警は忽ち彼等をして公役奔命に勞れしめたり。文應元年忽必烈立つて貢を四方に徵するの風說を聞きて、初めて戒心し、文永五年高麗の使潘阜の書を得て、初めて四方に號令して軍備を充實せしめしより七年にして、文永十一年の役あり、之よりまた七年にして、弘安四年の役あり、蒙古のために一國を擧つて軍役に供するもの前後十四年。兵は南北に往還して、奔命に勞れ、民は東西に轉送して、公役に勞る。之に加ふるに宮中の迷信、民間の無識あり。神佛に禱つて外寇を夷げんとして、神社佛寺の寄進を競ひ、幸に外寇を退くるや、以の神佛の冥助に出るとなし、十年征戰の士、未だ恩賞なきに、空言閑座の神官僧侶、先づ金銀、土地の賜を得しかば、外蒙古に疲れたる國民は、內、神佛に奉せんがために疲れたり。若それ其の政治上に及ぼすの結果に至ては更らに大也。勇武、天下を慴服せしめたる北人は、其の短所たる水戰に於て、南人と角したるがために、西南武士をして北人を恐るゝに足らずとするの念を生じて中國近畿の武士をして、源平以來再びまた首を出すの機會を得せしめたり。北條氏の强硬政略の下に屈服したる僧侶神官をして、容易に屈すべからず、驕慢、其の政治的勢力を回復して、兵を養ひ、また藤氏を凌ぎたる時のごとくならんとするに至らしめたり。乾元三年、朝廷、禪宗のため嘉元寺を建てんとするや、叡山の僧徒、暴訴して之れを遮る。已にして德治元年後宇

多上皇、御室仁和寺の僧正禪助を寵信して、其の益信僧正に本覺大師の號を諡るや、自餘の僧徒、囂然として起つて之を爭ひしかば、朝廷之に恐れて、旨を北條氏に諭し、また諡號を已めんとするや、北條氏以て寺院に屈すべからずとなし、かば、また諡號を廢せざらんとす。僧侶聽かず西塔院主忠源、楞嚴院長吏等のため三萬疋の財を積んで鎌倉に遊說せしむ。鎌倉聽かず。已にして山僧神輿を奉じて京に出でんとするや、鎌倉の使信濃前司時連、院宣によりて神輿を防ぐ。之より各派の僧侶多く起つて事を生ぜんとし、多武峰の僧、鞍馬の僧、また叡山の僧に力を合せ、將さに一大爭亂を生ぜんとす。此に於てか、北條氏寺院と交綏して平和を保たんと欲し、長井左近太夫入道道漸、秋田城介時顯をして上洛せしめ、私かに仁和寺に說きて大師を辭せしむ。叡山の僧已に北條氏を以て屈したりとなすや、其氣更らに昂り、仁和寺を以て叡山の末寺たらしめずんば聽かずとなし、之より紛議百出、山僧却て六波羅府を襲はんとするに至り、武門の權、漸やく傾きつゝ初めぬ。略言すれば蒙古襲來のため、日本勢力の偏重を改め、南北稍相等しからしめんとせる也。加ふるに、國難は夫役を增加し、民政を紛亂せしめ、鎌倉の法律、地方に其力を失せしかば、北條氏が唯一の後楯として皇室をも凌ぎたる民心は蕩然として去り、新勢力は舊勢力を覆さんとし、社會の紀綱は紛然として崩れ初めぬ。英雄ありと雖も、其後を善くする能はざる也。故に貞時、徵行して武士の奸曲を發くと雖も、唯だ是れ局部の治

療のみ。大弊、宿病已に救ふべからず。決んや高時少にして驕奢、淫靡の俗に染み、家宰長崎高資に政柄を委ね、私曲、貪亂を恣にせしむるをや。高時の時に至りてや天時、人事、等しく北條氏に利あらさりき。

第二十章　後醍醐の親政　神武紀元千九百七十二年より千九百九十六年に至る

第二百三十八節　北條高時の失政驕奢　第二百三十九節　後醍醐出づ、中宮廉子政治に與かる　第二百四十節　所在の武士、北條氏の命を奉せず　第二百四十一節　朝廷、武士と結びて鎌倉を覆さんとす　第二百四十二節　後醍醐、寺院に頼つて北條氏を謀る　第二百四十三節　皇族兩派相陷擠し、後醍醐蒙塵を恐れて脫奔す　第二百四十四節　正成出づ、後醍醐隱岐に遷さる　第二百四十五節　北軍戰志なし、所在の豪族、北條氏に背く、新田義貞赤松圓心出づ　第二百四十六節　足利高氏六波羅を陷す　第二百四十七節　義貞鎌倉を覆す　第二百四十八節　王朝黨武士黨の反目、人心王政を厭ふ　第二百四十九節　公卿と武士と、南人と北人と、後醍醐と尊氏と、足利と新田と相對抗す　第二百五十節　後醍醐尊氏を除かんとし尊氏鎌倉に自立す　第二百五十一節　大將軍は北方の皇位、義貞尊氏を征す　第二百五十二節　義貞の位地、尊氏の人物　第二百五十三節

北人の政治思想、時代の精神となる　第二百五十四節　尊氏京都を取り敗れて九州に走る　第二百五十五節　正成尊氏を防ぎて敗死す　第二百五十六節『將軍天子の位を與ふ』　第二百五十七節　京畿の戰、後醍醐、尊氏と和し、義貞北國に逃る　第二百五十八節　北行京軍の困厄　義貞の人物　第二百五十九節　後醍醐逃れて吉野に入る

二百三十八節　北條高時の失政、驕奢　北條氏の其の權勢を作るや常に民政の上に立つ。而かして民政は寡欲公平にあり、寡欲公平は自ら奉ずること質素、武朴なるにあるを知り、官は從四位下を最上として之より進まず。士は相模武藏を限として多きを貪らず。京師脂粉の氣に遠かり、務めて北人固有の豪健なる精神を保存せんと欲したり。故に京師の公卿皇族の代る〳〵來つて鎌倉の將軍となるや、和歌、宴遊、安逸の習俗を將ち來れりと雖も、此等の習俗は『將軍家』と云ふ狹隘なる區域内に幽閉せらるゝが如くにして、一般の北人を浸染する能はず。鎌倉は依然として疎岩朴素の風を保ちたりき。然るに高時の前後に至ては全鎌倉を擧つて悉く將軍家が京都より持ち來れる安逸宴樂の風に浸染し、日夜、白拍子、琵琶法師、猿樂、田樂の戲に放心して、政務を省みず。また社會の進歩は自然に生活を進め支那樣の食物を生せしめて、起居玉公の風に摸せしめ、天下の執權たる時頼の母を以て、親しく障子の破れたるを繕ふて以て儉勤の敎を垂れたる松下禪尼の子孫、今は三十七人の妾を蓄へ、毎人二三の領所を與へ、新座、本座の田樂二十餘流にして、其俳優二千餘人あるに至る。中につきて高時最も鬪犬を好みしかば、部下多く奇犬を養ふて其意を迎かへ、靡然として風を爲し、武士多く美食を盡くして鬪犬を養ひ、是より毎月十二回鬪犬の會を開きて二三百疋を一場に會して勇怯を鬪はしむ。之かため鬪犬の鎌倉に集るもの四五千。一疋の價二三十貫より百貫に至り、高時の鬪犬道を行くや、路人笠を脫して跪くに至る。此等の驕奢獨り高時に至りて發したるにあらずと雖も、高時に至りて最も其流弊を極めし也。驕奢より寡欲失せ、寡欲失せて賄賂來り、賄賂來りて誅求となり、偏頗となり、北條氏が天下に立つ所以の力は根本より失せぬ。

二百三十九節　後醍醐出づ、中宮藤子政治に與かる　鎌倉が此の如く天下の信用を失するの時、西、京都にありては、近世稀有の才能ある君主を見るの時に至れり。文保二年、花園帝二十二歲にして、三十一歲の太子尊治親王に位を讓る、之を後醍醐天皇とす。後宇多の第二子にして、母は談天門院と云ふ、參議藤原忠繼の女也。後醍醐大覺寺派を以て後花園の太子たる八年にして、且つ年齒、花園より長すること九歲、後宇多上皇等其一日も速に皇位につかんことを望む。北條氏即ち花園に促かして位を去らしめて後醍醐を立てし也。後醍醐少にして才氣あり、龜山上皇の

殊寵を受け、長く儲位にありしがため、中外の事情に通じ、且つ其讀書學問は人に秀づることの一等にして、其位に即くころは、才氣自ら用ひ、古の賢君の治を以て自ら期し、精勵治を求め、大津葛葉の外、皆な新關を廢して民に便す。また久旱して穀價騰貴するや、御膳を減じ、沽酒の法を定め、都下の豪戶富民に諭して貧民を饒きはしむ。京都の小民、相慶して以て明主となし、聲望直ちに五畿に傳はり、人心漸く皇室に向ふ。之より先き太政大臣西園寺實兼の女を納れて中宮とし、後京極院と號す。安野中將藤原公廉の女廉子後京極院の侍女たり、帝一日、之りを見て直ちに殊寵を與へ、遂に准后の位に上らしむ。皇子恒良、成良、義良は其腹に出づ。之より廉子の寵遇後宮を傾け、御前の評定、難訴の沙汰も皆な廉子の啄を容れざるなきに至り、稍や民望を得んとせる朝政、また漸やく亂れしかば、外間、廉子を以て鳥羽上皇の美福門院に比し、亂階或は之より生せんことを恐る。然れども帝之を察せず、其出恒良を立てゝ皇太子たらしめんとす。北條氏聽かずして曰く、是れ大覺寺派をして長く皇統を專らにせしむるもの也と。遂に後二條の皇子邦良を太子とせしかば、大覺寺の諸流皆な切齒して、持明院派と北條氏とを憤る。中にも三位の內侍廉子、其子を立つるを得ざるを怨みて恨骨髓に徹し、北條氏なかつせば、天下思のまゝなるべしと謂ふ。天皇此より北條氏を亡ぼして君主親政の昔に返さんと欲するの志あり。時に河內守*重*信京師に宿直して此形勢を目擊し、思らく北條氏、天下

の友人にして常に之より學を請ふ。先き六年朱子の四書集註初めて我國に至るに及び、廣信深く其味ふ所あり、藤房を勸めて之を學ばしむ。然れども藤房の學、儒佛を混じ、遂に廣信の意に適はず、能はく聽かず、後醍醐帝位に即くの日、藤房世を捨てゝ逃れしも、廣信の爲すの所に感じたるを以て、廣信亦た義を以て重ねて招くの書を辭し、文紀六十七卷を著はして、延元元年死す。年九十六。其書今や傳はらず。

二百四十節　所在の武士、北條氏の命を奉ぜず

然れども世は西行の跡を追ふ廣信の如きものゝみならず、事會に投じ、功名を爲さんと欲するもの多かりき。先づ皇族にしては大覺寺流は如何にもして北條氏を亡ぼし、持明院派を衰へしめ、以て皇統を長く一流に專らにせんと欲するあり。公卿にしては西園寺の一家のみが鎌倉に結びて、太政大臣關白を專有し、女御皇后を出すこと、後嵯峨以來已に五代なるを憤りて、如何にも北條氏を亡きものにして、西園寺家の權勢を奪ふて其榮華を分たんとするものあり。之を寺院としては、北條氏衰へたりと雖も、猶は武權を握つて、朝廷の後楯となるがため、嗷訴、力訟も其功薄きを憤り、哀れ神輿一たび動かば、朝政爲めに止まりし藤原氏の世に返さんと欲して北條氏の亡滅を希ふ延曆寺、東大寺あり。而して諸國の武士また泰平日久しきがため、其實力漸く發達し、其所領、官職其の實力に伴はざるがため、世變に乘じて其大志を遂げんとするものあり、源平二氏の大亂以來、久し

く首を屈したる武士が、漸やく其の傷痍を回復して世變を待つあり、況んや鎌倉譜代の諸士もまた高時の驕奢、長崎高資の偏頗に望を絶つて、世變を望むあり、天下大亂の兆、歴々として存したりき。而して先づ此の大勢に乘じて陳勝呉廣たりしものは、安藤又太郎助清なりき。安藤一家は北條義時の世より、奥州津輕を領せるもの也。此時、一族の中五郎三郎と又太郎助清と從父昆弟を以て其所領の境域を爭ふて鎌倉に訴ふ。長崎高資、二人より共に賄賂を受けて久しく訴を決せず。二人怒つて鄉里に歸り、一族郎黨を募りて兵を擧げ、戰によりて訴を決せんとす。高資人を遣りて和解せしむれども聽かず、五郎三郎遂に敗死す。又太郎、已に勝つと雖も、却つて鎌倉の譴を得んことを恐れ、寧ろ鎌倉の兵と戰つて死せんと欲し、族黨を擧り、兵糧を集め、浮浪を募り、近傍を略せしかば、鎌倉即ち將を發して之を攻むると雖も、勝つ能はず、却つて士兵のために劫掠せらる。然れども高資以て意と爲さず、眇たる北卑の士兵、顧みるに足らずと爲す。此に於てか世變を待ち設け、機會もあらば乘せんとせる者は、私かに鎌倉の武權已に恐るゝに足らずとなしゝかば、攝津の住人渡邊右衛門尉なるもの、また兵を起して近隣を攻略し、六波羅の命を奉ぜず。北條氏即ち河内の人、楠多門兵衛正成に命じて討つて之を夷げしむ。已にして紀伊の安田莊司も、また兵を擧げて叛す、また正成をして夷げしめ、其所領を正成に與ふ。已にしてまた大和の越智四郎もまた叛す。六波羅兵を出して之を攻めて勝

たず。また正成をして擊つて之を夷げしむ。此の如くして刻々、北條氏の不信、武權の衰弱は天下耳目に印せられ、西南武士は漸やく頭を擧げ、他年、宮廷黨の勇將たる楠氏は、先づ鎌倉黨として首を擧げ來れり。

此年六月、後宇多上皇崩ず。

二百四十一節　朝廷、武士と結びて鎌倉を覆さんとす

此の如く天下已に動搖するや公卿長く默する能はず。正中元年、權中納言日野の資朝、右少辨藤原の俊基、中納言四條の隆資、大納言尹の師賢、平の成輔等謀主となりて僧侶及び武士と結托す。時に義濃の住人土岐伯耆の十郎頼貞、多治見の四郎次郎國長の二人あり。自ら清和源氏の後胤と稱し、武勇の名あり。資朝、事によりて之と親近し、宮中に無禮講なるものを設け、四人の謀主、土岐以下の武士及び公卿には洞院左衛門督實世、僧侶には伊達の三位房游雅、聖護院の法眼玄基、武士には足助次郎重成等を會して衣冠を脫し、位次を亂だし、二十餘人をして酒を行らしめ、淫蕩、猥雜を極め、交情相熟するを俟つて陰謀を告ぐ。猶ほ世人の之を怪しまんことを恐れ、文名ある玄慧法師をして韓退之の文を講せしむ。已にして頼兼の族黨、頼員、妻と別を惜しみて其の陰謀を告ぐ。妻之を其父に告ぐ、父は六波羅府の將、齋藤四郎左衛門尉利行也。六波羅の北方、常盤範貞先づ揚言して曰く攝津葛葉の民、代官と爭ふて亂を爲すものを征せんがため、四十八所の篝火及び在京の武士を募ると。宮廷の黨與、事已に洩れたるを知らず、六渡羅の催促によりて葛葉に赴かんとす。六

波羅の府人、急に擊つて土岐多治見の族黨を亡ぼし、俊基、資朝の二人を執へて鎌倉に送る。時に正中二年九月也。俊基鎌倉にありて頻りに事に與からざるを辨じ、無禮講を知らず、文禮講を知るのみと云ふ。鎌倉相議して資朝を佐渡に流し、俊基を釋して京に返らしむ。後醍醐、恐怖、即ち誓文を高時に下して曰く、叡慮不僞處、任天照覽と高時また深く穿鑿せず。

二百四十二節　後醍醐、寺院に賴つて北條氏を謀る

越えて嘉暦元年三月に至り、太子邦良親王薨す、邦良は高時が曾て三位の內侍廉子の子、恒良を排して立てたるものにして、其の薨去は持明院派の悲にして、大覺寺派の喜悅なりき。故に後醍醐之を機として護良親王を立てゝ太子とせんとす。護良は大納言三位源師親の女によりて生める所にして、剃髮して妙法院主たり、尊雲親王と稱す。資質輕驃と雖も勇武あり、氣象峻嚴、最も朝廷の公子に缺く所の膽氣を有し諸ろ事を好む公卿の希望を一身に負ふ。後醍醐、恒良に繼ぎて之を愛す。即ち北條氏に詔して曰く、護良を立てゝ太子と爲し後嵯峨帝の遺詔の如くせんと。高時聽かず、兩統交立の約を主張し、後伏見の皇子量仁親王を立てゝ皇太子とす。後醍醐之によりて憤懣し、また機を窺ふて北條氏を亡ぼさんと欲し、中宮の安產を祈るを名として、忠圓、文觀、圓觀の三僧をして北條氏を咒詛せしめ、元德二年二月奈良に行幸して東大寺に入り、衆徒を煽揚して其心を攪り、また還て叡山に行幸して山門の大衆に結ぶ。護良また讀經禮佛を廢して、專ら武技を磨きしかば、藤原氏以來却掠鬪爭に習へる山僧は今は忽ち公然たる一大軍隊と化しぬ。已にして天皇の企謀稍や洩る。六波羅即ち三僧を執へて鎌倉に於て拷問す。文觀最も剛愎にして伏せざりしが、遂に水火の責に堪へすして自白し、忠圓、怯惰、直ちに自白し、尊雲親王、俊基の謀主たり、天皇、兩大寺院を誘ふを云ふ。即ち文觀を硫黃が島に、忠圓を越後に流竄し、圓觀を結城上野入道に預けて奧州に下し、また俊基を執へて之を大磯に斬り、前年佐渡に流竄せし資朝を殺さしむ。

二百四十三節　皇族兩派相陷擠す、後醍醐蒙塵を恐れて脫奔す

之より先き太子邦良の薨するや、大覺寺流は私かに相賀したりき。今や大覺寺流の失敗はまた持明院流のために私かに祝せられたり。持明院流思らく後醍醐、最早必らず廢せらるべく、帝位は必らす持明院流に落ち來らんと。案外にも後醍醐は其位を去らず、帝位は落ち來らさる也。此に於てか痛く望を失して早く廢黜あれかしと思ひ、遂に使を鎌倉に下して後醍醐の陰謀、隱れなし、之を糺さすんば天下の大亂たるべしと云ふ。鎌倉即ち二階堂貞藤等をして、三千の兵を率て京師に入り、後醍醐を遠島に移し、護良親王を硫黃ヶ島に流さんとす。護良親王課して之を知り、帝を勸めて笠置山に行幸せしむ。帝之を聞き、驚愕出る所を知らず、從臣の慫慂により、遂に女裝して出づ。相隨ふもの尹の大納言師賢、萬里小路中納言藤房其弟季房、源中納言具行、按察大納言公敏、六條少將忠顯、大膳大夫重康、樂人豐原兼秋、隨身秦久武等のみ。先づ南奈良に至りしに、衆徒の心計るべから

ず、即ち一味の衆徒のみを率ひて、笠置に至り、別に師賢をして天皇と稱して四條中納言隆資、二條中將爲明、中院左中將貞平を從へて、敵山に至らしむ。山僧天に喜び近國の武士と力を幷せ、六千人を以て守備を整へ、將に六波羅を襲はんとす。六波羅、山僧淨林房豪譽の內通によりて之を知り、急に五千餘人を發して之を攻む。山僧能く防ぎて容易に破るべからず。已にして天皇と稱せるもの實は師賢なることを露るゝや、衆心離散して、山僧遂に敗走し、護良師賢もまた笠置に走る。

二百四十四節　正成の現出、後醍醐隱岐に移さる

此時に方つてや西南の武士、鎌倉の武權恐るゝに足らざるを發見せしかば、所在、力を養ひ、機に乘じて起たんとす。中につきて、元亨正中の年、高時の命により、近畿の亂を夷げし楠正成、最も勇名あり、後醍醐即ち使を發して之を招く。正成召に應じて至り、身を以て王事に勤めんことを誓ひ、還つて赤阪の城を修めて、六波羅の兵を待つ。已にして敵山を攻めし北軍、勝に乘じて直ちに笠置を攻めて之を拔くや、帝走つて赤阪の城に至らんとして道に執へらる。此に於てか高時、二階堂貞藤、安達高景をして皇太子量仁親王を立てゝ帝位に即かしむ。之を光嚴帝とす。また後醍醐を隱岐に移さんとし、三千人一をして之を護送せしむ。備前の人、兒島高德其族黨と共に道に帝を奪はんとして、舟坂に俟つ、車駕舟坂に出でずして山陰道に出づ。高德急に之を追ふて及ばず、族黨悉く散ず、高德即ち單身之を追ふて一夜美作の院の庄の行在に忍びて櫻樹を削り、字を書して曰く天莫空勾踐、時非無范蠡と明日警固の武士之を見て怪み、其意を解する能はず、天皇獨り之を見て心私かに喜ぶ。已にして天皇隱岐に至り、國分寺を以て行宮とす、朝臣の從ふもの唯だ一條の頭大夫行房、六條少將忠顯、三位內侍廉子のみ。

二百四十五節　北軍戰志なく、所在の豪族、北條氏に背く、新田義貞、赤松圓心出づ

落すや、直ちに赤阪に正成を攻む。正成衆寡敵せず、自殺せりと號して兵を收きて退く。備後之より先き、北軍已に笠置を

の人、櫻山玆俊もまた兵を擧げて一の宮に城き國中を徇へしが、笠置落るに及び黨與離亂、玆俊自殺す。北軍思らく、天下是より無事なるべしと。然れども禍患は、京畿の中より起りぬ。護良親王は吉野に據り、土豪竹原八郎の女を納れて其族黨に賴り、また紀伊の人野長瀨兄弟の兵を幷せ、吉野の僧兵三千餘人を以て、吉野河岸に城を築き、令旨を諸國に發して勤王を勸む。正成もまた急に起つて湯淺六郎定佛を攻めて、之を降だす、湯淺は六波羅府の命を奉じ、正成に代つて地頭たりしもの也。正成其兵を併せて近傍を略定し、勢漸く強大にして、今は容易に征服すべくもあらず。之と共に、護良の從士、律師則祐、其父、赤松圓心に勸めて兵を擧けしむ。圓心は播磨の人、自ら源氏の子孫と稱し久しく功名に意あり、護良の令旨を得、黨與を募りて一千餘人を得、播磨佐用の庄、苔縄山に城を作り、杉坂山に二關を設けて山陽山陰の交通

を塞く。是より南方の騒息、六波羅に通せず。六波羅府、急に使を發して形勢容易ならざるを鎌倉に告げ、坂東の諸族を促がして西上せしむ。北條の一族外様の大小名、京師に上るもの、一百三十二家、兵數十餘萬。然れども其心一ならず、寧ろ天下の形勢を觀望せんとするもの少なからざりき。故に九月二十日鎌倉を出でゝ十月八日先陣已に京師に到るに、後陣は猶ほ足柄を越へざるものあり、以て其の戰志なかりしを見るべき也。已にして河野九郎、四國の勢を率ひて尼ヶ崎より上洛し、厚東入道、大内の介、安藝、長門、周防の兵を率ひて海路兵庫に上り、甲斐信濃の源氏は中仙道を經て、江馬越前守、淡河左京亮は北陸の兵を率ひて上洛し、九州を除くの外、北條氏の命を以て動かし得べき凡べての兵は、京師に集りぬ。然れども、數十萬の大軍、徒らに集りたるのみにして、彼等を統一して動かすべき首領を有せざりき。北條氏の一族仲時、時益、六波羅を鎮すと雖も泰時が承久の戰を指揮したるが如き威望あるにあらず。諸將各〻相高ぶつて統一を欠く。故に其幾十萬の衆も猶ほ幾萬の兵の如し。彼等は文弘二年二月先づ赤阪千早に正成を攻めたり。而して連戰連敗、徒らに正成の功名を成さしめぬ。已にして吉野を陷れしと雖も、却つて護良の指揮を奉ずる土寇のために、其糧道を妨げられて、衆心紛々、歸一を失し、戰志なく、觀望を事とする諸將をして、愈よ自ら危ぶましめたりき。而して諸將の中、最も早く心を翻して勤王黨に向へるものは新田義貞なりき。形勢此の如くなるが故に數十萬の衆ありと雖も、正成をして千窟を守らしむると五十餘日、遂に之を扱く能はず。此時に方つて、後醍醐を守護する佐々木清高の族人義綱、帝を奉じて事を擧げんとし、正成圓心の事を以て私かに帝に奏して、還幸を勸む。帝一夜女裝して內侍三位と號し、源忠顯を從へて逃れ、千波港より舟に乘じ、風に送られて二月伯耆名和港に着く。忠顯自ら州の豪族、名和長年を說きて之に賴る。長年悅で之を諾し、一族百五十人、帝を舟上山に擁して近國の武士を募る。佐々木清高之を攻めて勝たず。形勢漸く張り、佐々木義綱、鹽冶高貞、兒島高德等を初めとして豪族相率ひて來る。六波羅の諸將之を聞きて震驚す。已にして、赤松圓心は六波羅の兵を播津の麻耶山に破り、土居得能の二氏は伊豫に起りて、中國の探題北條時直を追ひ、菊地氏は肥後に起りて、九州の探題北條英時と戰ひ、所在の豪傑、相起つて北條氏の守護地頭と戰ふ。

二百四十六節　足利高氏六波羅を陷る

時に足利高氏、北軍の中にあり、其先、源義家に出づ。義家の子義國、罪を得て下野に流さる、義國二子あり、義重、義康と云ふ。義重は上野の新田に居り、足利氏の祖たり、故を以て高氏、また鎌倉中の名族として推尊せらる。今や、北條氏、天下の權を失するを見て、變に乘じて家を起さんと欲し、族黨細川和氏、上杉重能また之を慫慂す。故に其高時の催促によりて鎌倉を出るや、已に異志あり、妻子を伴ふて發せんとす。長崎高資之を疑ひ、高時に勸めて、其妻子を質として且

*北條の一族には阿曾名、大佛、武藏、伊具、陸奥の諸家、外様には千葉、宇都宮、小笠原、土岐、葛西、三浦、千田、城、佐々木、結城、長崎、長江、小田、長沼、遠山、狩野、河越、工藤、安藤、伊東、宇佐美、二階堂、南部、山城、安保。

つ誓書を徴せしむ。高氏之を拒まず、高時心即ち釋け、且つ之を勵まさんがため、源家傳來の白旗を以て贈とす。高氏私かに其吉兆を悦び、弟直義、吉良、上杉、仁木、細川、今川、荒川以下の族黨三十二人、高家の一類四十三人と共に三千人を率ひて西上し、直ちに使を伯耆に走せて後醍醐を助けんことを内奏す。帝固と其威名を聞くを以て大に喜び、朝敵退治の綸旨を下だす。已にして源忠顯、赤松圓心等京師を攻む名越高家、高氏の陰謀を知らず、圓心等を邀へ、孤軍憤鬪矢に中つて死す。高氏之を聞き直ちに丹波路を指して進み、篠村に至りて勤王の意を明にして、近國の武士を募り、二萬五千餘人を得て、五月七日忠顯、圓心と相應じて六波羅を攻めて之を敗る。仲時、時益、光嚴帝、後伏見花園の三皇を奉じて北に奔りしが時益道に流矢に中つて死し、餘衆、近江の番場に至るところ士兵數十人のために攻められ、死するもの四百餘人。仲時自殺して新主二上皇皆な南軍の執ふる所となる。此に於てか所々の北軍皆な或は奔り或は降り、千寶の圍も從つて解く。

二百四十七節　義貞、鎌倉を覆す

之より先き新田義貞、北軍の衆心懈怠して鬪志なく、天下大亂の兆を見、人をして護良親王の令旨を請はしめて私に鄉里に歸りしが、義貞の鄉最も豪富多きを以て、高時軍費を課すること最も多し、義貞之により衆心を激勵し、高時の使を殺ろして之を梟し、族黨山名、堀口、大館、岩松、桃井、脇屋、江田、及び越後にある支族里見、島山、田中、大井田、羽川と共に兵を擧げ、守護長崎四郎左衛門を破り、進んで武藏に入るや、高氏の子千壽（義詮）また紀五郎左衛門に擁せられて義貞の軍に加はり、勢威漸く張る。此に於てか上野、下野、上總、常陸、武藏の豪族來り合するもの無數、鎌倉の兵と入間河に戰つて之に勝ち、進んで分陪に迫るや義貞大敗、全軍將に解走せんとする時、相摸の人三浦、大和多の族黨義貞を助けて鎌倉の軍を攻めて之を破り、長驅席卷して鎌倉に入り、三方より之を挾擊す。之より先き高氏背叛の報已に至りて衆心、沮喪す。今やまた義貞の襲擊に遇ふて將士皆な絶望し、堅忍勝を望むよりも、寧ろ勇戰して潔よく死せんことを欲し、猛將勇士、多く陣沒せしかば、五月二十三日高時遂に葛西谷に自殺し、征夷大將軍守邦親王、剃髮して義貞に降る。此の如くして賴朝以來三將軍、九執權、一百六十年の覇業は、一朝にして滅し。久しく夢想せられたる君主親政の時は來りぬ。

二百四十八節　王朝黨武士黨の反目、人心王政を厭ふ

然れども事實は君主親政の必しも美事にあらざるを示しぬ。鎌倉沒落の翌日、後醍醐、舟上山を發し、六月二十日京師に入り、即日刑賞を施し、治部大輔足利高氏を治部卿に陞叙し、弟兵部大輔直義を左馬頭に任じ、思らく以て歸順武士の心を收攬するに足ると。此時に方りて護良親王、志貴山の彌沙門堂にあり、後醍醐の入洛を聞くも敢て之を迎へず、頻りに諸國の兵を徵して武備を嚴にせしかば、朝廷武臣之を怪しんで、

*足利氏の一黨、高師直の家最も大也。

擾亂、再び生せんことを恐る。後醍醐、右大將、藤原清忠をして、速に剃髮して山門に歸るべしと告げしむるや、親王答て曰く、天下一統、治平に歸りしこと、陛下の德澤に出ると雖も、また臣が籌策の功による、然るに高氏、一戰の功を恃んで專橫也。今にして之を誅せずんば他日の禍計るべからず、剃髮の命決して奉ずべからず。兵備決して撤すべからず。願はゝ は臣を以て征夷大將軍たらしめよと。天皇其專橫を惡むと雖も、已むを得ずして征夷大將軍を許し、高氏討滅の一事は行ふべからずと詔す。護良大將軍を得て大に喜び赤松圓心、殿の法印良忠、四條少將隆資、中院中將定平、千種中將忠顯、以下近畿の將士數千を率ひて入洛す。護良は最も能く當時に行はれたる貴族公卿、及び近畿武士の意見感情を代表せるもの也。彼等思らく今回の大變、之を開きたるものは公卿なり。最も苦心せるものは公卿及び近畿の武士也。大變の目的は武門の專權を停めて、朝廷に收め源平の爭亂以來埋沒せんとせる貴族的王朝を復興するにありと。彼等は何所までも南人也。故に大變漸やく收まるや、先づ其恩賞に與かるものは、公卿、及び之に付隨したる近畿武士ならざるべからずと爲す。朝廷公卿の間、幾個の小黨與あるに係はらず、武門を抑へて公卿を伸ばすの意見に於ては相一致しぬ。故に內侍三位廉子等が護良を惡むに係はらず此の意見は滔々として事實に顯れ來りぬ、公卿は源平の騷亂以來久しく沈淪したりしに、今や漸く時めくに至りしかば、あらんかぎりの驕奢を盡くし、あらんかぎり

の權勢を張りて、再び武門を犬豕の如くに見たる藤原氏時代の光景を生せんとす。千種中將忠顯は放蕩無頼、博奕に耽り色を漁し、父に追はれ、同族の彈斥する所となれるもの也。唯だ其後醍醐に從ふて隱岐に上下したるの故を以て、大國三個を領して、數十の莊園を得、貧寒の公卿、一朝にして三百餘人の侍を養ひ、五十六の馬を蓄ひ、日夜酒宴を事とするに至り、北條氏の調伏に與りて流罪せられし文觀僧正、今は倉廩を立てゝ財を積み、武士を集めて威勢を作り、刑賞多く其の媒介に成りしかば、文觀の黨と稱する武士五六百人あるに至り一個の僧正道を行くに騎士數百喝道するに至り、其他公卿貴族多く國司守護として、諸國に下りて、武士土豪に代りしかば、武士勢を失して顏色なく、公卿の跋扈、僧侶の飛揚は、藤氏專權時代の如くなりぬ。已にして八月、洞院の左衛門督實世をして、武士の勳功を沙汰せしめんとするや、譖譖、訴訟、百端にして決し難く、一ケ月にして僅かに二十餘人の恩賞を定めたるのみ。此に於てか更らに萬里小路の中納言藤房をして之に代らしむるや、紛亂、前日よりも甚しく、徽勳些功なきも、宮人の奏によりて數所の領地を得るあり。大功偉勳の士も宮人に結ばざるがために退けられて一の恩賞を得る能はざるあり。紀綱蕩然として崩れまた收拾すべからず。而かも財用は一日もなかるべからざるが爲め諸國の地頭より、其の收入の二十分一を朝廷に徵して、賴朝の財政に倣ふ。此に於てか藤房數は前古の歷史を引きて後醍醐を諫むるも、賢君は一朝にして人

言を拒み朕より自ら古を爲さんと號して聽かず、却つて九條民部卿光經をして藤房に代らしめ、高時の所領は一切天皇の御領とし、高時の弟、泰家の所領は一切、護良親王の所領とし、鎌倉の雄族、大佛一家の所領を三位准后廉子の所領とす。其他雄族の所領、多く妓女、俳優、內官及よび公卿黨に屬する武士に分配せられしかば、諸國の武士、悵々然として望を失し、勤王黨に與みしたるの大早計なるを憾み、寧ろ武家政府の今一たび立たんことを希ふものあるに至りぬ。蓋し貴族的王政は王朝時代に於てすら、凡べての國民、凡ての武士に感得せられたるにあらずして、僅かに近畿の民、在朝の公卿間に懷抱せられたる思想に過きず。九州の地、日本海に面する諸國、東國北方の地は、未だ其化に浴せすして、疎獷俗を爲し、力征の前に屈すべからさるものなく、實力の外に權威なるものあるなきを信じたり。彼等が起つて勤王黨に合して北條氏を倒したるものは、其の獲物の鎌倉政府の下に得るよりも多からんことを欲して起ちし也、故に彼等は塲合によりては北條氏を倒したるが如く、新朝を倒すを憚かるものにあらず。北條氏と新朝と、尊卑の別あるなし。問ふ所は其我に與ふる獲物の大小に存す。此の如き動機によりて起りし武士は固より後宮內官政治を見て、平然たる能はさるもの自然の勢なりし也。驕慢なる貴族之を察せず、天下萬民、皆な貴族的王政を希ふものとなして、自ら欺き、揚々乎として其權勢を弄しつゝ進みぬ。

已にして正慶三年を改めて建武元年となし、安藝阿波二州の租稅を以て之に充て、且つ諸國の國司地頭の所領二十分の一を以て、朝廷の料として、以て皇權を張らんとし、また國用の不足を補はんがため紙幣を發*して、强いて天下に通用せしめしかば、武士は其の誅求の重きを怨み、平人は惡貨の流布に窮しぬ。已にして功を論じ賞を行ふに、足利高氏、功第一たりとて武藏常陸下總の三國を與へ、弟、直義に遠江、新田義貞に上野、播磨、其子義顯に越後國、弟義助に駿河國、楠正成に攝津河內、名和長年に因幡伯耆を與ふ。此に於てかまた武士の間に二個の黨派を生じぬ。後醍醐、有爲の君と雖も、其の過失は、多く自ら用ゆると、敢爲、他を排するにありき。護良親王が死生の道を來往して回天の業を助くるや、後醍醐、未だ其功を賞せずして、先づ其の山門に歸らんことを求めたり。今や後醍醐の眼は、直ちに高氏の上に注がれぬ。天皇舟上山にありて高氏の事を聞くや、大に悅べりと雖も、また深く其の心術を危疑して、第二の北條たらんことを恐れたり。今や京師に下りて諸國武士の向背を察るに、人心自から高氏に歸せんとするを見たり。これ慧眼にして併かも細心なる後醍醐の看過する能はざる所也。故に護良に對する猜疑は高氏に向けられ、其名の尊治の一字を取つて高氏に與へて尊氏となし、以て寵用の外貌を示すと雖も、內常に之を除かんと欲す。義貞、正成に二國を與ふる時に、尊氏に三國を與へて之を

*此年乾坤通寶の銅錢を作り銅楮併用せしむ。

從來多く、後醍醐を以て尊氏に迷ひて其の患を饗へりと爲す。

敬重するの風を示めすと雖も、義貞の一族には更らに分國を與へて、其力を等うし、且つ武者所を設けて、諸國の武士を統轄せしめ、尊氏と好情を有せざる義貞をして、其頭人となりて、以て武權を掌握して、高氏に備へしめぬ。また參議北畠顯家をして義良親王を奉じて奥羽を鎭せしめ、成良親王をして鎌倉に下つて直義の主たらしめ、以て皇權を張つて武士を抑へんとしぬ。此に於てか、新田及ひ楠、名和、赤松以下近畿中國の武士、遂に兵力によりて尊氏を除かんと企つ。唯だ其兵力强大なるがため容易に發せさりき。故に高氏等及ひ北方の武士は快々として樂まず。此の如して天皇は尊氏を疑ひ、公卿は武士を抑へ、西南人は北人を抑へ、一統の天下また漸やく二分せんとし、兩黨、相鬩視して發するの機會を窺ひ、形勢紛々、大亂將さに一起らんとす。萬里小路藤房、最も治躰に明かに、數ば後醍醐を諫むと雖も、大勢遂に回すべからさるを見て、即ち去つて身を雲水に托して行く所を知らす。

三百五十節　後醍醐、尊氏を除かんとし、尊氏鎌倉に自立す

已にして建武元年三月、本間澁谷の諸族、兵を板東に起して鎌倉を攻む。時に直義鎌倉を鎭し、擊つて本間等を破る。本間等は北條氏を復興せんとせるもの也。已にして西園寺大納言公宗、其家北條氏の下に榮へて、王政の下に衰へたるを憤り、高時の弟泰家を養ひ、後醍醐を其の北山の第に誘ふて、私かに之を弑せんとして事現はれ、人心恟々たり。護良等、此機に乘じて尊氏を暗擊せんとして、兵を近畿に召す。尊氏即ち兵を集めて自ら守り且つ護良兵を徵するの書を以て之を後醍醐に詰る。朝廷震驚、承久の役を重ねんことを憂ひ、以て護良の罪となして、之を執へて尊氏に與ふ。尊氏即ち細川顯氏をして護良を護して鎌倉に下らしむ。此くの如して尊氏は公卿の下には、其兵權を保つべからず。南方武士の下には生存の道なきが爲め、進むによりて生くべく、退くによりて死すべきの地位に立ち、唯二個の活路を有するを見たり。一は時代の精神に從ひ天下を力征して幕府を立つる也。一は勤王の名を保たんがため叡慮を上なきものとして其有する凡べてを擲つて、山林に藏るゝ也。北人なる尊氏は直ちに北人的の撰擇を爲しぬ。彼れは少數貴族の間に行はるゝ勤王の名をすてゝ、力征の實を取らんと決しぬ。建武二年七月、北條時行、兵を信濃に起して五萬餘人を得て鎌倉に迫る。時行は高時の次子にして、高時死に臨んで諏訪三郎盛高に托したるもの也。直義迎ひ擊ちて利あらず。即ち護良親王を害し、成良親王、足利義詮を伴ふて三河に出づ。尊氏、鎌倉の急を聽き、自立の機至れりとなし、自ら之を助けて北條時行を擊たんと請ふ。朝議許さず。尊氏曰く是れ一身の故にあらず、天下の爲なりと。即ち八月二日告げずして京を出づ。天下朝政に飽き人心變を思ふの時、尊氏一たび足を擧ぐると聞くや、武士相賀して競ふて之に加はり、之に加はらざるものは去つて本領に歸りて、大亂に應ずるの準備を爲す。之がため京師に頓塞したる大軍頓に空し。已にして尊氏の軍、時行の先鋒を遠州の橋本に破り、

長驅深入、七戰七勝して、八月十九日鎌倉に入るや、時行脫奔して其族黨家人或は自殺し、或は奔竄す。京を出でしより二十餘日にして北方全く定まる。此に於てか、朝廷中將貞光を勅使として尊氏に云はしめて曰く、速に內亂を夷げしは朝廷の深く稱する所也。但し軍兵の恩賞は、朝廷自ら之を行ふが故に速かに歸洛すべしと。尊氏の眼中已に朝廷なし。何ぞ、勅旨を奉せん耶。勅使は徒らに冷笑を買ふに過ぎざりき。

二百五十一節　大將軍は北方の皇位、義貞、尊氏を征す

然れども尊氏等の疎獷、猛野なるも、猶ほ、皇位を奪はんとするが如き野心はなかりき。彼等があらゆる痛語を以て歷史上に非難せられたるに係らず、彼等は大將軍府を立てゝ自ら賴朝の爲したる事を爲さんと欲するに過ぎざりき。唯だ賴朝の時は後鳥羽が速に之を識認し、尊氏の時は後醍醐之を識認せざるの一事ありしのみ。然れども若し之を以て歷史ありて以來の大亂の首動者は、依然として歷史上の勢力に制せられ、歷史の前例に遵ふの外なかりしと思はゝ是れ大なる誤謬なり。今日に於てこそ大將軍なるものは、一の軍士に過きずと雖も、當時にありては其の文字以外、人をして渴仰禮拜せしむべき一の魔力を有し、殆んど北方の天子と云ふが如き意義を有し、而かも其實力の強大に至りては、更らに南方正統天子よりも恐るべきものと信せられたり。尊氏等暫らく北方天子の實權を執れば即ち足れりとせるのみ。即ち居を歷代將軍の故居若宮小路に作り、一族、郎黨、外樣の武士をして軒を並べしめ、また義貞の所領、上野を奪つて之を上杉の一族に與へ、其他關東諸國を割きて、將士を賞せしかば朝廷に屬せんとするものは南に上り、尊氏に屬せんとするものは北に下り、海道上下の行人織るが如し。朝廷遂に意を決して尊氏を征せんとし、義貞を大將軍として、諸軍を督して鎌倉に下らしむ。是れ義貞一生の光榮、得意の頂上にして。其族黨三十人の外、他家の大名、千葉貞胤、宇都宮公綱、菊池武重、大友左近將監、厚東駿河守、大內新介、鹽谷高貞、熱田の大宮司、武田甲斐守、小笠原信濃守、愛曾、遠山、高山、河越、兒玉、杉原、高田、藤田、難波、の諸族、舟田入道、由良、長濱、山上、波多野、高梨の徒、及び叡山の僧、道場坊の黨與等凡そ三百餘族を率ひ、十一月八日京師を發して、海道を下り、彈正尹の宮、忠房親王、洞院左衞門督實世、園中將基隆、三條中將爲冬等、新田の一族、大館、江田の諸將、島津上總入道、島津筑後前司、以下の諸族は山道より信濃に出で、鎭守府將軍、源顯家、義良親王を奉じ陸奧出羽の兵を發して三道、鎌倉を攻めんとす。義貞等、京師を出づるや、平義盛、源義親を征するの前例に倣ひ、舟田入道を二條高倉なる尊氏の邸に遣はし、三たび喊聲を擧げ、流鏑三矢を放ち、其中門の柱を切らしむ。軍容整正、劍戟、日に映じ、意氣大に昂る、朝廷思へらく以て鎌倉を覆すに足ると。

二百五十二節　義貞の位地、尊氏の人物

然れども人心已に王政に飽きて變を思ふ。大勢は必ずしも朝

廷の利にあらざりき。諸道の豪傑、王朝が貴族に厚くして、武士に薄く、朝分暮改の態あるを憤るのみならず、義貞の號令を奉じて征戰に出でしものも、早く大勢を觀望して心を二にするものありき。況んや義貞尊氏と等しく源氏の流を汲むと雖も聲望遙かに尊氏に及ばず。尊氏の家は其祖先は曾て北條氏に抗せんがために兵を擧げて敗死し、北條氏在世の時已に鎌倉の政府に畏敬せられて北條氏と婚を通じ、聲望坂東に隆々たり。故に元弘三年義貞兵を擧げて北條氏を攻むるや、尊氏の子、義詮、四年の少弱を以つて紀の五郎左衞門に擁せられ、五百の兵を以て之れに加はるや、八州の豪傑風を望んで義貞を助け、已にして義貞鎌倉を覆すや、義貞の功最も大なるに係らず、人心靡然として義詮に歸し、他日鎌倉の主として頼朝の故業を回復せんものは此君なるべしと思はしめ、義貞に黨する者と、義詮に黨するものと交も相爭ふに至りしかば、足利の族黨、細川和氏等義貞に迫て勝負を決せんとし、義貞誓書を以て他なきを示めして事なきを得たり。義貞の資望此の如く初より尊氏に及ばず、況んや義貞は勇武敢爲に於ては眞個、坂東武士の典型なりと雖も、其識度、膽略に於ては到底尊氏の敵にあらざる也。尊氏は後世勤王論の勃興したる時代の經典より論ずれば容すべからざるの大罪ありと雖も、其人物に至ては、日本の歴史ありて以來識量最も博く、膽略最も大なるものなりき。頼朝は八州の源氏を中心として天下の藩屏となさんとするに、彼は東西南北の別なく、凡べての豪傑を容れて拒まざる也。頼朝は其子弟宗室を殺盡せずんば心を安んぜざるに、彼は、一切の參晝を弟直義に委して顧みざる也。頼朝は法家的の森嚴を以て自ら威望を持し、部下之を畏敬して用を爲せしに、彼は森嚴を用ひず、平易寛洪を以て部下に接し、部下に土地を與ふること土芥の如くなりしかば、部下之を愛敬して用を爲せり。頼朝は愼重周密、必成を期せずんば事を起さず、彼は時に形勢を觀望するも、概して小說的の冒險家也。彼は頼朝と同じく武將にあらずして政治家なりき。然れども戰功は必らず賞せられ、微勳細功すら忘れられざるが故に、部下之が爲めに死するを厭はざりき。頼朝の事業は特に狹隘に失すると雖も結尾ありき。彼は頼朝よりも大膽、冒險、博大なりと雖も、其弊や結尾なく、秩序なきにあり。頼朝は恐るべき君主なりしも、彼は愛すべく親しむべき首領なりき。頼朝は味方に峻嚴なるが如く、敵にも苛急なりき、彼は其部下に大量なりしが如く、其敵にも寛大なりき。彼をして若し平時にあらしめば、また成功ある一大政治家たるを失はず。彼をして身を屈して朝廷に仕へ、簿書の間に進ましむるも、また遂に朝權を一身に集めずんば止まざるべし。然れども功名は彼が唯一の神にして此神を喜ばしむるは彼が唯一の歡樂たり。彼はあらゆる危難、あらゆる汚辱、あらゆる痛苦を以て此の歡樂を買ふを辭せず。彼は羅馬史中のシーザルが常に口にせる『若し正義と道理にして破るべくんば政權の爲めに破るべし』との格言は、また尊氏心中の覺悟なりき。要するに彼の

義貞高時を亡ぼすや若宮の拜殿にて刀を洗ひ、首實驗の後神殿を破つて源家の重寶を出すに、新田の族中黑なるが故に用なしと爲す。足利の族黨之を得んとして爭ふ。

心情は宏博にして寛裕、殆んど偉大、高尚に近きものありき。今や此の好男子は、古今の歴史に於て攻撃、非難のあらんかぎりを盡くされたる罪惡の事業を行んとす、何が故に然る乎。彼の罪惡を說明するものは、唯一あるのみ、即ち時代の精神是也。

二百五十三節　北人の政治思想、時代の精神となる

王朝藤原氏時代より平氏に至る間、平安の朝廷は眞乎に王化を總日本に及ぼしたるものにあらずして、近畿中國に孤立したるに過ぎず。自餘の諸國は貴族的王政を以て其思想とはせず、殊に北人は其勇武と豪健とを信じ、武力の外に尊奉すべきものなしとし、近世の言語を以て之を評すれば、武斷的民主政の思想を有したる也。賴朝も此思想を代表して起れり、北條氏も此の思想を後楯として廢立を行ふて、一百三十年の運命を保てり。今や北條氏倒る、と雖も、是れ功名を希ふの武士と朝廷公卿との無意識的聯合運動のために覆されたるのみ。北方の精神は猶ほ武斷的民主政に外ならざりし也。故に後醍醐が初めたる公卿政治は從來に比して一層苛察となり、一層收斂となり、一層信ずべからざるものとなりしかば、北方特有の武斷的民主政は地方的精神より一轉して、時代の精神となり、天下の人心却て武家の政治を希ふに至りぬ。此かる時代の精神ありながら天下悉く武家の有とならず、猶ほ多少王朝黨を存するものは、是れ必しも王政を以つて政治思想としたるにはあらずして、武家黨に對する個人的族黨的の恩怨、嫉爭の爲めなるのみ。天下の多數は固より何人たるを問はず、天下の權を取るものは、即ち天下の主人にして*、力征と國民の信服の前には何者も敵すべからざるものと信じたる也。此故に尊氏はシーザルの材を以て、直ちにクロムウエルの事業を行ふ。クロムウエルの時王朝黨と平民黨の相分れたるが如く、當時の天下は王朝黨と武家黨の二者に分れ、王朝黨は、多く文學あり、修養あり、禮節あり、國史を知るものにして、固より天下の少數たり。武家黨は無學にして俗野、國史を知らず、知るもまた之に從ふを潔とせず、大膽、敢爲、野馬の羈束すべからざるが如きものにして、此の主義を最も裸躰に、最も惡しく示めしたるものは高野師直也。彼れ將士に諭して曰く『汝等の所領にして足らざるか、天子の料を奪ふべし。生ける天子は世の費、民の妨也。必らず天子を要せんか木像か銅像にて事足れり』と而して是れ當時の國民の秀粹にして其議論は國論と云ふべき武士の多數によりて懷かれたる思想なりき。義貞少數を代表して、尊氏多數を代表す。義貞は固より時代の精神に背きてありし也。

二百五十四節　尊氏京都を取り敗れて九州に走る

義貞已に北征の途につくと聞くや尊氏は先づ其の族黨中、最も大族なる高野師直をして、義貞等を三河の矢矧川に防がしむ。義貞能く戰つて之を破りて遠江駿河に轉戰して、連りに進んで足利直義の大軍と手越河原に戰ひ、また之を破る。直義即ち退きて箱根山を守り、義貞伊豆の府中に陣して、後軍の至るを待つ。已にして尊氏直義の敗を聞き、自ら大軍を率ひて竹の下に出で、先づ新田脇屋の族黨を敗つて、二條中將爲冬を

義貞敗て退くや、天龍川に橋を架して渡る。尊氏軍を渡るや兵士橋を斷つて敵を防がんとす、義貞其武名を傷けんことを恐れて斷たざらしむ。以て當時の武人の面目を重ずるの念を見るべし。

殺ろし、進んで伊豆の國府に迫り、高きに臨んで義貞の營を下瞰するや、義貞の軍戰はずして走る。尊氏直義勢を合して長驅深進して京都に迫る。シーザル已にルビコンを渡る。此に於てか諸國の豪傑、世變を窺ふもの、皆な起つて尊氏に應ず。備前の飽浦信胤、田井信高は福山城に據り、兒島高德之を攻めて敗れ、細川律師定禪は讃岐の鷲田に起り、高松の守護舟木賴重を破り、備前に渡りて京に入らんとし、丹波の人、久下彌三郎時重は守護を破つて四方を侵略し、能登の普門藏人和清、國司、院の少將定清を石動山に破つて尊氏に應じ、赤松圓心は播磨に起り、加賀には富樫介、越前には足利義經の家人、伊勢には河野對馬入道、長門には厚東の一族安藝には熊谷、周防には大內介の族等皆な起つて尊氏に應ず。已にして尊氏兵を三道に分け、直義師泰をして勢田より、畠山上總介をして淀より、吉見三河守をして芋洗より、細川定禪をして山崎より、久下時重をして峯堂より、日を刻して京都を攻めしめ、尊氏自ら宇治に向ふ。京軍また義貞をして尊氏に當らしめ以下諸將各部署して敵を防ぐ。已にして、藤原師基、先づ峯の堂の守を失して諸軍繼で敗北す。義貞、正成、長年等天皇を奉じて叡山に退く。尊氏代つて京都に入り、細川定禪をして園城寺により、義貞等をして叡山に迫らしむ。時に北畠顯家、東北の兵を擧げ、鎌倉を經て尊氏の後を追ひ、往く〳〵新田氏以下足利氏を憤るものを集め、數萬を得て京に入る、義貞等大に悅び兵を合して定禪を攻めて之を破り、頻りに奇兵を放つて巷戰を試む。

京軍地理に熟し、北軍地理に暗く、大兵を以て數ば敗れしかば、尊氏遂に桂川に退く。已にして細川定禪義貞を襲ふて京都を奪ふや、尊氏京に入りしが、また義貞正成の襲ふ所となりて大敗して京師を出でゝ攝津に走る。尊氏の京師に入るや、實に建武三年正月十一日にして、其攝津に走るや三十日也。此役や尊氏其の族黨上杉禪門、三浦因幡守、二階堂下總入道、曾我太郎左衛門、二階堂信濃判官行周以下勇將猛士の多くを失し、軍士四散してまた爲すべからず。赤松圓心は曾て護良に應じて北條氏に敵したるものにして、朝廷の恩賞は其功に副はざるを憤つて尊氏に屬し、其鄉國、播磨なるが故に、西南諸州武士の心を知るもの也。即ち尊氏に說きて九州に下り、新たに回復軍を起さしめんとし、且つ敗北の罪を以て天皇を擁せざるに歸し、現皇の大覺寺派なるに乘じ、其の敵手持明院派より天皇を立て、錦旗を立てゝ戰ふべきを云ふ。尊氏即ち使を後伏見法皇の許に發して院宣を乞ふ。持明院派は後醍醐歸洛以後全く政治上に閑却せられしかば、躍躍して尊氏の請を許すす。尊氏即ち諸將を會して錦旗を立てしめ、且つ、赤松圓心をして、白旗城によりて播磨を守らしめ、尾張松田の一族をして三石城によりて備前を守らしめ、今川三郎四郎等をして輒、尾道によりて備中を守らしめ、桃井、小早川の一族をして安藝を守らしめ、周防は大島兵庫守、守護大內豐前守に守らしめ、長門は厚東太郎入道に守らしめ、四國は細川の一族をして守らしめ、以て京軍の追擊に備へ、海に航して九州に下る。

して去りしかば、朝廷大に喜びて、平氏の西海沒落に比し、天下の事、是より安しとなし、義貞をして山陰山陽十六國を管領せしめ、帝、其後宮の一人、勾當の内侍を與へて之を賞し、また建武の號武家に幸せりとなして延元と改め以て枕を高くして眠らんとす。獨り正成、前途を慮り、快々として樂まず。思らく、尊氏等九州を征服し、必ず新勝の威に乘じて上國を犯さん。此時に方つては京軍遂に之を防くの策なかるべし。初め笠置に勅命を承けて兵を起すや、國中響に應ずるが如く動きしに、今や族黨一類も猶ほ朝廷に黨するを難しとす。天下の人心、敗北せる尊氏に嚮ふて、勝ち誇りたる朝廷に背く、天下の事以て知るべき也と。遂に尊氏を招撫せんことを奏す。朝廷見て以て迂愚となして之を嘲る。然れども事實は遂に正成の先見をして適中せしめ、尊氏等九州に下るや、先づ筑前葦屋の津に上り、小貳賴尚に賴る、小貳は源家正統の將軍が九州の武士を賴むを以て、前代未聞の光寵と爲し、半神的崇拜の念を以て之を迎へ、一族郎黨、身命を盡くして肥後の菊池武敏と戰つて之を破る。之より四方嚮應して皆な尊氏に屬し、二月ならずして九州の武士悉く其爪牙となる。此時に方つて義貞其軍を分つて、白旗三石の諸城を圍み、備前備中美作の地を徇ふ。赤松圓心等急を尊氏に報ず。尊氏即ち一族四十餘人、高家の一黨五十餘人、上杉の一類三十餘人、外樣の大名、小貳、大友以下百六十人を率ひ兵船數千艘に乘じ、四月三日大宰府を發して上國に向ひ、五月十日、直義をして陸軍を率ひ、小貳賴尚を先鋒として鞆の津より上陸して中國を徇へしめ、尊氏自ら水軍を督して進み、水陸火を點じ、煙を發して呼應し、徃く〳〵兵庫に會せんとし、雄風堂々、氣先づ上國を呑む。此に於てか諸國の武士先を爭ふて來屬し、水陸二軍殆んど無人の地を行くが如く、五月二十五日京軍と兵庫に會して戰を開く。之より先き、朝議、正成をして義貞を助けて尊氏等を防がしめんとす。正成思らく尊氏の軍、氣、銳にして當るべからず。如かず暫らく其鋒を避けて敵山に幸し、其糧道を絕つて之を殲くさんにはと。公卿、兵を知らず、正成を以て怯として聽かず。正成遂に死を決して兵庫に下り手兵七百を以て湊川に陣して陸軍に當り、大館氏明三千人、脇屋義助五千人を以て義貞の二萬五千人と共に、和田岬にありて水軍に當る。戰は四方同時に起りぬ。脇屋義助の軍先づ敗れて義貞敗走す。細川定禪の兵、義貞等の逃路を塞がんとして急に生田の森を指して上陸し、擊つて義貞を敗り、還つて後より正成を圍む。正成寡兵を以て直義と對抗して苦戰、憤鬪、氣殆んど盡くるとき、更らに細川定禪の爲めに後を絕たれ、事遂に爲すべからざるを見て、一族郎黨、五十餘人と共に自殺す。此の如くして京軍は其の曾て有したる最も謀略に富み、最も純潔、誠忠、味方に用ひらるゝよりも、深く敵軍に畏敬尊重せられ、殆んど理想に近き將軍を失したりと雖も、彼の高尚なる感情は、詩に入り、歌に存じ、歷史に刻

まれて、長く國民の胸中に生き、當年の敗北者は、歴史の上に於ては赫々たる光榮を以て百千歳の人心を制す。*

二百五十六節　將軍より天皇の位を得たり

正成已に死するや、尊氏直義の軍相合して義貞を追ひ、矢下ること雨の如し、義貞刀を以て矢を截つこと十六度に及び、僅かに身を以て免れ、敗兵數千と相走つて京師に還り、五月二十五日天皇を奉じて叡山に逃る。此時後伏見の一族、また叡山に走らんことを促さる。然れとも已に曾つて院宣を尊氏に與へたるを以て、尊氏の速に來らんことを希ひ、僞つて病と稱し、輿を法勝寺に止む。已にして尊氏三十日を以て入り、叡山の軍と一勝一敗、容易く輸贏を決せすと雖も、大勢已に定まるを以て、八月に至り廢帝**の弟豐仁親王を立てゝ天子とす。是を光明天皇とす、年號は建武を用ゆ。天皇時に年十六。時人、相語つて曰く光明は幸多き君かな、一戰の功なきに、將軍より天皇の位を與られたりと。貴族的王政思想の中心なる京都に於てすら、如何に民心の一變し、如何に實權を尊びたるかを見るべきも也。

二百五十七節　京畿の戰、後醍醐、尊氏と和し、義貞北國に逃る

叡山に於ける義貞等は、大勢已に回復の望なきも、猶能く健鬪して京を襲ふこと數ふこと數ば也。是れ其の近江、越前より來る糧食に依頼し、却つて攝津山城の地理に通したるを幸とし、士兵僧兵を以て尊氏等の糧道を斷ちたるがため也

故に尊氏先づ莊園の寄附を以て、興福寺の僧徒を誘ふて叡山に叛かしめ、更らに足利高經をして大兵を率ひて北陸道を扼せしめ、小笠原貞宗、佐々木道譽をして近江を畧せしめ、義貞等の援兵、糧道を斷つ。叡山の兵、六月より籠城すること三ヶ月、人勞れ、食絶へんとするとき、また援兵、糧道を斷たれしかば、衆心離散し、隊を伺ふて退くもの日々夜々に多く、士卒に至てはまた戰志なきに至る。尊氏もまた戰に疲れ後醍醐と和して、速に事局を收めんとして、十月書を後醍醐に奉つて曰く、近年の兵亂臣、陛下に對して企てたるにあらず、義貞等讒臣の徒を覆し、再び讒佞の道なからしめんとするに外ならず、陛下若し臣が微衷を察して臣の罪を容るし、鴈を都に回さば供奉の諸卿、降參の諸將に至るまで、罪の輕重を問はず本官に安堵せしめんと。後醍醐大に喜び、左右また之を慫慂するものあり、義貞等に知らしめずして還幸の儀を修む。武士また和睦を望むもの少なからず、私に山下に出でゝ後醍醐に從はんとす。新田の族黨江田兵部少輔行義、大館左馬助氏明等、また其中にあり。義貞之を知らず、洞院の實世が報を得て初めて之を知り、未だ之を信せず、堀口美濃守貞滿をして之を視せしむ。貞滿參內すれば龍駕將さに發せんとし公卿列を正す。貞滿進で乘輿の轅を仰へて奏して曰く、陛下還幸の事、兒女の風說に聞くと雖も、義貞之を知らずとするが故に、臣等また信せず。圖らさりき陛下の義貞等を捨てゝ尊氏と和せんとは。知らず義貞何の罪あり、尊氏、何の功かある。元弘

*正成時に歳四十三

**光嚴帝北條氏に立てられ後醍醐のために廢せらる。

年、義貞綸旨を蒙つて以來、義を重んじ命を落すもの一族一百三十二人、之に殉する郎黨八千人餘也。是れ皆な陛下の爲めにあらずして、誰れが爲めぞ、陛下若し尊氏と和せんとせば、先づ義貞以下の一族を捕へて首を刎ねて、而して後ちに和すべしと。聲涙共に下る。後醍醐以下公卿皆な坐に堪へず、暫らく默然たり。已にして義貞三千人を率ひて至る。武士皆な慍れる容あり、靜かに後醍醐帝の語を待つ。後醍醐近く義貞を招きて慰諭して曰く、貞滿の云ふ所理なきにあらずと雖も、時務に通じたるものにあらず、暫らく尊氏と和し、時を俟たんとするのみ。汝を恃みて四海の鎭衛とするは、初心に異らず。宜しく太子恆良を奉して北國に下り勢を養ふべしと、將士皆な憤恨の泣にむせぶ。越へて十月十日、後醍醐遂に山を下つて尊氏の營に還幸し、義貞は太子恆良を奉じて、北越前を指して逃避す。還幸に從ふものは內大臣吉田の定房、大納言萬里小路宣房、防門宰相清忠、大館氏明、江田行義、宇都宮公綱、菊池武俊、仁科重貞本間資氏、叡山僧道場房祐覺等七百餘人にして、義貞に從ふものは洞院の實世、定世、三條侍從泰季父子、義助、義顯、義治、堀口貞滿、一井兵部太夫義時、額田左馬介爲繩、里見大膳亮義益、大江田式部大輔義政、山名忠家、桃井義繁、千葉貞胤、宇都宮泰藤、河野通治等七千餘人也。此外阿曾の宮は山伏に裝ふて吉野に藏くれ、中納言四條隆資は紀伊に下り、二條師基、中院の定平は河內國に、北畠親房は伊勢に藏くれ、結城兼光、南部時長、足立道宜、伯耆義高は南都は至りて剃髮す。昔し平氏西海沒落の時は、猶は一族徒黨を有して天皇を擁しき。今や天皇已に義貞を捨て、義貞等の一族また頭を屈して尊氏に下る。義貞等五年の忠戰によりて得たる結果は此の如し、其の恨むべく、哀むべく、傷むべきもの、平氏の末路より甚しかりき。

二百五十八節　北行京軍の困危、義貞の人物

義貞等、鹽津海津に出づるや越前の守護、足利高經、大兵を率ひて之を要す。即ち轉じて木の芽峠を越ゆるや、時正に初冬、風雪頻に至る。義貞に屬するもの多く、東國南海の人にして雪に慣れず、加ふるに地理に失し、糧食に乏しく、將士相續いで凍死し、或は風雪に望を失して自殺するあり、河野、土岐、得能の一族三百餘人は、土兵に圍まれ、戰はんとするに足凍へて意の如くならず、即ち皆な刀を雪中に樹て、自ら其上に伏して死し、千葉貞胤の族黨五百人は、風雪に堪へず、遂に足利高經に降る。義貞辛ふじて敦賀に入り、氣比の彌三郎太夫に賴つて金崎の城に入り、義顯をして二千餘人を率ひて越後に入らしめ、義助をして千餘人を率ひて杣山の城に入りて瓜生の一族に寄らしむ。已にして高經、義貞が後醍醐に捨てられしものなるを報ずるや、瓜生保、後難を恐れ、事に托して義助を謝絕す。之より衆心離散して、義顯もまた越後に下るを得ず、義助と共に金崎の城に歸る。已にして高經、北陸の兵を率ひ、仁木伊賀守賴章は丹波美作の兵を率ひ、今河駿河守賴貞は但馬若狹の兵を率ひ、荒川三河守詮賴は丹後の兵を率ひ、細川賴春は四國の兵を率ひ、高師泰は美濃、尾張、遠

江の兵を率ひ、鹽谷高貞は出雲伯耆の兵を率ひて海路よりし、八方金崎の城を攻め、必らず義貞を亡ぼさんとす。而して義貞の本領は此に於てか現れぬ。彼れは純乎たる武將也。其眼光は尊氏の如く大局に注がずと雖も、戰鬪に於ては、機敏勇敢、一代之に比するものあらさる也。彼れ尊氏の如く權變なしと雖とも、然かも其の温厚の胸、誠實の心、能く部下をして安んじて己を信せしむ。尊氏の下にありては將士、恩賞の必らず獲べきを知つて死戰すと雖も、彼の下にありては將士は一片感激の念、意氣の投合によりて死戰す。彼れ尊氏の如く識度大ならさるがため、多くの異族を部下に致す能はさりき。然れとも其將士は皆な精練せる勇士にして、所謂る一騎當千の武夫のみなりき。彼れ尊氏の如く其個人的魔力によりて、將士をして敗北の中にありても、常に殷々たる希望を以て戰はしむる能はさりき。然れとも將士をして困苦、窮厄の中にありても、能く相結托して離れさらしむ。彼れ今や後醍醐に捨てられ、渺乎たる金崎の城にあり、尊氏が天下の精兵を盡くして之を攻むるも、將士一人之に負くものなくして能く防ぐ。北條氏を亡ぼしたる彼は、天下の大勢に乘したるものにして、能く彼を示めす能はず。今や天下の大勢に見捨てられたる彼は、眞乎の坂東的武將の本領を示しぬ。

二百五十九節　後醍醐逃れて吉野に藏くる

義貞等が此の如く北國にありて困苦する時に方りて、寶樂を得んとして尊氏と和せる後醍醐も、また決して安樂にあらざりき。後醍醐は尊氏が政を還すと云ふを以て、純乎たる降伏とも思はざりしと雖も、汚辱を與へんとは思はさりき。然れとも尊氏は後醍醐が全く義貞を見捨てず、其皇太子を之に附して北國に赴かしめたるを見て、猶ほ二心を存するものとなし、先づ直義をして五百騎を率ひて之を迎へ、三種の神器を新帝に奉せんことを請しむ。是れ明白に讓位の禮を以て後醍醐に強ゆる者也。已にして後醍醐を花山院に奉じて、四門を閉鎖して警固を嚴にし、降參の武士は各〻之を大名に分つて管せしめ、明白に囚人を以て待ち、本間資氏、道場坊祐覺を斬り、供奉の百官、僅かに死罪を免るして放たれしかば、將士憤慨、義貞に屬せさりしを悔ひ、宇都宮公綱は剃髮して僧となり、菊池武敏は逃れて肥後に下る。此に於てか諸道の豪族皆つて後醍醐の令旨を奉じたるもの、皆な尊氏に降るの危險を思ふて自立の志あり。已にして北畠顯信、兵を伊勢に起し、密使を後醍醐に送る。刑部大輔和氣景繁私かに北畠の蜂起し、義貞が金崎の城を守つて數ば敵を破るを奏す。失望せる後醍醐は猶ほ王朝黨の少なからさるを見て、忽ち望を生じ、近臣を從ひ暗夜に乘じて吉野に逃れ、吉水法印に賴つて山僧に身を托す。是れ建武三年十二月二十二日也。之より世に吉野を南朝と號し、京都を北朝と號し、五十五年の間相鬪ぐ。

第二十一章　足利氏の治世　神武紀元千九百九十六年より二千一百三年に至る

第二百六十節　戰爭地方的となる、金が崎城落つ　第二百六十一節　戰亂何故に收まらざるか、顯家義貞の敗死、後醍醐の崩御　第二百六十二節　後醍醐は何故に敗れし乎　第二百六十三節　建武式目　尊氏の稅法　第二百六十四節　楠正行　第二百六十五節　足利時代の武士氣質及び其變化の原因　第二百六十六節　直義と師直の衝突　第二百六十七節　直冬、直義、尊氏交も相爭ふ　第二百六十八節　南軍、北帝を執ふ、尊氏光嚴帝を立つ　第二百六十九節　尊氏の死　和田良與の降服、北朝强臣の叛服　第二百七十節　足利氏の權執事に移る　第二百七十一節　細川賴之の善政、新田義宗の敗死　楠正儀の降服、菊池氏の衰亡　第二百七十二節　豪族の擅權、鎌倉氏滿の異圖、細川賴之の黜らる　第二百七十三節　山名亡び細川氏昌ゆ　第二百七十四節　足利義滿天下を一統し南北兩朝を混一す　第二百七十五節　義滿の人物、政策、當時の好尙　第二百七十六節

つて支那朝鮮を犯す　第二百七十七節　支那貿易、海賊、らつば、義滿、明の封冊を受く　第二百七十八節　公卿義滿に媚附す、義滿死して法王號を贈らる　第二百七十九節　京都鎌倉の內紛　第二百八十節　義敎の勵精、持氏の自立　第二百八十一節　赤松滿祐義敎を殺す、赤松氏亡ぶ　第二百八十二節　畠山氏將軍を制し、山名細川の二氏大也　第二百八十三節　義政帝王の儀を具ふ、驕奢より德政を生ず　第二百八十四節　足利時代の技藝　第二百八十五節　足利時代の文學

二百六十節　戰爭、地方的となる、金が崎城陷ろ

湊川の一戰は實力上に於て天下の形勢を定め、後醍醐還幸の一事は、信用上に於て天下の形勢を定めぬ。故に後醍醐脫走の報は諸道の南朝黨をして、また銳氣を回復して再興の計を爲さしめし乎と雖も、天下の大勢を轉するに足らざりき。延元二年正月、越前の瓜生保、心を義貞に寄せ、義助の子義治を奉じ、兵を杣山に擧ぐ。加賀國守里見時成、瓜生の弟僧義鑑と共に、之を助けて義貞を金崎城に救ふ。高師泰之を敦賀に逆擊して三人を殺す。義貞即ち恆良、尊良の兩親王、義顯等を止めて城を守らしめて、洞院の實世等と杣山に逃れ、

兵を募つて金崎を救はんとす。已にして城中食盡きて馬を食ひ、馬盡きて死者の肉を食ふ。三月高經等之に乘じて攻め城まさに陷らんとす。義顯事爲すべからざるを見て尊良に云つて曰く、臣は武將の子、徒らに敵手に落ちて家名を辱しむべからず、將に自ら裁する所あらんとす。然れとも殿下は皇親、敵必らず害せさるべし。願はくは生を全うして他日の計を爲せと。尊良憤然として曰く、何ぞ卿等に負きて自ら全うするに忍びんや、然れとも孤、深宮に長じて自裁の法を知らずと。義顯感泣、刀を取つて腹に擬して曰く、自裁の法此の如しと。自ら腹を屠り刀を取つて尊良の前にをく。尊良即ち其刀を取り、義顯に摸して自殺す。以下公卿將士、自刃するもの三百餘人。太子恒良、舟により逃れんとして獲られ、後藥を飲んで自殺す。天下思らく、南朝已に全く傾覆せりと。

二百六十一節　戰亂何故に收まらざるか、顯家義貞の敗死、後醍醐の崩御

然れども天下の形勢は、未だ足利氏をして賴朝の如き統一政治を行はしむるを許るさゝる也。先づ北條氏の下に天下の泰平なること一百三十年。氣運は已に亂世に向ひたれば、天下大亂に飽き、人心奔命に勞れ、平和を求むること、水の低きにつくが如くならすんば、統一は容易に來らざるは勢也。北條氏覆滅の後より、紀綱蕩然として崩れ、天下の事、力征によりて爲すべきを見せしめたれば、所謂る武門武士の外、土豪、卿紳の間に尙武的氣象と技量とを生したれば、其の高きものは武門に從ふて征戰を習ひ、低くきものは土寇となりて劫掠を事とせり。此の新武士は、事なければ田園に耕し、事あれば干戈を取り、地理に熟し土着の勢力たるがため、出沒、自在にして征服するに容易ならず。而して近畿最も此類の武士多かりしが故に、北朝は數ば之がために其手足を制せらるゝを免れず、且つ尊氏寬裕、洪量、其部下を待つがため、部下の勢力、非常に發達し、高、山名、桃井、上杉の一黨、數國を領し、嚴然たる諸侯となりしがため、中立の地に立つべき武士、北條氏の遺族等をして、已むを得ず南朝に屬せしめたり。之に加ふるに前後六年の變亂殆んど天下を暗黑ならしめ、四方の情僞容易に通せず。南北兩黨の國土犬牙錯綜して、征伏に便ならず。統一は猶は天下の自然の勢にあらざりし也。故に足利氏が京師に幕府を置きて、法令を定め、嚴然天下に君臨せるとき、後醍醐は猶は吉野にあり、正成の子弟は其近傍を守り、義貞は越前に蹯据し、北畠顯家は北邊の武士を語らひ、一旦北朝に下りし大館氏明、土居、得能の三氏は四國を徇へ、菊地武重は懷良親王を奉じて九州に起り、江田行義は丹波に起り、宇都宮公綱もまた還俗して吉野に入り、北條時行も兵を起して南朝に應ず。顯家の軍は二年八月を以て足利義詮を鎌倉に攻めて之を去らしめしかば、人或は南朝興復の事を夢みたりしに、三年三月、南都より京師に迫り、高師直、桃井直常の爲めに全軍を覆されて顯家は敗死しぬ。北方の南黨此の凶變を知らず。七月越後に於ける新田の支族大井田彈正少弼義景、中の條入道舜甫、鳥山左京

亮、風間信濃守、禰津掃部助等、大兵を率へて義貞を助けて京に入り、北畠氏を助けんとす。義貞此援兵を得て、使を叡山の僧徒に發して助力を得んことを請ひ、先づ越前足羽の城に足利高經を攻め、之を夷けて後に京に上らんとす。此時に方つて越前殆んど義貞に屬し、四方響應し、山徒また義貞の來るを望む。故に世人また南朝興復の事を夢みぬ。已にして高經、平泉寺の僧兵を募るに重賞を以てして、義貞に敵す。義貞一舉して之を夷げんとして、自ら僧兵を藤島城に攻め、流矢に當りて死せしかば此夢もまた消へ失せぬ。當時南北兩黨の爭は一方に於ては皇室兩統の爭にして、一方には地方に於て恩讐、優劣相容れざる豪族の爭鬪なりと雖も、一方に於ては尊氏義貞の爭也。今や尊氏の政府、其權愈よ伸びて、義貞空しく陣沒す。南黨は其の中軍旗を失へるもの也。之より南北の兩黨、所々に戰ふと雖も憤爭のみ。形勢日に定まり。南黨日に消沈す。後醍醐は此の如き不愉快なる景を見つゝ、延元四年、八月、右手劍を握り痛恨の記臆を以て吉野に崩ず、壽五十二。崩するの前四日、越方行末を思ふて感慨に堪へず。歌ふて曰く『露の身を草の枕にをきなから、風にはよもと頼むはかなさ』と之を先にしては天智、之を後にしては桓武と、歷史上の三大皇帝とも云ふべき君主が、北條氏を亡ぼしたる報酬として得たる所は、此の如き悲愴酸峻の運命中に其子義貞を托して天皇とするの一事に過ぎさりき。義貞は即ち後*小松帝也。

*後小松は厩子の子也。顯家によりて數ば東北に下る。位に即くに及びて都を吉野の金剛山に定む、後ち金峰山に移る。

二百六十二節　後醍醐は何故に敗れし乎

後醍醐は女色に耽り新待賢門院に迷ひ、刑賞を誤り、尊氏に詐されて其の禍を養へりと爲され、其歷史上の地位は、初めは賢にして後には迷へる玄宗が、楊妃を寵して祿山の亂を養ふたるに比較せられたり。後醍醐が北條氏を亡ぼしたるに乘じて、安逸の心を生じ、新待賢門院の色を愛して、後宮の內奏を聽したるは、爭ふべからず。然れども天下の禍亂、後醍醐の失政にのみ基づくと云ふは即ち不可也。後醍醐は淮后に迷ふと雖も、其の慧眼は決して尊氏の大望と勢力とを看過せさる也。天下護良に先つて之を除くの心あるもののあらば、後醍醐は確かに其一人なりし也。北條氏已に倒るゝや、貴族公卿、爭ふて莊園領國を取りて、以て武人の感情を激したり、後醍醐が之を止めざりしは、其の失策たりしと雖も、爾かも是れ多數の貴族公卿及び其の周圍に附隨する武士の爲せる所にして、後醍醐のみの過にあらず後醍醐にして若し義貞を退けん乎。尊氏を擧けん乎。義貞を擁したる不平武士は義貞を擁して起らんとす。義貞已に後醍醐に屬し、備さに流離艱難を嘗めたる後は、其の後醍醐に對するの忠誠固より之を疑ふべからず。然れども、當時の社會には、二個の相容るべからざる勢力は隘所に存したり。北人と南人の衝突也。王朝時代以來相傳の國司、莊園、郡領の遺せる勢力と、守護、地頭の遺せる勢力也。一鄉の中相容れざる二豪族あり。一國の中相容れざる二豪族あり。至る所に尊氏義貞をして相爭鬪せしむべき分子は存じたる也。彼れ左せば、我右せん。彼れ東せば我西せん。

尊氏にして後醍醐の下に其の大望を遂げん乎。即ち天下の大亂は、また義貞にとりて起されんとす。此に至つては後醍醐をして德政は堯舜の如く、智勇は唐の太宗の如くならしむるも、如何ともする能はざる也。況んや其の佛法を篤信せる、寺院の勢力を識認するの慧眼に至ては、殆んどナヤールスの上にありと雖も、寺院反覆して恃むべからず、是れ決して後醍醐の罪にあらず。要するに貴族的王政が、天外より來つて大和附近に其根を扶植したるのみにして、未だ全國を風化せざるに方りて、國民固有の武斷的民主思想が、時代の精神となりしが爲めのみ。

二百六十三節　建武式目、尊氏の稅法

北條氏が之を知るが如く、足利氏もまた之を知りぬ。然れども足利氏は、北條氏が公卿を尊重して之に空名虛榮を與ふるが如くせず。自ら公卿の位を取り、戰勝の勢に乘じて爲さんと欲する所を爲せり、故に北人の武斷民主思想は北條氏の下にありては猶ほ南人の貴族的王制思想と調和して、兩頭政府の形を爲せしも、足利氏に至りて殆ど全く王制思想に代りたるが如くなりき。足利氏また刑賞を明にして民心を安せんとするの一事に於ては決して怠るなく、賴朝の古法と貞永式目を折衷して、建武式目を定め、訴訟民政に注意し、且つ後醍醐が北條氏の遺制を改めて國司守護より二十分一の國用を取れるを廢して、五十分の一に減じ以て民心を安じぬ。此くてまた尊氏正三位大納言を以て征夷將軍となり弟直義、正四位を以て副將軍となり族黨四十三人皆な朝宰を得て、秩序漸やく定まる。尊氏即ち天龍寺を立て、

*天龍寺の成るや上皇臨幸して供養せんとす、叡山の僧之を聞き、臨幸を慣り、勅願寺を停めんことを奏す、開山の僧疎石をして流罪にせんとす。朝廷震驚して之を尊氏に謀る、尊氏曰く山門僧徒の嗷訴は故なき事也。棄て、省みざるに如かず、山僧勿れと、長縮して歸りまた叙して白山、平泉寺、多武峰、書寫山、日光等の末寺末社三百七十餘寺に牒狀を發して、嗷訴を儲めしめ、また藤氏の南都の諸寺をして之に應ぜしむ。大に恐れ、公卿の尊氏等如何にも之を省みざるも、天下の大事となるべしと強ひて臨幸を停む、尊氏兄弟即ち供養を行ひ、上皇結緣の爲めに臨幸して翌日還御す。山僧の勢猶恐るべきものあり。

疎石を以て開山とす。* 疎石は即ち夢想國師也。直義は六十六國に各一基の塔婆、一粒の佛舍利を分ち、師直また眞如寺を立つ、政權已に鎌倉より東し、京師に遷るや、僧日靜、日蓮の建てし本國寺を京都に遷す。

二百六十四節　楠正行

此の如くして天下の兵氣日に消沈するや、京都漸く戒嚴を怠る、時に、正平二年（南朝）貞和三年（北朝）正成の子正行、其弟正時、正儀、族黨和田正朝等と河內の金剛山に據り、四方を攻畧す北朝細川顯氏をして攻めしむるや、顯氏譽田林に破らる、山名時氏をして攻めしむるや時氏瓜生野に破らる。京師震驚即ち高師直師泰をして大軍を起して之を擊たしむ。正行、此行遂に勝つの理なきを以て、行在に至りて後小松帝に謁して志を奏す。後小松慰諭して必らず死するなからしむ。然れども正行死を決して其族黨と共に名字を如意輪堂に書し、辭世の歌**を刻みて出づ。天皇四條隆資をして別に兵を率ひて之を助けしむ。已にして兩軍、四條畷に會す。師直の兵八萬、南朝の兵八千にして、正行の指揮に從ふもの三千。正行必らず師直を殺さんとして突進し、殆んど師直を得んとして能はず。正行衆寡敵せずして敗れ、族黨と相剌して死す。共に死するもの二十三人。師直長驅深入、吉野の金鋒山に入りて皇居を燒く。隆資以下天皇を奉じて穴太に逃る。正行は南朝最後の火花なりき。正行逝きて金峰山落つるや、南朝の公卿遂に爲すべからざるを信じ、緣を求めて北朝に降るもの相繼ぎ、後村上は穴太の奥に名ばかりの皇居

を立て、偏安を保つのみ。

二百六十五節　足利氏時代の武士氣質、及び其變化の原因

北朝が漸やく内亂を生ずるの時なりき。初め平氏の權を得て藤原氏に代るや、一族を以て朝廷の高官大爵を占領し、公卿をして其所を得ざらしめ、寺院を抑制せしかば、彼等内より陰謀を畫して源氏、外より起りぬ。故に源氏の平氏に代るや、朝廷の官爵は之を公卿に一任し、寺院を敬重して其の感情を傷けざらんことを勉めたり。是れ其政府、鎌倉にありしが故に爲し得たる事也。今や然らず、中國近畿は已に發達して一の武權的勢力となり、賴朝時代には計算に入らざりし九州中國、絶大の勢力を示せしかば、鎌倉は以て北方を鎮すべく、以て天下に號令するに足らず。此に於てか足利氏は多くの不便を知りつゝ京都に政府を定むるの已むべからざるを見たり。其結果として公卿に空名虚榮を與ふる能はず、平氏の如く、一族を以て朝廷を占領するの已むべからざるを見たり。之より先き氣骨ある公卿は、後醍醐に屬して將軍となりて所々に轉戰して、多く滅し去り、存ずる所のものは軟弱無氣力なる公卿に過ぎざれば、足利氏の爲めには、最後の打擊を受けたるが如くに沈淪し、政治上に於ては全く無一物の地位に落ち、僅かに其生命を社會に保ちしのみ。社會的とは典禮を知るのみ。和歌を知るのみ。美人を有するのみ。此中最も公卿の生存を助けたるもの　其美人の力也。北人疎野にして、禮節を知らず。

敵國外患なければ國常に亡ぶ。南朝衰弱の時は

＊りし也。
＊＊かへらじとかねて思へば梓弓、なき數に入る名をぞとゞむる

唯だ日々の生存競爭を顧みて、高尚なる修養なし、故に此時猶は未だ美人美男子なるもの少なし。彼等は容貌の美、粉黛の術、其頂上に達したる公卿の婦人を見て之を慕望するを禁ずる能はず、多くの財物を賭して之を購ふに至る。公卿もまた有力なる武士と結ぶを以て、安全として王照君北胡に下るがごとき心地しつゝ、此結婚を許すものありき。是れ猶は可なるもの也。甚しきは、公卿の妻女、娘子を奪つて强ひて妻とするものあり。之よりも甚しきは、公卿の女北狄を卑しみながら一人にして數人の北狄を夫とするものあるに至り、純然たる妓女の如くなりき。之よりして同族相爭ひ、同門相排するものあるに至る。高の師直の鹽谷高貞に於ける、＊高の師秋の佐々木信胤に於けるが如き、女事よりして離叛となるは、當時に珍らしからぬことなりき。此の如くして戰鬪に勝ちたる武士は、女色によりて腐敗しぬ。また當時、諸國より集りし剛健質朴の武士は、近畿に入りて財物を得るや、陣中の徒然を慰めんがため、博奕の風を盛ならしめたり。已に博奕の風の盛なるや、數ば博奕に賭するものを得んがために戰鬪を起すを賭するものあるに至りぬ。已にして戰あるや、甲冑を失つて刀劍を有するものは、甲冑を得んがために奮戰するが故に却つて勇武を加ふと雖も、刀劍を失したるものは、戰ふに術なくして鯨波の數に加はるのみ。剛健なる武士は此の如くして腐敗せられぬ。また諸國の武士の起る

＊高の師秋、菊亭伊の女と契り、勢の守護となりて下るや、また之を伴はんとす、女走つて佐々木にゆく、佐木もまた久しく此女と契れるもの也。故に備前に歸り、兵を擧げて南朝に應ず。

や、其望む所は所領の大と權力の大とにありしと雖も、敵に對しても味方に對しても、一片磨すべからざる意氣の存するものありき。然るに尊氏義貞の間一勝一敗、數ば局面を轉じたるが ため、生命を保たんがために尊氏に下るものにして、また忽ちに義貞の勝利によりて歸服せる あり。或は義貞に下れるものにして、また忽ちに尊氏の勝利によりて其下に屬するものあり。 而して兩黨各〻人を致すこと多からんことを欲して、大罪大不信の徒をも許るして用ひしがた め、天下の武士をして、一方に執着するの危險なるを信じ、意氣の爲めに生命を捨つるの愚な るを覺らしめぬ。是より反覆、出沒は武士の恥ぢざる所となりて、武士は腐敗しぬ。此の如く曾つて天下の秩序を保ちたる武士の意氣、主從の信用、英雄崇拜の心、去つて迹なく、美八分捕物、恐怖之に代り、泰時時賴によりて養はれたる鎌倉武士の遺風は、蕩然として跡を天下に絶ちぬ。足利氏、千辛萬苦して南朝を掃蕩して天下を取りしと雖も、其政府は此の如き脆弱にして恃むべからざる基礎の上に据えられし也。故に南朝未だ全く亡びずして、北朝已に動搖を來たす。而して動搖は功臣の跋扈より來る。

二百六十六節　直義と師直の衝突

初め尊氏の北條氏に背くや、最も之を勸誘したるものは細川和氏、上杉重義の二人にして、最も勢威あり。また高の師直は其族大にして、其卒勇。足利氏の支族三十二人に過ぎざるに、高家は其一類四十三人を有し、最も戰功あり。また尊氏の弟直義、最も機才に富み、最も權謀あり、最も法家的冷血にして、尊氏の秘機、多く直義の參畫に出で、多くの場合に於ては、尊氏をして心ならずも、其畫策に從はざる能はざらしめたり。彼等をして賴朝の下にあらしめば、忽ちにして夷滅せらるべきもの也。然れども尊氏、賴朝の少恩、慘禍を遺したるを見て、其將士を待つ寬裕、以て其心を安んぜしめ、過失、罪惡多く問はざるにより、彼等は絶大の權勢を得るに至り、幕府の政事多く直義の手に歸し、其三條に居るの故を以て、時人之を三條殿と號し、尊氏と併せて兩御所と云ふ。時に幕臣土岐賴遠、途に光嚴院上皇の駕に遇ふて馬より下らず。前驅之を叱止して曰く、田夫、院の啓行を知らさる乎と。賴遠怒つて曰く院乎、犬乎、我れ之と知らず、犬ならば之を射んと、部下をして環視して乘輿を射さしむ。直義之を聞きて賴遠を殺ろすや、武人震慄して曰く院に、遭ふてすら馬を下らさらんくんば、兩御所に遭はゝ地を這はざるべからざる乎と。兩將軍尊くして天子卑しきの情以て見るべき也。直義の權勢此の如きものあり。然れども之に屈せさるもの獨り師直あり。師直、幕府の執事たり。執事は猶ほ執權の如し。其權勢また直義と相比び、足利氏の一門と雖も皆な其の喜嫌を伺ふて事を爲す。護良親王の母の今出川の邸を以て家とし、武士に禁せられたる壯麗の家居を構へ、親王、公卿の子女數十人を養ふて妾とし、朝廷幕府皆な其威權を仰き、專擅放縱、往々常規の外に出づ。尊氏猶之を愛重して責めず。獨り直義之を憎み事によつて之を除か

直冬の母は越前の局と云ふ、尊氏直冬を惡みて父子の對面を許さず、直義數は之を和解するも聞かず、紀伊に南朝黨の起るに及び、初めて父子の名を許るして、右兵衛佐とし、征伐に當らしむ。

*師直妙吉を疑ふと雖も、佛教を信ずるに於ては他人に勝り、楞嚴經を印行せしが如きは、其證として見るべし。當時の印技術は此に再興したり。

十二月直義師直等の疑を解かんがため、剃髮して惠源と稱す。

んと欲す。然れとも其兵力を憚つて發せず。先づ尊氏の庶腹の子直冬を養つて子とし、中國の探題として備前の鞆に居らしめ、以て外援とす。直冬は父尊氏と隙あるもの也。此時に方つて京師の武人、正に禪宗に向ひ、靡然として其徒を尊崇す。夢想國師の弟子、妙吉、才學あり。直義之を敬信し、其言ふ所多く聽かる、之より武人また競ふて妙吉に媚附す。獨り師直、*妙吉の學識を疑ふて造らず。妙吉之を憤り、時を待つて報復せんと欲す。畠山直宗、上杉重能また師直の專横を憎み、妙吉の憤慨を聞き、相結托して之を傾けんとし、妙吉をして私かに直義に說かしむ正平四年(南)貞和五年(北) 六月直義力士を伏して師直を召す。直義の黨、反覆して洩らすに陰謀を以てす。師直即ち兵を聚め自ら守り、河内にありて南朝を鎭壓する弟師泰を招く。直義人をして途に師泰を要し、執事職を以て之を募るや、師泰冷然として曰く、枝を盡くして根に及ばんとするかと、兄弟遂に兵を合して尊氏直義を圍む。兵士多く師直に屬し、尊氏等の勢日に微に、尊氏と進退を共にせる赤松圓心の如きも、師直に屬し、爲めに中國に下つて、直冬の上洛を妨く。尊氏遂に師直の要求を聽き、直義の執政を已めて、子義詮の鎌倉にありて關東を管領せるを招きて、之に代へ、義詮の弟、基氏義詮に代りて關東管領たらしめ、高の師冬、上杉憲顯をして執事となりて之を助けしむ。畠山直宗、上杉重能の二人は越前に放たれ、後ち師直のために殺ろさる。

二百六十七節 直冬、直義、尊氏の黨與交も相爭ふ

此の時に方つて妙吉已に逃れて直冬の許にあり、直冬即ち走つて肥後に下る、師直、尊氏を要して、直冬征伐の敎書を諸國に發せしむ。直冬即ち大宰少貳賴尙に賴り、其女を娶つて妻となし、其兵を得て、九州の探題一色太郎入道道猷(範氏)を破つて其兵を併す。是より九州の兵多く直冬に屬し、偏偶の豪族、薩摩の島津上總の入道もまた直冬に黨し、石見の人、三角入道もまた兵を擧げて之に應ず。此れより天下、南朝を稱して宮方と云ひ、尊氏を稱して將軍方と云ひ、直冬の黨を佐殿方と云ひて、天下三分の形勢成らんとす。此に於てか尊氏師直を率ひて九州に下り、直冬を攻めんとして發するに臨みて、師直、直義を殺ろさんとす。直義逃れて南朝に下り、兵を起して男山に據り、桃井直常をして敵山に據らしめ、義詮を攻めんとす。義詮、西走し、尊氏師直の兵に備前に遇ふて、共に還つて直義と攝津の御影濱に戰ひ、尊氏大に敗る。畠山國淸、其間に周旋して兩黨を和解す、尊氏即ち京に入る。師直勢を失して孤弱也。上杉重能の子顯義、父の仇を復せんがため、途に襲ふて師直兄弟を殺ろすや、基氏上杉憲顯の二人、また鎌倉に高師冬を攻めて之を殺ろし、勢威一世を風靡せる高家の一類一朝にして亡ぶ。然れども功臣跋扈して權力下に移るの勢は、之がために止まず。尊氏、直義と和するの後も、義詮を除きて直義自ら執政たらんと欲す。尊氏已むを得ずして之を許るすや、直義の黨、桃井直常、石堂義房等驕慢を極む。尊氏の黨、仁木頼章、

細川頼春、佐々木道誉等之を憎み、兵を引て國に歸り、將さに爲す所あらんとす、直義之を恐れて北國を經て鎌倉に入り、東國の兵を擧げて京都に迫らんとす。尊氏親ら之を擊たんとして薩埵山に至る、直義、上杉、石堂の族黨を集め大兵を以て之を圍む。尊氏殆んど敗れんとするや、宇都宮公綱、坂東の兵を擧げて尊氏を助けて、直義を敗る、直義遂に尊氏に下るや、尊氏*之を毒殺す。

*直義時に四十七歳。

二百六十八節　南軍北帝を執ふ、尊氏等光嚴帝を立つ　此の如く北朝黨が内に相爭ふや、南朝黨勢を得て將さに京師を襲はんとす。義詮乃ち和を乞ひ馬十疋沙金二千兩を獻じて後村上帝の行幸を乞ふ。南朝僞つて和を許るし、私かに楠正成の弟正儀、和田正忠をして河内の兵を以て、北畠顯能を*して伊賀伊勢の兵を以て、急に京都を襲はしめ細川顯氏を敗り、細川頼春を獲、義詮出でゝ近江に走る。顯能即ち光明、光嚴、崇光の三皇、及び太子直仁を執ふ。光明帝辯疏して曰く即位は朕の志にあらず、已に即位するも一事も朕の意に出でたることなしと。顯能、默して答へず、駕を奉じて吉野の賀名生（穴太）に*幽閉す。是れ（正平七年（南）觀應三年（北））二月二十一日也。京都に於て此の如き形勢の大變ありし時、東國の形勢もまた變ず。二月十五日義貞の子義治、義興、義宗等、兵を擧げて鎌倉を襲はんとす。久しく志を得ざりし南朝黨の子孫、また起つて之に應ず。尊氏逆ひ擊たんとして出で、南軍武藏野**に戰ひ。尊氏大敗して石濱***に走る。南軍列を亂して之を追

*梶井二品親王、天台座主もまた此中にあり。
**大草公弼考證して練馬白子の邊とす。
***今の隅田川也。

ふや、仁木の一黨、横さまに之を擊つ、義興義治、大に敗れて走り、途に石堂三浦の諸黨が、鎌倉に叛きて新田に合せんとするに遇ふ。即ち相率ひて鎌倉に入り、基氏を攻めて之を走らし、暫らく鎌倉の政權を握る。已にして尊氏の軍また振ひ、關東の諸武士、多く義宗に負きて、石濱に集りしかば。義宗勢屈して、越後に奔竄し、義興義治もまた鎌倉を出でゝ、國府津山に據る。此時義詮もまた赤松等の諸族を率ひて京師を回復す。已にして京師主なきを以て、義詮、彌仁親王を立てゝ天皇たらしめんとす。群臣以爲らく神器南朝にあり、祚を踐むは未だ曾て聞かざる所也と。關白藤原良基曰く尊氏劍たり、良基璽たらば神器なきもまた何の不可かあらんと。遂に之を立つ之を後光嚴帝とす。九月尊氏、また京師に入る。此の如く天子は武家の擁立せるもの也。公卿は武家の憐憫の下に其生を聊するもの也。此より朝廷愈〻武士に媚附し、公卿等云ひも習はぬ坂東聲を用ひ、着もなれぬ折烏帽に額を顯はして、武家の擯斥指笑を免れんとするに至りぬ。

二百六十九節　尊氏の死、和田楠良の降服、北朝強臣の叛復　然れとも足利氏の天下は未だ全く統一せさるに已に強臣割據の世となり、之より東戰西伐、寧歲なく尊氏數ば京を出でゝ京に入り、（正平十三年（南）延文三年（北））四月五十四歲にして死す。子義詮嗣で征夷大將軍たり。此時に方つて純乎たる南朝黨は上野越後、信濃にある新田の一黨、肥後の菊池、河内の楠和田あるのみ。已にして（正平十五年（南）延文五年（北））義詮

自由山道誓の一族をして吉野を攻めしむるや、楠氏の族黨、和田藏人助氏、北朝に降り、南軍日に敗るゝを見るや、故護良親王の子征夷將軍興良親王、吉野十八鄕の兵を率ひ、北軍を防ぐと稱して、急に謀叛し、吉野の行宮を攻む。南軍驚愕死力を出して防ぎ、興良敗れて南都に走る。和田下りて護良の子叛く、事實に於て南朝已に倒れたるもの也。而かも猶ほ其成立を保つものは、北朝の强臣相爭ふて陷擠を事とするがためのみ。時に北朝の佐々木道譽、細川賴之、山名時氏、仁木義長、足利高經、畠山國清、細川清氏、今川貞世、赤松氏範、足利直冬等の强臣、或は和し或は爭ひ、或は南朝に下り或は歸復し、天下寧日なし。彼等は敗るれは即ち死すと雖も、反覆離合は毫も罪とせられず。足利氏は唯だ其の歸復を俟つて、之を慰諭するの外なかりしかば、彼等は唯だ力の足らざるを憂ひ、隣國を侵略するの少なきを憂ふるのみ。故に小族愈よ滅亡して、而して之と共に眞乎封建的風習を武士の間に生じぬ。之と共に足利將軍なるものは殆んど空名となりて、執事管領の將軍に於けるや、猶ほ將軍の天子に於けるが如く、實權は管領執事に移り、將軍は强臣の大罪を犯して得たる所領を識認する一の閑職となり、强臣毫も之を恐れざるに至る。已にして細川清氏其族賴之の爲に殺され、賴之其衆を併せて威權漸やく大に、四國西國の南朝黨、勢益す微也。此に於てか（正平十九年（南）貞治三年（北））久しく周防長門を以て南朝に屬したる大內弘世、足利氏の必らず其所領を識認せんことを信じ、二國の所領を安ずるを得ば、

*大內弘世後數萬貫の錢新渡の唐物を奉行評定、傾城、田樂、猿樂、遁世者に與ふ、一時弘世の名京師に高し、此時に錢は多く支那より輸入せし也。

降を乞はんと云ふ。*義詮大に悅び二國の外、更らに石見を益す。仁木義長、山名時氏もまた之を見て歸復す、義詮即ち其押領せる因幡、伯耆、丹後、丹波、美作の五國を以て之に與ふ。石堂賴房、吉良滿貞等、之を聞きてまた歸復す、而して基氏鎌倉にありて、また能く關東を撫安し、畠山道誓が同僚を驅逐するを以て之を放つて、上杉憲顯に專任す。之より南朝日に衰ふと雖も、北朝權臣の專橫、愈よ甚し。

二百七十節　足利氏の權執事に移る

權臣の爭鬪は執事の職より起る。初め尊氏の覇府を定むるや、高師直執事たり、師直亡びて仁木賴章之に代る、賴章死して細川清氏之に代る、佐々木道譽、清氏を倒して之に代らんとす。清氏專權其二子を八幡宮に携へて元服せしめ、長を八幡六郎と名け、次を八郎と名つく、時人、源家の祖八幡太郎の名を襲ふものとなすや、道譽之を讒して不臣の跡ありとなす。義詮、凡庸にして眼識なく、道譽の言を信じて清氏を疎んす。清氏即ち叛きて南朝に應じ、數ば京師を攻む。道譽已に清氏を追ふや、益す權を專らにして執事たらんとす。道譽曾つて遊獵の歸途、其家僕をして妙法院の楓を折らしむ。院人之を咎むるや家僕其主の威を挾んで屈せず。更らに枝の大なるものを折る。院人怒つて之を笞つや、道譽其夜、衆を率ひて院を攻め、火を放つて之を燒く、妙法院は叡山の末寺也。山僧之を聞きて大に怒り、日吉神輿を奉じて闕下に嗷訴す。幕布已むを得すして道譽を上總に流すや、彼れ山僧を辱しめ

んがため、族黨三百餘人をして日吉の神獸と稱する猿の皮を腰當とし、鞆にかけ、盛宴を張つて屈せさるの意を示めす。其剛愎此の如し。故に清氏の去るや自ら執事たらんと欲して得ず。衆議遂に足利高經の季子斯波義將を以て執事とす。然れども高經其實權を握り、諸將を驅使して峻嚴を極めて、人心を失す、諸國の守護は後醍醐の時其所得の二十分の一を課したるを以て怨望して、大亂の端となりぬ。故に尊氏天下を一定するに及びて、其五十分の一を取つて諸國の負擔を輕減し賴之に至つて四公六民の制を取りき。然るに高經に至り更らに二十分一の舊制に復せしかば、將士之に苦しみて、道譽の如きは賊を欠く二歳に及ひぬ。此の如くして衆心、高經を離るゝや、正平二十一年道譽徒黨を作つて之を擊たんことを義詮に迫る。高經、義將と越前の杣山に走つて兵を擧ぐ、已にして高經病沒し、義將降る、此に於てか道譽將さに執事たらんとす。

此年九月高麗の使、元の使を導きて來聘す、使は萬戸右衛保勝中郎將金龍以下十七人也。天龍寺に宿せしむ。

長老春屋和尚牒狀を上る、書意、賊舶多く日本より出で、海邊を掠劫するを以て、切に之を禁せんことを乞ふ、幕府、謂らく是れ海賊のみ、爲すべき術なしと、遂に返牒を與へず、高麗の使に鞍馬鎧、太刀を與へて歸す。

二百七十一節　細川賴之の善政、新田義宗の敗死楠正儀の降服、菊池氏の衰亡

此時に方つてや基氏、關東の管領たり。初め尊氏、北條氏に代つて天下を一統するや、賴朝の如く覇府を鎌倉に開きて、天下に號令せんと欲するの心なきにあらさりき。然れども二百年の泰平は中國九州の四國をして、一大武力たらしめたりしかば、鎌倉は之を號令せんには餘りに偏僻なりと信せられぬ。此に於てか尊氏京師の守り難きの地たるを知りつゝも、遂に都を此に定め、猶ほ基氏をして直義の養子たらしめて、鎌倉を管領し、北東の武力を握つて、中原の急に赴かしめんと欲したり。而して基氏また恩威あり、能く八州の武士を統撫し、八州の治は中原の治よりも光彩ありき。基氏今や義詮が道譽の手中に陷らんとするを見て、切に之を諫めて細川賴之を用ひしむ。當時道譽の權勢を抑ゆるもの、唯り賴之あるのみ。且つ賴之は反覆表裏、陷擠を事とする暗黑時代の武士中、最も信ずべき一人なりき。基氏の撰擇は過たず、賴之が執事たりしより權豪、其私曲を謹み、殿中の諂諛者も其口を謀しみ、士風は漸やく質直に近づきぬ。故に二十二年四月、基氏死して子氏滿代り、十二月義詮尋で死し、子義滿、十歳の少年を以て大將軍たるも、天下は却つて尊氏、義詮の時よりも安全なりき。越へて二十三年三月に至り、南朝後村上天皇、住吉殿に崩ず。熙成親王位を襲く之を後龜山天皇とす。此歳新田義宗、基氏義詮の死せるを幸として、兵を越後上野に擧げて敗北し、義宗死して義治出羽に走る。之より南朝益す衰へ、二十四年に至り、楠正儀遂に北朝に下る。之より先き基氏の死するや、南朝大に喜ぶ。正儀獨り喜ばすして曰く、假令日本國中に敵なからしむるも、今日の諸卿の政道にては忽ちに諸國に敵出で、世はまた亂れんと。彼れ早く南朝に望を絶ちたる也。已にして建德二年三月北朝後光嚴、位を辭して諸仁親王立つて後圓融帝となるや、八月、細川賴之、正儀を助けて吉野を攻む。南朝の亡びざるもの一縷の命のみ。特む所は菊地の一族が、威を九州に振ふて聲援を爲すにあり。之よ

今川貞世、其養子仲秋に與ふるの教訓は今川狀と稱し、後世家庭教訓の用書たり。

り先き、肥後の菊池武光死し、子武政家を繼ぎ、懷良親王を奉じて四近を征服し、懷良の名を以て外國と交り、威聲九州を掩ふ。大內義弘之を攻めて勝たず。剃髮して命を乞ふて歸るに至る。已にして賴之の京師の執事たるや、今川貞世を以て筑紫の探題とす。貞世は獨り武事に精しきのみならず、また文事あり、當時に比少なき名將にして恩威幷び施したり。之より先き九州の豪族多く菊池の爲に征服せられたりと雖も、菊池は唯だ武强と地勢によりて勝つのみ。偏狹苛細、民心の歸服を得ざりしを以て建德二年、貞世、大內義弘と兵を合して武政を攻むるや、武政利あらず、之より諸豪多く叛く。已にして（天授元年（南）永和元年（北））武政死するや子武朝少貳冬資を誘ふて、貞世を拒ぐ、貞世擊つて之を破り冬資を斬る。二年直冬もまた其身を措くの地なきを以て北朝に下りて石見に退居す。四年に至り楠氏の族、正時、正種、正勝等兵を河內に擧ぐと雖も、征東將軍宗良は已に據を信濃に失して吉野に歸り、征西將軍懷良もまた肥後に薨じ、之より菊池氏日に衰ふ。此に於てか天下漸く一統せんとし、南朝の勢力單り河內、伊賀、伊勢、紀伊の山谷に存するのみ。

二百七十二節　豪族、自ら擅にす、鎌倉氏滿の異圖、細川賴之黜けらる

然れども此一統は極めて微弱なるものにして豪族大名は其爲さんと欲する所を爲して憚からず。大內義弘の如きは石見國を奪れんとするを見て、直ちに南朝に應ぜんとし、而して將軍義滿、之を聞きて其代官として京師に留

賴之記に云ふ、一日賴之公會の席に於て、義滿を諫めて退けられ其子賴元をして代つて執權たらしむ。實は豫しめ義滿と計りし也。と是れ醍醐と時平の關係より案出せる小說なるべしと雖も、賴之の地位は實に此の如くなりし也。永德元年新葉集成る。

るものを招き、決して石見を奪はさるべきを誓ふて其の離散を防きたり。また紀伊の南黨を攻めんがため、義滿自ら軍を率ひて進むや、美濃の土岐の一族、命を得ずして縱まゝに國に歸り、斯波義將もまた國に歸る、此に於てか義滿檄を傳へて佐々木を擊つや、義將近江よりまた義滿に屬するに、義滿之を責めず、已にして土岐もまた降るや、義滿また責めず。大名豪族、將軍の命を用ひさること此の如きものありし也。故に鎌倉の氏滿の如きも、また私かに異圖あり、義滿が、紀伊の南黨を攻むるを機として兵を擧げんとす。執事上杉憲春、諫れども聽かず、憲春憂懼して自殺す。氏滿驚愕して其異圖を捨て、憲春の兄憲方を以て執事とす。諸侯大名の幕府に忠ならさる此の如きものあり。名は統一と稱すと雖も、實は繦縫のみ。賴之即ち銳意精勵、儉を以て力を養ひ、力によりて天下に號令せんと欲す。義滿聽かずして自ら用ひ、漸く賴之を疎外す。賴之は固より當時の豪族中最も幕府に忠なるものなりき。然れとも宗族强大、領國廣大、また義滿に盲從するものにあらず。其跡往々專橫に頻するものあり。土岐、斯波の諸族、之と共に善からずして相爭ふ。叡山の僧も賴之の剛果にして寺院を尊とまざるを悅ばず、其の日吉の神輿を改作せるを名として之を攻め、群黨の陰謀は遂に賴之に勝つ。五年四月義滿、兵を幕府に集め、使を賴之の第に遣はし、其の執事職を已めて國に就かしめ、斯波義將を以て之に代へ、且つ執事を改めて管領とし、以て幕府の尊嚴を作る。賴之の族人、或は兵を擧げて叛

せんことを勸む、頼之退けて容れず、剃髪して詩を賦し*、志を言ひ、一族郎黨三百餘人を率ゐ、其第宅を燒きて讃岐に歸り、四方を征服し、伊豫の河野の如き舊家も爲に亡滅す、故に義滿後また、頼之を以て四國の總管と爲す。

二百七十三節　山名氏亡び細川氏榮ゆ　然れども義滿の慢心は永續せざりき（元中五年（南）嘉慶二年（北））七月義滿南海を巡遊し歸つて北方に出でゝ富士山に上り、六年西、嚴島に遊びて九州に下らんとし、風濤に遇ふて讃岐に寄り、頼之を見る。頼之は依然たる忠實の頼之なりき。義滿、輔佐の功を回顧してまた之を用ひんと欲す。時に大名の中、山名最も强大を極め、山名時氏の義詮に歸復するや、五國の守護を得たりしに、時氏死して子師義、時義、また山陽の諸國を略取し、義理、氏清、また南海の地を略し、山名一族の領する所十國**に跨り日本を六分して其一を保ちしかば世之を六分一氏と云ふ。其一族勢を恃んで驕傲也。義滿之を抑へんと欲す。即ち山名の一族の互に權を爭ふを機として、滿幸氏滿等をして時凞、氏幸を攻めしめ、猶ほ頼之を召して斯波義將に代らしめ、幕府の力を爲さんと欲す。頼之辭するに老を以てす。此に於て八年正月、頼之の弟頼元を以て管領とす、頼之之を助く。山名氏、義滿が遂に其族を夷げずんば已まざるを察し、氏清は和泉より、義理は紀伊より、滿幸は丹後より、氏冬は因幡伯耆より、各々兵を擧げて義滿を亡ぼさんとして起つ。義滿、古より敵を京師に防ぎて勝つものなきを以て走らんと欲す。

*文學暗黑時代の武將としては稀有の學者なりき。

**和泉、紀伊、隱岐、出雲、美作、山城、若狹、丹後、伯耆、但馬、

氏清の敗るゝや、其二子右馬允七郎の二人、父の命により歸つて、其母を高野の根來に省す。母之を見るを許さずして曰く、父の討死を見すてゝ母に伴はんとするは、云ひ甲斐なきものなりと、即ち自殺して果つ。以て戰國時代の武士の典型的夫人を見るべし。

頼之之を止め、大内義弘、畠山基國以下の諸將と八幡に逆擊して、氏清を殺ろす。此に於てか山名の領地を分つて諸將を賞す、唯だ時凞と氏幸は氏清に敵するの故を以て、但馬伯耆の舊領を保つを得たり。時に北朝の明德二年也。故に之を明德の役と云ふ。

二百七十四節　足利義滿天下を一統し、南北兩朝を混一す　山名氏已に亡びて天下兵革の氣漸やく息まんとす、義滿即ち其一統の大望を遂げんとして、元中九年三月使を楠正勝に發して之に告げて曰く、南方の亡ぶる旦夕にあり、敢て兵を用ひざるものは、深く足下の家聲を欽べば也。何ぞ來つて仕へざると。正勝之を拒む。義滿即ち畠山義深をして之を千劍早城に攻めしむ。正勝正元防ぐ能ずして十津川の奥に逃る。正成此城を作りしより六十餘年にして、初めて北朝の手に落つ。義滿即ち大内義弘、六角滿高をして南朝に至らしめ、神器を北帝に傳ふると、更統交立すること北條氏の約の如くするの二條を約して和を議せしむ。南朝は已に一兵なく、一將なく、坐して滅亡を待つの外なし、固より此の約を聽かざるべからざる也。即ち十月二十八日を以て儀衛を具へて京師に歸る、義滿其儀衛を見て來降の禮にあらずとなし之を詰る。南朝の君臣固く爭ふて聽かず、遂に父子の禮を以て神器を北帝に讓る。是れ大敗北、大屈辱の中に於ける南朝の勝利也、北條貞時兩統交立の約を立てしより此に一百四十年、後醍醐、吉野山に臨幸せしより五十七年にして、南北また一となる、一となりしにあらず、南朝が北朝に吸取せられし也。

古來戰場の兵數は多く傳記家の爲めに誇張せられて、其實を知る能はざるもの多し。最も信ずべきは此頃の記錄也。明德記に曰く今川泰範、佐々木判官等は八百餘騎、義滿は二千餘騎、赤松上總介は七百餘騎、畠山國基は八百餘騎、大内義弘は五百餘騎、一色刑部大輔は三百騎、勘解由小路義重は五百餘騎、佐々木高詮は七百餘騎、なりと記す、總勢六千三百騎也。山名の勢は之より少なかりしが如し、十箇國の領主にして此の如し、固より一國總躰の戰にはあらざるも、之より推して當時の兵數を知るべく、源平、南北の戰の如きも、之より規模の少しく大なるに過ぎざるを見るべき也。

二百七十五節　足利義滿の人物、當時の好尙及美政

義滿は其材英雄にあらず。然れとも少小天下の主となりしを以て、氣宇高遠にして志望廣大なるに於ては、尊氏にも優るものあり。殆んど浮誇虛榮に近きものありき。彼が畢生の大望は天下を統一して父祖の爲し能はざりし大業を成就せんとするにありき。今や其の大望は已に成就せられぬ。是より彼の大望は、幕府の威嚴壯麗を極め、公卿的榮華を以て幕府を飾るの一事に注がれたり。之より先き義滿、諸侯に課して盛に室町の第を營み、之を名けて花の御所と云ひ、其執事を改めて管領と號し、鎌倉と京師の執事をして同格ならしめ、武田、小笠原、伊勢の三氏をして武家の故實を調査せしめ、大に制度を更定し、斯波、畠山、細川の三氏をして交る管領たらしめ、之を三管と云ひ、山名、一色、佐々木、赤松の四氏をして更る〳〵侍所の別當ならしめ、之を四職と云ひ、武田、小笠原、吉良、今川、伊勢等の七氏を以て七頭と云ふ。其祖父尊氏は死して後、左大臣を贈れたるに、義滿身に迫んで內大臣を以て征夷大將軍たり、次て左大臣に移り、永德二年後圓融、位を其子後小松帝に*禪り、院にありて政を聽くや、義滿また院の別當たり。永德三年源氏の長者となり、淳和奬學兩院の別當となる、義滿時に二十六歲也。已にして南禪寺の妙芭を以て僧錄司と爲して、天下の僧尼を司らしめ、鹿苑院寶幢寺を作り、相國寺を創して七層の塔を樹て、諸國の守護に役を課す。至德元年京都及ひ鎌倉の寺院につきて、各々**五山十刹の班を定む、是より禪宗愈よ

*後小松名は幹仁

京都五山
第一　天龍寺
第二　相國寺
第三　建仁寺
第四　東福寺
第五　萬壽寺

盛んに足利氏の治世を飾る。已にして南北媾和の後、應永元年義滿、征夷大將軍を其子義持に讓りて、自ら太政大臣たらんと欲す。朝廷武臣をして太政大臣たらしむるを難かるゝや、義滿大に憤つて曰く、天子は我が爲めに立てられ、朝廷は我爲めに保たれ、猶ほ我に抗せんとする乎と。即ち自立して天子となり、公卿百官の所領を沒收し、細川氏を以て攝家となし、畠山等を以て淸華とせんと欲す。後小松帝之を聽きて驚愕狼狽し、勅して義滿をして太政大臣たらしむ。義滿時に年三十七。天下足利氏を公方と號し、其家に親近する者を暱近衆と號す。此時に方つて朝廷の亡びざるものは一縷の命のみ。其實力なかりしがために僅かに支たりし也。即ち公卿に至つては、殆んど最後の打擊を受けて、藤原の一族、世變を更ふるもまた起つ能はざるに至りぬ。義滿唯一の大望は、天下を一統して、公卿的榮華を以て其の家を飾るにあり。今や大望は全く成就せられ、望を見てまた望なきに至りぬ。藤原氏の公卿は惡事凶行を盡くすと雖も、猶未來を信じたりしが故に、冥罰、天譴を恐るゝが爲め、其の惡事凶行を和げたりき。其弊は微弱にして駭心し易きにありき。今や北條氏以來、禪宗は武門の棟梁を支配し、殊とに尊氏直義は最も熱信なる禪宗の保護者たりしがため、禪宗は殆んど足利氏の宗敎となりぬ。今や功名に飽きて榮華を盡さんとする義滿は、未來なく、冥罰なき宗敎のために其心を堅くしぬ。剛健猛然なる北人氣質を以て、未來なく冥罰なき宗敎を信ず。彼をして飽くまでも歡樂を盡し、

*義持時に九歲

京都十刹
第一　等持院
第二　臨川寺
第三　眞如寺
第四　安國寺
第五　寶幢寺
第六　普門院
第七　廣覺寺
第八　妙光寺
第九　大德寺
第十　龍翔寺

鎌倉五山
第一　建長寺
第二　圓覺寺
第三　壽福寺
第四　淨智寺
第五　淨妙寺

鎌倉十刹
第一　禪興寺
第二　瑞泉寺
第三　東福寺
第四　萬壽寺
第五　東慶寺
第六　興聖寺
第七　東漸寺
第八　善福寺
第九　法泉寺
第十　長樂寺

當時の政府は如何に組織せられたるかを見よ、朝廷に於ては關白以下の官前朝に異ならず、幕府は左の如くして組織せらる。此時三官四職の名廢して、三管領、七相伴、國持衆、御供衆と變じたる也。管領（總理と云ふが如し三人交も代る）細川左京太夫勝元、畠山尾張守政長、斯波左兵衛佐義廉

御相伴衆（參議と云ふが如し）山名右兵衛督宗全、細川讃岐守成春、一色左京太夫義直、畠山佐衛門佐義統、佐々木京極大膳大夫持清

國持衆（諸代諸侯）斯波修理太夫入道道顯、山名彈正少弼教豐、山名次郎政豐、山名相摸守教之、細川民部大輔教春、細川刑部少輔、山名彈正忠是豐、山名兵部大輔政清、土岐美濃守成頼、佐々木中務少輔勝秀、佐々木四郎政高、武田大膳大夫信賢、富樫介成春

准國持衆 細川中務大輔成經（奥州事）佐々木加賀守

外樣衆 畠山次郎、赤松新藏人、佐佐木鞍智紀伊守、土岐民部少輔、攝津掃除助之親、赤松治部少輔入道有馬、赤松彌四郎

御供衆（德下氏の旗下と云ふが如し）細川右馬頭入道々賢、細川民部少輔、細川下野入道常軒、一色兵部少輔義遠、畠山宮内少輔教國、細川上總介氏久（備中）

飽までも肉慾を貪り、飽までも飲み、飽までも歌はんとするの覺悟を爲さしむるに於て最も便利なるは當時の宗教なりき。此に於てか彼は飽まで浮世の歡樂を貪らんとして應永二年六月、太政大臣を辭し、剃髮して道義と號し、其室町の第を義持に讓り、自ら北山に別業を營む。瀟洒、綺麗、天下に比なく柱壁に塗るに黄金を以てす。世之を金閣寺と云ふ。其結構當時の修養ある社會に行はれたる禪味に出で當時の好尚を代表したるもの也。義滿日夕、此中に起臥し、猿樂、田樂、舞樂、茶の湯、聞香を行ふ。然れども日本歷史ありて以來最も美なる斷訟の法は此の虛榮公子の時に行はれぬ。即ち問注所に、所衆を置き、左右二班に分つて、訴訟者に代つて問難して、斷訟の公平を維持せんとするの一事なりき。其天下を一統せしものは獨り力征のみにあらざりしを見るべし。

二百七十六節　和寇起つて支那、朝鮮を犯す

此時に方てや支那大陸朝鮮半島に於ても、また絶大の變革ありき。元は曾て弘安の年、我に寇して大敗せしより連年、軍備を整へて再侵の志、已むときなかりしと雖も、勢不可なるを以て十三年の後、遂に其企を捨てゝ太平を樂しみ、猛烈朴實なる北人は、南國を征して南國の文化に惑溺して、歐洲亞細亞の兩大陸を震動したる漠北英雄の子孫、驕惰にして安逸に眠るや、順宗の至正八年、方國珍兵を起す。是れ弘安の役後、五十一年にして義貞鎌倉を亡ぼすの前年也。此より盜賊四方に起り天下騷擾し、張士誠は僭號して周朝を立て、朱元璋は明朝を建て、陳友諒は漢を立て、互に攻伐を事とし、元遂に動亂の中に亡ぶ。而して天下を一統したるものは朱元璋也。元璋は鳳陽府臨淮縣大平鄕の人にして都を金陵に定めて國を明と號す。是れ支那史中に希有の革命なりき。古來支那の革命は多く北人若しくは西人を以て、東南人の國を破るの革命にして、南人を以て北朝を覆して大成せるもの此時に初まる。此時高麗また久しく元に臣事し、金幣を捧げ婦女を献し、土地を劃き、年々其力を失すると共に内には叛臣、陰謀跡を絶たず、恭愍王に至り、元の惠帝、明朝に追はれて北方に走りて北元を立つるを見て、即ち直ちに明に服事し、其曾て元に割く所の遼東の地を得て、長く明朝に臣事す。此時に方つて、九州、四國、中國の浮浪、志を國中に得さるもの、去つて運命を海外に賭するものあり。蓋し西南諸州の民、上古より已に海表を以て家となすが故に、漢晋時代より支那朝鮮を侵略せること少からさりしも、國家康寧なるや各〻其生を聊するかため暫らく侵略を絶ちたりしが、北條氏の時、元の侵略を受けて之を破りしより海表を縱横するの志勃然として日本國民の間に起り、やがて南北朝の紛亂となるや、海表縱横の志は正當なる軍隊の手によりて遂げられすして、内亂によりて綱紀紛亂せるを幸とする所在無賴の徒によりて實行せられぬ。彼等は支那に向つて江蘇、浙江、山東、福建の諸州を侵し、朝鮮に向つては南方諸道沿岸の都邑、殆んど到らさる所なし。彼等は數千百艘の兵船を連ね、八幡大菩薩の旗を

山名宮内少輔、豐之、細川讃岐守、成氏、細川勝久、大舘兵庫頭、教氏、畠山播磨守、義元、山名七郎、豐氏、大輔持頼、上野民部、一色五郎、政氏、細川讃岐守、武田治部、信少輔、國信、畠山中務少輔、政元、赤松上総介、家光、赤松伊勢守、貞親、大舘伊勢守、貞勝、伊勢兵庫助、宗貞、伊勢備中守、貞陸、御部屋衆（奥附と云ふが如し）、一色治部少輔、政熙、上野刑部少輔、政直。

＊朝鮮の東國通鑑の一倭寇の初まる愚王二年にあり。是れ我北朝の歷應元年也。

＊＊倭寇は支那人を以て城と樓櫓とを作る。馬を馳せて往來すべし。薩摩の松浦津に居り、自ら稱して徽王と云ふと。

國書編に云ふ倭寇は薩摩、肥後、肥前の人多し、其次は大隅、筑前、博多、攝津、紀伊、播磨、日向、種が島、豐前、豐後、和泉の人多しと。

村岡良弼の古書文を引きて應永十三年の物價を證して左の如く云ふ。（一枚は永樂一文は錢一枚也）

十六文酒二升代
廿三文慈仙一切
廿四文（つゝみ）
出立酒（三升代）
廿四文（酒三升）
五十六文（魚代）
十五文（大根三
集成に云ふ、王直なる者、倭寇の頭目にして、支那大陸の沿岸を荒し、明の封冊を受く

立てゝ、甲冑に身を固め、銳利なる刀劍を用ひ、嚴然たる一大軍隊を作り、或は財物を奪ひ、或は家屋を燒き、或は男女を擄にし、兒暴猛惡至らさる所なく、朝鮮支那の沿岸、目するに倭寇を以てし、倭寇の名、小兒の啼を止むるに至る。元已に倭寇のために苦しめられ、明に至つて愈よ甚しく、沿岸數里爲めに人なきに至る。中に就きて朝鮮の和寇最も甚しく、恭愍王自ら五軍を督して倭寇を防きて大敗し、明と使を聘ねて義滿に請ひ、倭寇を止めんことを乞ふに至る。然れども義滿もまた之を如何ともする能はず。已にして藤原經光なるもの朝鮮に投して全羅道順天に在り。全羅道の鎭將、誘ふて之を殺さんとして露はる。經光憤怒衆を率ひ日本に還り、黨を募つて更らに倭寇を起し、入寇することに婦人小兒をも殺ろして遺さず。全羅沿岸の人烟之かために空しく、京師震駭、都を鐵原に遷さんとし、倭寇遂に進んで咸鏡道の北靑を蹂躙するに至る。高麗倒れて李成桂の朝鮮となりしもの實に倭寇によりて國朝動搖せるが爲めも。義滿が天下の一統に誇りて公卿的榮華を夢ゆるの時、我國民は外に向つて此の如き大運動を試みつゝありし也。

二百七十七節　支那貿易、海賊、らつば、義滿明の封冊を受く

兒殺のみを主とせるものと思はゝ大誤謬にして、此かる倭寇の間にも、貿易は所在行はれつゝありし也。即ち薩摩、肥前、長門、和泉の諸國は早く支那大陸と交通して互に物貨を交易し、

然れども此時に方つて日本國民は唯だ殺戮

大內義弘の富、最も大にして、其義滿の歡心を繫ぎし所以のものは最も貿易を重んじて支那大陸の物貨を蓄へしが故也。而して日本國中、最も貿易の利を重ずるを解せるものは即ち義滿なりき、蓋し此時に方つてや鑄錢の業久しく廢れて、交易の媒介は一に銅錢により、銅錢は多く支那大陸より輸入し來れるものを用ひたればなり也。義滿最も驕奢にして錢を要すること最も多きが故に、支那貿易を奬勵するに於ては義滿最も意を致せり。而して倭寇なるものは此貿易の妨害なるを以て義滿明朝の依頼により、鋭意之を盡くさんと欲し、或は斬殺し、或は煮殺せりと雖も、容易に之を盡くす能はざりき。之より先き菊池武政の猶ほ九州に跋扈するや、懷良親王を奉じて日本國王と號して支那と交通す。明の太祖朱元璋、書を懷良に致して倭寇を禁せんことを乞ふて功なきを見るや、眞の天子にあらざるを疑ひ、即ちまた別に僧祖闡を使して書を京都に致さしむ。義滿之によりて元明更革の情を知り、應永八年三月書を明主に送りて、自ら臣と稱し、黃金千兩を贈るや、九年、明の惠帝、復書して義滿を呼ぶに日本國王を以てす。虛榮浮誇の念多くして、而かも無學なる義滿は、國王の號を得て深く滿足す。此に於てか嚴爾たる大和朝廷を以て、猶ほ隋帝と相對峙せる我國の面目は全く沒了せられぬ。以て當時の文權を握れる五山の僧侶、朝廷の公卿が如何に無學にして事態に通せざりしかを見るべき也。之より明朝送る所の勘合の印を以て、他の賊船と區別

し、年々貿易船を發し、彼我の間、往來益す繁頻を加ふ。然れとも倭寇は之かために毫も減せさりき。之より俗に戰艦を稱して海賊と云ふに至る。當時また海賊と並びて『らつば』*なる野武士あり、彼等は順良なる人民として、諸侯に仕へんには餘りに大膽に、獨立して諸侯とならんには時機を失したるものにして、強盜窃盜を業とす。諸侯もまた之を征服する能はず、之を利用して敵國を斬襲す。此風應仁の亂を經て、天下に普ねし。

二百七十八節　公卿義滿に媚附す、義滿死して法皇の號を贈らる

義滿已に天下を一統して南北を混一し、山名仁木の豪族を夷平し威風堂々として當るへからず、之に加ふるに其驕奢なる前古比なく、支那貿易より得る所の器翫服飾、また其威柄を助く。此に於てか其參朝するや藤氏の公卿も階下を下りて拜跪するに至り、殆んど天子に仕ふるが如し。二條關白師嗣の子、道忠の如きは、義滿の偏名を受けて名を滿基と改め、以て之に媚ふるに至る。其の威權榮華、義滿以前に此の如きはなく、義滿以後また此の如きものあらず。然れども此の如き義滿の威風に對して屈せさるものは、唯だ一人ありき。大內義弘是れ也。義弘已に長門の要衝にありて近傍を略定し、まだ支那貿易と、倭寇を保護するによりて大に富み、意滿ち氣傲り、今世貞世を誘ふて足利氏に背き、自立して將軍たらしめんとす、貞世聽かず義弘即ち、反て之を義滿に譖して、貞世、自立の志ありと爲す。義滿怒つて貞世を追ふや、九州また亂れ、小貳忠資、菊池貞賴等、千葉大

村の諸黨と共に兵を擧ぐ。義弘擊つて之を夷げ、筑前を得て兵勢益す盛なり。是より義滿に屈するを心よしとせず。時に鎌倉の氏滿已に死して、子滿兼之に代り、自ら公方と稱し、執事を改めて管領となし、稍自立の跡あり、義滿之を怒る。義弘即ち檄を滿兼に傳へ、東西相起つて京師を攻めんとす、滿兼之を義滿に告ぐ、義滿諸將と共に義弘を泉の堺に出で、京師に迫らんとす。義弘已に起るを聞くや。土岐詮直は美濃に起り、山名氏清の殘黨は丹波に起り、京極五郎左衞門は近江に起り、並びに之に應ず。義滿諸將と共に義弘を擊つて之を殺ろす。特に應永六年也。此より天下また義滿に敵するものなく、運命の寵兒は驕奢なる九年の生活の後、十五年五月を以て死す。其死するや天皇贈るに法皇の尊號を以てす。子義持之を辭して受けず。明帝之に恭獻王の諡號を贈るや、之を受く。義持、代つて征夷大將軍たり。

二百七十九節　京都、鎌倉の內紛

義滿の死と共に動搖は初りぬ。十九年、天皇位を皇太子に讓る之を稱光天皇とす。南朝の殘黨、其兩統更立の約に負くを責めて已まず、所在兵を起す、義持、擊つて之を平ぐ。已にして鎌倉の上杉氏憲、足利持仲を奉じて兵を擧げ持氏を攻む。持氏は滿兼の子にして代つて管領たるものにして、持仲は持氏の弟也。持氏走つて駿河の今川氏に倚り執事上杉憲基は越後に走る。已にして持氏、義持に乞ふて援兵を得て鎌倉を復し、持仲氏憲以下

*北條五代記に北條氏直二百人の扶持するを云ふ。

倭寇、大に朝鮮を犯す、諸戰つて勝つ能はず。即ち金逸なるものをして日本に來り、足利義滿に乞ふて之を禁ぜんとす。義滿内亂の報を告げて之を辭す。恭て慰王、怒つて諸軍を率ゐて倭寇を戰つて大敗す。鄭地建策して對馬壹岐の二島を取つて、邊患を絕たんと云ふ。即ち夔倘し、元帥朴葳を以て兵船一百艘を率ゐ對馬に寇せしむ。應永二十六年探題澁河滿頼の擊退する所となるや、是より義滿の倭寇に對する態度一變す。

應永十四年僧兆殿司、東福寺の釋迦涅槃像を畫く。

**議管原秀長書を作る

(代)五文(酵母)　(代)十三文(慈悲)　仙一切一十四文(墨)　代)廿四文(酒)　三升代第二日出立廿二文(酒)　四升代)六十四文(酒八升代第三日出立日中)　六十四升代廿四文(酒八升代第四日出立日中)廿六文(酒着代アガリノ時)五十五文(魚代)十八文(大根代)七文(醋代)廿四文(慈仙代)廿四文(米代アガリノ時二度分)　(かち)一三百文(飯ひつ三)　一二百文(おき)　鳥二、こい二

を殺ろす。時に義持の弟義嗣北山の第に居る義滿の世にあるや寵遇兄に超えて、義持の下に立つを欲せず、義持また之を嫉む。持仲の事あるや、義嗣私かに相應じて義持を倒さんとして、事露はる。義持即ち義嗣を相國寺に執へて之を殺ろす。義持已に義嗣の事に懲り、早く其長子をして權を得せしめんと欲し、應永三十年二月征夷大將軍を其長子義量に讓り、餘子をして多く剃髪して僧たらしむ。已にして三十二年、義量死するや義持又事を見る、三十四年。赤松則祐の孫、滿祐貞範の孫持貞と承邑を爭ふ、持貞庶流にして權利なしと雖も、義持之を殊寵し、赤松氏の所領五個國を割きて其三國を持貞に與ふ。滿貞憤懣、白旗城に還り、兵を擧げて叛す、義持、細川持元山名滿弘をして之を打たしむるや、諸將、京にあり徒黨して義持に迫り、持貞を殺し滿貞を許さんことを請ふ。義持已むを得ずして持貞をして自殺せしめ、滿貞を免るす。義滿が雄志によりて漸やく積成せられし幕府の權、稍々落ちて强臣跋扈の端復た開く。三十四年、義持病む、義量子なきがため、或は鎌倉の持氏を迎へんと云ふものあり、卜筮によりて義持の同母弟青蓮院の僧正義圓を還俗せしめ、名を義敎と改め、將軍とす、正長元年、義持遂に死す。

二百八十節　義敎の勵精、持氏の自立

七月、稱光帝崩ず、後小松上皇勅して崇光の曾孫彦仁親王を立てゝ帝とす。之を後花園帝とす。後龜山の皇子兩統交立の約の如くせんことを冀ふて得ず、即ち走つて伊勢の北畠氏越智氏によりて兵を擧ぐ、義敎討つて之を平げ、皇子を執へて之を嵯峨

應永三十年七月朝鮮の使大藏經を送る。

野に幽し、正長の年號を改めて永享とす。持氏將軍たらさるを憤り、義敎に屈するを屑とせずして曰く、我豈に還俗將軍に屈せんやと、猶ほ正長の號を用ゆ。義敎また衆心の己に服せさるを知り精勵治を求め、權門の吹擧を禁じ、壁書を管領の家に送り訴論の人は奉書の後、十日を出でず出でゝ仔細を述ふべし、此日限を過ぐる者は沙汰に及ふべからすとす。また九州の富豪四人*を京師に移して京師を飾り、大神宮及ひ高野山に詣るに托して、伊勢紀伊に遊び、南朝の餘黨を馴致し、富士山を見るに托して、駿河の今川氏に館して、以て鎌倉の形勢を伺ふ。其精勵刻苦殆んど義滿の風を存す。持氏の庸暗到底企て及ふべからさる也。併かも持氏一日も叛離の企を廢せず、蓋し是れ持氏の野心のためのみにあらず、地勢之をして然らしむる也。之を先にしては源氏の平氏と爭へる北條氏の朝廷を抑へたる、尊氏直義の後醍醐を覆したる、皆な其個人的勢力のみならず、實に其地勢の自ら一統を畫する、此地勢によりて養はれたる人民の氣風とによる。故に足利氏の宗族にてありながら、氏滿、滿兼、持仲の鎌倉に管領たるやまた自立の志を抱く。京都の地勢、偏在して以て之に號令するに足らさるがためのみ。此時、村上頼清、信濃にあり守護、小笠原政康と境を爭ひ、連年鬪爭して數ば爲めに敗らる、頼清救を鎌倉に乞ふ。持氏之を助けんと欲す、小笠原は將軍義敎に射を敎ゆるもの也。故に執事上杉憲實、持氏を諫めて曰く、鎌倉願清を助くれば、京師必らず小笠原を助けん、是れ京師と戰を開く

*其一人を奥野直次と云ふ。

五年、使を明に發して國書方物を送る、明使また之に酬へ來る、其書猶ほ「勅諭日本國源義敎」と云ふ。

十年八月飛鳥井中納言藤原雅世新續古今集を撰す。

此時義教の弟義照、古河の城久しく陷らざるに乘じ、後龜山の皇子を奉じて兵を起し、義教に代らんとす。義教之を察して執へんとす、義照逃れて九州に走る。

の也、且つ小笠原は清和源氏の流にして、足利氏と祖を同じうす、之を攻むるは同族相食む也と。持氏聽かず、私かに一色直兼、上杉憲直をして兵を集めしめ、先づ憲實を殺さんとす。士心多く憲實に屬して來らず、持氏即ち自ら憲實の邸山の内に至り、罪を憲直に歸して過を謝す。十年、持氏其祖八幡太郎義家の故事に從つて其子を鶴が岡の社に元服せしむ。憲實以て京師に不臣の跡ありとして諫め、將軍の加冠を請はんとす。持氏笑つて曰く、我は尊氏の後裔也。爭でか黑衣法師をして冠父たらしめん耶と。遂に義久と名づく。禮終つて憲實獨り賀せず、持氏遂に意を決して之を除かんとして兵を集む。憲實其邑上野の白井に走る。弟清方兵を起して持氏と戰ひ、且つ使を京都に發して義教に訴ふ。義教乃ち上杉持房をして五萬人を率ひて東海道より下らしめ、上杉致朝をして七千人を率ひて北陸より上野に入り、憲實と兵を合して鎌倉を攻めしむ。持氏敗れて降を乞ふ。義教許さず持氏、義久、皆な自殺す、持氏の遺孤、春王、安王あり、乳母長尾氏、抱きて日光に走り、人を遣はして結城滿朝に說かしむ。滿朝之を奉じて結城、古河、關宿の三城を修む。持氏の殘黨起つて之に應ず。持房、教朝、清方等從つて之を攻む。三城の諸將士、固守すること三月にして城陷り、二孤また執へらる。長は十三歲にして季は十一歲也、共に刑場に臨み泰然として死に就く。

二百八十一節　赤松滿祐、將軍義教を殺ろす、赤松氏亡ぶ

義教已に鎌倉を亡ぼすやまた管領を置かず。思

文安二年鎌倉の將士持氏の季子成氏を管領させんと請ふ、之より亦管領あり。

＊滿祐猿樂を設けて義教を饗す、酒酣の時僕をして馬數十疋を放たしめ、擾動に乘じて門を閉ぢ、教康安積小三郎義教を殺ろす。義教年四十八。

滿祐の姪教祐、九州に走つて小貳嘉賴による。大内持世命を奉じて伐つて之を

らく天下の亂源を拔けりと。然れとも過てり。足利氏は天下の人心に恩威の歷史を刻めるものにあらず、其の能く立つ所以のものは力征にあつて存す。鎌倉は京師に離叛するの志ありと雖も、また南方諸侯を威嚇する一の蓄積力たりし也。今や鎌倉已に蹂躙せられて北方の武力を養成するの淵源なく、加ふるに足利氏累代の族黨皆な京師、西南、東海に地を領して其根據を据へしより天下の武力、北方より南漸し、足利氏は自ら其立つ所以の基礎を失せるもの也。此より足利氏は皇室の如く、公卿の如く、諸侯の權力平均の上に立つの外、自家固有の武力なるものなきに至りぬ。義教之を悟らず、天下之より憂ふるに足らすとなし、諸將を輕んず。赤松滿祐は播磨備前美作の守護にして、反覆を耻ぢさる驕臣の一也。其形貌卑醜にして短小なるを以て、義教之を侮慢して三尺入道と云ふ。滿祐屈せず、數ば義教を譏る。已にして義教が滿祐の族人貞村を寵し、赤松の領邑を割きて之を與へんとするを聞くや、義教を饗＊應して其醉に乘じて之を殺ろし、族人を率ひて播磨に歸る。管領細川持之、畠山持國、大内持世等と議して義教の子義勝を立てゝ將軍とし、兵を出して滿祐を擊つ。細川持常、南道より進み、山名持豐北道より進む。持常、滿祐と姻婚を通するを以て逗撓して進ます。持豐獨り進んで美作の諸城を下して還つて白旗城に滿祐を攻めて之を殺ろす。此に於てか赤松氏全く亡ぶ。其先圓心、後醍醐に應じたるより暴かに家を起し、反覆跋扈すること九十年也、持豐功を以て悉く赤松氏の邑を領す。

持豊は山名時煕の孫也。之より山名氏また漸やく昌ゆ。時に嘉吉元年九月也。

二百八十二節　畠山氏將軍を制す、山名、細川の二氏大也

嘉吉三年五月將軍義勝、馬より落ちて死す、管領畠山持國、義勝の同母弟義成を立てゝ將軍とす時に八歳也。後ち名を義政と改む。持國已に幼主を立てゝ權を專らにし、剃髪して德本と號す、出入するに網代の輿に乘り騎馬十二人を左右に從へ、威權將軍を凌ぎ、一條兼良、近衞房嗣等關白たらんとして、競ふて德本に媚附するに至る。時に公卿の窮乏前古比なし。南朝の殘黨、日野有光、資親等之に堪へず、後龜山の第三皇子の僧となれるものを誘ふて蓄髪せしめ、九月二百餘人の徒黨を募り、宮中に駈入し、火を放つて神器を奪ふ。衞士追擊、神鏡と寶劍とを得たり。日野の黨、玉璽によりて皇子を叡山に即位せしめ、中興の宮と號す。德本兵を發して擊つて之を平らぐ。是より德本の勢威愈よ大也。獨り山名持豊、抗然として扞拒し、細川勝元また宗全と結托して畠山氏を押へんと欲す。德本初め子なく、其弟持富の子政長を養つて子とす。已にして義就を生み、漸やく政長を疎んず、義就また政長を讒して已まず。德本遂に政長を廢して、義就を立てんと欲す。政長出でゝ勝元に倚り、其從臣をして宗全によらしむ。政長、將士に人望あり、畠山の一族多く政長に從ふ。一夜火を德本の家に放つものあり、德本逃れて滿則の第に入り、義就は河內に走り、遊佐氏に宿す。德本已むを得ず、政長をして家を繼がしむ。是れより畠山氏衰へて細川勝元、山名宗全

文安五年、赤松左馬助朝鮮より歸り、回復軍を起さんとして殺さる。

爽げ、小貳の地を併す、之より大內氏また起る。

の二人漸やく大也。已にして義就、政長の命によりて相和すと雖も、何人も其明日を知る能はず、大亂の勢漸く決せんとするを見る。

二百八十三節　義政帝王の儀を具ふ、驕奢より德政を生ず

此時に方つて義政年少を以て義滿驕奢の跡を受けて、氣宇愈よ尊大に、益す奢侈を極む。其の大納言となりて參內するや、古昔藤原氏の公卿が乘れる檳榔毛の車に乘り、日野右大辨勝光、其簾を擧げ、滋野井左少將敎國沓を取り冷泉左兵衞佐永繼、劍を取る、純乎なる王者の儀禮也。また義滿の金閣に對比せんがため、東山に銀閣を立つ*、其の高倉邸の障子を作るに、一間に費す所永樂錢二萬に當る。二萬の錢は以て二百石の米を買ふべし。また花の御幸と稱する遊幸には、百味を以て百果を作り、御相伴衆には金の箸を給し、御供衆の箸は沈香木を以て作り、金もて逆鰐口を作る。以て其の榮華の程を知るべき也。故に國用給せず、守護より二十分の一を取るの制も破れ、臨時の課役、賦金を數ふれば、殆んど前代に十倍するものあるに至る。故にまた市民より債を起すに至る。市民の財を借るをもしに　義政の時に至ては一月八九度に至るあり。遂に償還の法なきや、一切の貸借を消して權利義務共に滅せしめ、名けて德政と云ふ。是れ古代にありて富民が貧民に錢を貸與して、利上に利を附し、遂に人身を低當とせしむるの甚しきを見て、帝王の德を布きて、此の如き窮苦を救

*未だ銀を塗するに及ばずして死す。

はんがために初めたるものありと雖も、今や一變して政府、借金を爲し、自ら德政と號して、借金を消すに至れる也。猿樂田樂は其の歡樂也、聞香茶の湯は其事業也。語錄、山水は其宗教也。概して云へば王朝時代宮中の淫奔猥褻の風少なきのみ。其他は純乎たる王朝時代の生活は再び幕府中に行はるゝに至りぬ、人民之がために流離逃散するもの相次ぐ。

二百八十四節　足利時代の技藝　然れども此等の奢侈は多少の技藝と文字とを生じぬ。奈良朝平安朝の技藝は多くは建築彫刻なりき。今や義滿より義政に至る間に於て、日本の歷史に稀有なる繪畫の新紀元は開かれぬ。其の開元者は實に東福寺の殿司、明兆なりき。明兆は淡路の人、東福寺に釋迦涅槃の像なきを慨し、極力、之を寫す、其畫風は初め巨勢の流に出づると雖も、支那近古の名作を學んで別に一家を爲すものにして、之より一新紀元を開く、世之を兆殿司と云ふ。時に明の畫師如拙來聘す、其門また周文、雪舟、狩野正信の三名手を出し、是より繪畫漸やく盛也。而して此三者、各〻其趣を異にすと雖も、純乎たる日本の自然山水に養はれたるものにあらずして南宋の自然山水に養はれたるものなるが故に宋風を帶びたり。是れ足利氏に至りて大陸との交通を始めたるの結果也。而して當時の技藝の最も顯著なる特質を示めすものは、金閣銀閣の二者也。共に琦麗也、共に瀟洒也。琦麗は國人固有の好尚より來り瀟洒は當時の宗教たる禪味より來る。而かも壯大を缺き、雄偉を缺き、到底奈良時代の建築の巍々たる規模を有せざる也。是れ奈良時代は技藝の翻譯時代にして、平安より、足利氏に至りては日本的好尚に化せられたる爲め也。此かる奇麗、瀟洒、奇巧の好尚中より後藤祐乘の金屬彫刻を生じ、蒔繪も更らに進歩し、祥瑞の燒物も唐津に興り、明珍の冑も出でぬ。僧珠光の手より茶の湯も流行し、世阿彌歡阿彌の爲めに猿樂は絶大の發達を爲し、凡そ一般人民の日常の幸福を進むべき技藝と其發達せざりしと雖ども、貴族的嗜好を滿足せしむべき技藝は雜焉として室町御所の保護の下に生長しぬ。

二百八十五節　足利時代の文學　文學もまた多少の進歩なきにあらず。北條時代より學問は公卿の手を離れ、學校を去りて僧侶殊に禪宗の手中に歸せしに、高時の末年より天下の爭亂一日も已む時なかりしため、文教は全く埋沒せられぬ。後醍醐即位の前、鎌倉の執權貞顯の孫、金澤顯時金澤に文庫を立て、和漢の書冊を集め、貴賤を問はず、篤志の徒に貸與せしが、足利氏に至り上杉憲實其の敗壞を補ひ、また王朝時代の下野の國學を再興し、僧侶を聘して諸生に教授せしむ、是れ所謂る足利學校也。東西の將士、各々其子弟に學ばしむ。其學問を士流の間に流布するの一事に於ては、足利時代は決して王朝時代に劣るものあらざりき。且つ其文學上の製作に於ても、直義時代に生じたる太平記あり。義政時代に生じたる謠曲あり。また他の時代に對して足利氏時代を飾るに足る。太平記の作家、知るべからずと雖も、世に小島法師の作なりと稱せ

らる。日本文學は歴史的積勢により、文明の性質により、純乎たる大和詞のみを以て遣るべからざるものと決定せられしも、唯だ疑問は如何に漢文を混和すべきにあり。最初に此問題を解釋したるは紀の貫之等なりと雖も猶不十分なるを免れず。次に解釋したるは鴨長明等なりしと雖も、猶ほ大和詞の多に失したり。平家物語と源平盛衰記とは、最も滿足に近き解釋を爲しぬ。今や太平記は更らに一種の解釋を爲し、漢詩を混和すること、稍や前の二書よりも多く、其語脈もまた一層漢文に近づき、以て貴族的習氣ある者の需要に應ずるに至りぬ。其文、源語、盛衰記の沈痛勁烈を缺くと雖も、優美にして品位あり、物の哀を感じ、山林の氣に富むは、遙かに二書に勝る。是また平氏の末路、北條氏の時代より足利氏の時代が、南人的の多感の情と、貴族的臭味を有したるを代表したるもの也。而して其議論に至ては、最も能く當時に行れたる思想を代表す。後醍醐は太平記のために無實の非難を得たり、然れどもまた無實の稱譽をも受けたりき。尊氏も然り、義貞も爾かり、太平記を以て事實の史料としては誤謬多きや疑ふべからず。然れども當時の社會に行はれたる議論感情は最も能く太平記に於て代表せられたり。英國清教徒の革命は尊氏等が勝ちたると同じく、クロムウエル等の勝利なりき。然れども彼等は文學、技藝を輕んじたるがため一人、彼等のために之を傳ふるものなく、皆な敵黨のために盡かれたるがため、あらゆる缺點は擧げられたり。あらぬ害惡は擧げられたり。然れども其の美質は悉く埋沒せられたり。彼等は獅子の如く勝ちて、犬の如く傳へられたり。若し延元の內亂をして唯一、北畠顯房等の黨派をして筆せしめば、尊氏等もクロムウエルの如くなりしならん、唯一の太平記あり、兩黨の研醜悉く傳へられし也。謠曲に至ては、足利時代に至つて發したる特有物也。義滿世阿彌、觀阿彌を寵用してより、猿樂は絶大の發達を爲し、遂に公會の樂と定められるゝに至りぬ。猿樂の起原に至ては新近ならず、然れども謠曲を以て之に附し、高尙優美なるものとなしたるは足利時代に始まる。而して當時の文學は重に五山の僧侶に握られたるがため、謠曲の多くはまた、佛敎思想を以て、人生の運命を批評するの具となりぬ。然かも其文章は一種の詩也、敍事詩よりも殆んど舒情詩也。其調雲烟渺漂、有を以て無となし、無を以て有とする文章の瑰麗に於ては殆んど其能事を盡しぬ。已に太平記を有し、謠曲を有したる時代は、短歌に於てもまた決して貧しからざりき。當時の和歌は新葉集、新續古今集あり。當時の歌人ともいふべき公卿は、爭亂に遇ふて東奔西走し、擾々騷々、唯だ生きんことを求むるのみ。殊に藤原の定家死して其子、爲永、歌を以て業とせしより、格調を定め、句法を定め、語法を定め、古詩を見ること、聖經の如く、之に觸るゝは神聖に觸るゝが如くし、詩人をして其規矩の外に逸せしめず、逸するものを異端として排せしかば*歌道凌遲、また振はず。故に、此中固より古今の淸麗、萬葉の雄邁を發見する能はずと雖も、然かも當時の詩、多く人生の實際より出でしも

*元龜三年細川藤孝が三條大納言實澄より古今集の秘傳を受くるや左の誓文を納

れたり
古今集御傳授之事、爲御門弟、請御說之上者、永如親子、不可存疎意候、猶義理口傳故實他言口外之儀、曾以不可有之候、與他令混亂、是非之褒貶禁制之段、如道之法度存其旨候……若此條令違背者大日本國中神……殊和歌百神之冥罰忽其身上可罷蒙者也。

のなれば、誦すべきもの少なからず。殊に南黨の手に出でし離別感懷の詩に至ては人をして悲泣せしむるもの少からざる也。然れども詩人の才固より、常に新奇を求めずんば已まず。連歌の法を發明し甲乙唱和以て其志を云ふに至りて一種の新形式を爲し、公卿には攝政二條良基、關白一條兼良、僧心敬、宗祇、最も名あり、中につきて宗祇、最も高調、清思、多少の宗教的思想を有し、身を雲水に托して天下を周遊し、足跡殆んど至らざる所なし、是より連歌の風天下に遍ねし。史家が足利時代を稱して暗黑時代と稱するは、其の戰鬪日夜已む時なかりしがために其の一面を見て之を云ふのみ。其實文明を生ずべき活力は已に業に此中に存したりし也。

第二十二章　戰國時代

神武紀元二千一百三年よりより二千二百三十八年に至る

第二百八十六節　應仁の大亂、將軍義政、其室富子　第二百八十七節　混鬪十一年　第二百八十八節　京都荒廢して公卿四散し、一向宗獨り昌ゆ　第二百八十九節　政權下に移る、舊社會解けて新結合起らんとす　第二百九十節　伊勢長氏の成功、畠山、細川の爭權、天皇崩じて葬むるの財なし　第二百九十一節　大內義熙京都の權を執る、天皇潤筆料によりて衣食す　第二百九十二節　天子將軍を擁するも功なし　第二百九十三節　南人、北人、疲勞して新勢力中央に生ず　第二百九十四節　駿河の今川氏　第二百九十五節　武田晴信の人物、軍隊、政治　第二百九十六節　織田信長　第二百九十七節　德川家康　第二百九十八節　朝倉義景、淺井長政　第二百九十九節　上杉景虎、山陰、九州、奧羽の豪族　第三百節　寺院の武力再發して數諸侯に敵す　第三百一節　上杉景虎、武田晴信と戰ひ北條氏を攻む　第三百二節　泰西諸國と交通し基督敎來り、大內義隆

亡ぶ　第三百三節　毛利氏著はる　第三百四節　京都の無政府　第三百五節　武田、北條、今川の同盟、織田信長今川を亡ぼす　第三百六節　信長、家康と同盟し三好松永、義輝を殺ろす、信長の上洛　第三百七節　信長、淺井、淺倉を破り比叡山本願寺の僧兵を破り基督教を保護す　第三百八節　信長の政、義照、信長を忌む、晴信の死　第三百九節　義照、信長と戰つて敗る　第三百十節　小黨滅亡大侯嚆起の運、政權下に移る、舊社會の聯鎖悉く絶ゆ　第三百十一節　社會の新結合力、忠義心の發芽　第三百十二節　兵農の分別、城下の發達、戰術の變還　第三百十五節　信長の城廓陣法世風を一變す、部下の人物、毛利征伐

二百八十六節　應仁の大亂、將軍義政、其室富子　然れども諸侯は此の如き時代に生活するを知らず、野心、貪亂、相爭ふて此活力を鎭壓せんとす。故に無言の時勢は彼の野心家をして、大に戰ふて氣盡き神勞れしむるを待つの外なしとせるが如し。享德三年十二月、鎌倉の成氏、其執事上杉憲忠を以て父、持氏の仇となし、結城氏朝の子六郎成朝と謀つて之を誘殺す。憲忠の族人服せず、兵を擧げて之を攻む。成氏敗走、古河城を守る。之より連年鬪爭寧歲なく、坂東八州大に亂れ、義政の弟、政知を請ふて鎌倉の主となすも人心服せず、伊豆の堀越に居る。之を堀越御所と稱し、成氏の古河御所と幷稱す。北方が此の如く亂るゝに方つて、中原の大亂漸々熟し來りぬ。康正元年、畠山德本、赤松氏の後を立て、功臣の家を保たんと欲し、赤松敎祐、則尙に播摩を與ふ。山名宗全見て以て己の勢を削ぐものとなして二人を攻めて殺ろす。之より先き中興の宮が日野の徒黨となりて敗北するや、其子また南朝殘黨の擁立する所となる。赤松氏の遺臣、石見、間島、中村等、之を暗殺して神璽を取り、功を以て赤松氏を興復せんことを乞ふ。朝議之を許るし、滿祐の族、政則に加賀を與ふるや、宗全見て以て勝元が己の權を削らんとするものとなして政則を殺さしむ。之より宗全の威、幕府を壓し、細川勝元と相當る。之より先き勝元、宗全の女を娶つて子なきを以て、宗全の子是豐を養つて子とす。已にして子を生むや是豐を廢す。宗全益す勝元と隙あり、寬正五年七月花園帝位を去つて太子後土御門*の立つ頃は兩黨の間愈よ軋轢して正に火を發せんとするの勢あり。義政、奢侈に於ては一大過失あり、然れども敏才にして果決あり、昂然自ら高しとする風あり、夢想の如き大志あるに於ては、之が匹敵を人主に求めんには後醍醐の大業をして挫折せしめたると同一なる騷亂の天魔は彼の背後に立てり。義政贈左大臣裏松重政の女富子を娶りて寵幸比なし。言として聞かれざるなく、聰明爲に頗る掩る、香樹院の局、春日局、眞藥西堂、伊勢守貞親等また相繼

*天皇名は成仁後花園の子也。

憑す、故に論訴刑賞多く、內人により決せられ、管領の權また行はれず。忽ちにして賞し、忽にして罰し、また忽にして許さるゝことあり。少からざりしかば、諺に勘當に科なく、赦免に忠無しと云ふに至り、富子は殆んど後醍醐に於ける三位准后の如くなりき。富子子なし、義政之を憂ひ、弟義尋が淨土寺の門主たるを强ひて還俗せしめ、名を義視と改めて養子たらしむ。細川勝元、其執事たり。富子怨憤、走つて宮中に入り、其姨母に依る。已にして意を屈して義政の邸に歸るや、久しからず子を生む。中外私かに之を以て義政の子にあらず、後花園天皇の子となす、義政疑はず、寵愛比なく、遂に義視を疎んずるに至る。然れども初め義視を養つて子とするや、決して嫡長たるを廢せずと約したるを以て富子、銳意して其子を立てんと欲して、遂に勝元の敵手、山名宗全を誘ふて曰く。一人の子を僧侶たらしむるに忍びず、此を以て汝に托す、汝が爲さん欲する所を爲せと。宗全遂に意を決して富子の附托を諾す。此時に方つてや畠山政長の義就と爭ふや已に久し、宗全義就の勇武を利として、政長を捨てゝ義就に和し、以て用を爲さしめんとす。斯波氏もまた義廉、義敏互に權を爭ふ、宗全義廉を助けて義敏を排す。義政固より義廉を憎む。義視が義廉を助くとの風說を聞き、即ち義視を義絕す、義視去つて細川勝元に倚る。此に於てか一方には勝元あり、義敏あり、政長あり、一方には宗全あり、義廉あり、義就あり、兩黨の旗幟漸やく分明也。義政之を憂ひ命じて曰く、義就政長宜しく獨力戰を決すべし、諸將の之を助くるを禁ずと。二人御靈の森に戰ふや、宗全私かに義就を助けて、政長を破る。此に於てか、勝元、大兵を集めて宗全を攻めんとし、宗全また大兵を集めて之に備ふ。時に應仁元年三月也、所謂る應仁の大亂此に初る。

*應仁記によれば勝元の軍十六萬一千五百人にして宗全の軍十一萬六千人なりと云ふ。然れども當時此大兵を動かすこと能はざるべし。

此時に方つてや天下また南北朝を語るものなく、正統、僞統を語るものなく、新田足利を語る者なし。皆な細川山名の大軍の下に集る。勝元は其領國攝津、丹波、土佐、讃岐等の兵を集め、且つ之に黨するもの斯波義敏、畠山政長、京極持清、赤松政則、富樫政親、武田國信其他、將軍の近臣にして黨するもの數十人、其軍數萬に達す*。勝元の邸京都の東方にあるの故を以て之を東軍と云ふ。宗全は但馬、播磨、備後、等の領邑より兵を集め、之に黨する斯波義廉、畠山義統、一色義直、土岐成頼、六角高頼、大內政弘、河野政通等の軍を合してまた略ぼ勝元の兵に均し、其京都の西方に陣する故を以て西軍と名く、國を以てすれば西軍に屬するは播磨、但馬、因幡、伯耆、石見、美作、備前、大和、河內、紀伊、能登、越前、尾張、遠江、近江、丹波、伊勢、美濃の十八國にして東軍に屬するものは安藝、若狹、加賀、近江、飛彈、出雲、隱岐、越中、紀伊、參河、備中、土佐、讃岐、攝津、丹後、和泉、淡路、阿波の十九國也。日本の大半、悉く此の黨爭に與かる、與からさるものは東海、東山の一半と西海道のみ。楠氏の遺族、南黨の子孫、皆黨を分つて兩軍に屬す。五月に至つて

兩軍京師に充滿し、市民驚奔して大半盡く。勝元最も巧慧にして利害の打算に敏に、冷靜にして沈着、然かも其斷ずるに方つてや、深酷にして大膽、南人の特色を有す。宗全に至ては一個木强の頑物にして人を殺ろし、人を威し、人を壓するを知るのみ、打算に至ては極めて少なし、然かも諸將を致すものは其の勇武敢爲の氣質のみ。義視、東西兩軍に往來して調停し義政の旨を傳へて、先づ戰を開けるものは即ち公敵とせんと宣言す、兩軍之が爲めに相持して發せず。勝元先づ幕府を取つて天下に號令し、順逆の名によりて宗全を苦しめんとし、營を幕府に聯ね、兵を發して幕府を守り、足利氏の旗を出して四門に立て、諸將を幕府に集めて謀議す。宗全勝元の爲めに幕府を取られしを憤り、兵を發して之を攻めて勝たず、之より兩軍交も巷戰して寧日なく、盜賊公行、火を放つて財を掠む。已にして六月八日火九ヶ所に起りて、百町三萬餘戶を燒き、京師の中央茫々たる荒原となり、前代未だ曾て聞かざる慘狀を生じぬ。已にして大內政弘、長門筑前、周防豐前の兵三萬人を率ひて宗全を助くるや、宗全の軍、益す勢を得て、勝元數ば敗る。勝元即ち義政私かに宗全を助くるを疑ひ、近從の士十二人を請ふて之を追ひ、猶ほ義政が宗全の陣に走らば天皇を擁して戰はんとし、宗全皇居を襲はんと脅かして、室町の第に行幸せしむ。伊勢貞親、義視と隙あり、流言して曰く勝元義政を廢して、義視を立てんとすと。義視走つて伊勢の北畠氏に倚る。北畠氏は極力、尊氏と抗爭せるもの、今や尊氏の子孫北畠氏によるに至ては世變の甚しきを見るべき也。已にして義政、手書を以て義視を招く、義視歸ればまた流言あり、勝元、義視を奉じて義政と戰はんとすと。勝元即ち、義視をして山名の陣に入らしむ、宗全大に悅びて首領を得たりとなし、義政また心を安して勝元の陣中にあり、世之を名けて東西の戰、一變して兄弟の戰となれりと云ふ。此の如きもの五年、文明五年三月宗全七十歲にして死し、五月勝元また四十四歲にして死す。兩軍其首領を失ふと雖も、相持するもの四年、文明九年、天皇宮に歸るや、西軍の諸將先づ引ひて國に歸り、義視、美濃に走りて土岐氏に倚り東軍の諸將もまた各々國に歸る。應仁元年より此に至るまで凡十一年にして、京師初めて靜謐也。而かも之と共に諸將國に歸つて各封疆を固め、戰鬪を事とせしかば、中原平ぎて天下漸やく亂世に向ふ。

二百八十八節　京師荒廢して公卿四散し一向宗獨り昌ゆ

況んや京師靜謐に向ふと雖も、十一年間の巷戰に宮殿、寺院、文武の第宅、民家、烏有に歸し、京師大半荒原となる。* 而して兩軍の將士市民の倉中にある財物を賭して博奕し、敗るゝや其倉中に闖入して貨物を奪ひ、以て勝者に償ふの風あり、** また公卿が亂を避けんがため豫め藏匿したる財貨も、兵士盜賊の爲めに抄掠せられて一物を餘さず、歷朝の圖畫、寶器、悉く壞滅せしかば、公卿は亂平らぎたるを見て歸らんとするも家なきがため、高野の寺院、中國の知人、長門の大內、九州に流浪し、*** 市民は商賣せんとす

*之より先き京は京白河を并せて二十萬戶ありき（偃鼠草案）

**京師の民の利に敏なる、此大亂に際して、奈良と坂本に日々市を立てゝ、兵士盜賊の抄掠する貨財を賣買せり。

***攝政一條兼良の孫政房、兵庫の領邑にあり。武士之を執へ又を其心に加へて殺

ろす。兼良之を聞きて歌ふて曰く、とても死ぬる命をいかに武士の家に生れぬ事ぞくやしきと、以て其公卿境遇の窮苦を知るべし。

るも道なきがため、行く手定めぬ漂泊の旅行を初めぬ。公卿市民已に自家の活路を有せざれば巍々たる大堂の中に住みて天下を睥睨せる僧侶も、今は身を寄する所なきがため、或は食を道に乞ひ、或は變じて盜賊となるものあり、京中の光景此の如くなるに加へて、此年大に旱して米穀の收穫を過ちしより、餓莩京師に滿ち、東西兩軍の將士國に歸つて戰端を開くや、貢賦來らず、米穀上らず、皇室の如きは窮乏の頂上にあり、紫震殿の築地、敗るゝも之を改修するの道なく、三條の橋より之を望むに、內侍所の燈光を見るに至りぬ。獨り此際富榮なりしものは、眞宗の蓮如のみ。蓮如の親鸞八世の孫にして、洛東大谷に道場を開くや、叡山の僧侶に迫害せられ、逃れて宇治の山科に移る。而して時人之を尊信して爭亂の間に於て猶ほ財を積んで之に奉じ、富諸侯よりも大に、其御文章なるものに至ては、天子の綸旨を糞土に比する武夫をして、能く感信せしめたり。

二百八十九節　政權下に移り、舊社會解けて新結合生ぜんとす

應仁の亂は勝元宗全の權を爭ふに起り、義就と政長の畠山家嫡を爭ふに長じ、富子の子義尙と義視との將軍を爭ふに成る、十一年の戰鬪は勝敗を決せざりしが、東西兩軍の解き去るや、義尙立つて將軍と成り、義政退隱し、義就國に就きて、政長管領となりしかば、其結果に於て兩軍の主張は交綏せられたり。而して義政、東山の銀閣に退き、喫茶聞香を事とし、古器書畫を弄す、彼の覇氣已に衰へたると、多少の禪

味は　天下の大亂を見つゝ悠々一世を忘れしむ。之より先き文明三年、京師の大亂に乘じ、斯波氏の家臣織田、甲斐の二族、亂を爲して、其主義雄を殺して、甲斐は越前を取り、織田は尾張を取る。家臣朝倉敏景京師にあり、變を聞き國に歸り、甲斐を殺ろして越前を領す、是れ戰國簒奪の初也。之より簒奪風を爲し、政權益す下に移る。同年上杉顯定は成氏を古河に攻めて下總の千葉に走らしめ、已にして和するや、顯定上野の平井に戰つて八州を管領す。上杉定正の家臣太田道灌父子、河越江戶の兩城に分居し、節儉にして民を安んじ、政治を公平にして民心を收めしかば、八州の志漸やく定正に歸す。是より兩上杉隙あり、數ば兵を交へて寧日なし。已にして顯定反間を放ち、定正をして道灌を殺さしむ、道灌死して士心多く定正に背くや、顯定急に之を攻む。此の如く南方は應仁の亂の怨恨によりて互に國境を爭ひ、北方はまた强族崛起のために相爭ひ、日本全國、所として干戈を見ざるの地なきに至りぬ。此時に方つてや尊氏以來、門地を占めし者或は驕惰によりて衰凋し、或は敗北によりて零落し、政權下に移るの過渡にして、位にある者、能なく、所領大なるもの力なく、族黨內に爭ひ、骨肉交も戰ひ、天下の大勢滔々として傾き、族黨の力恃むべからず、歷史の力恃むべからずして此に新結合を生ぜんとして、正に是れ匹夫獨力を以て天下に呼號するの時なりしかば、智勇辨力に秀づるの壯士、一劍千里を橫行して友を求むるの風を生じぬ。

二百九十節　伊勢長氏の成功、畠山、細川の爭奪、天皇崩じて葬むるの財なし

最も成功せるものは伊勢の長氏也。彼れ伊勢に生れ、少小功名の志ありと雖も、其時を得ずして屈せしが、今や應仁の亂は天下諸侯の優劣强弱を示して、虛實の機已に明なるや、室町將軍仕ふるに足らずとなし、荒木、山本、田目、荒川、有瀧、大道寺等の壯士と共に駿河に入つて今川氏輝に仕ふ。氏輝、其勇武を愛し、駿河伊豆の境を守らしむ。長氏即ち襲ふて上杉氏の國を取り、遂に八州の雄となり、北條氏を稱するに至る。天下の形勢此の如く一變せるを知らず、京都の將軍は猶ほ詩會を開らき、官職を競ひ、書を講じ、使を明に發して金を送り、錢を受く。京師亂後に際して盜多きや、佐々木高頼の地近江にして、最も京師に近きを以て命じて京都を守護せしむ。高頼應せず、義尙怒つて兵を發して之を攻む、已にして義尙病あり陣中に死す。義尙子なし、義政、義視を招き、其子義材を立てゝ將軍とす、後名を改めて義植と云ふ。義植義尙の志を繼ぎ、必らず佐々木高頼を亡ぼさんとす。京師盜多きを以て、天皇手書して義植を召還す。已にして畠山政長に擁せられて義就の後義豐を河內に攻めて正覺寺に軍す、細川政元等政長の驕傲を忌む、義豐之を利として政元に援を乞ふ。政元即ち義植を正覺寺に圍む、政長戰死し義植は執らる、之より先き伊豆堀越にある足利政知、後妻の子義通を愛して、長子を疎んず。長子怨憤政知を殺ろす、義通逃れて駿河の今川氏による、今川氏、伊勢長氏をして其長子を擊つて之を殺ろさしめ、義通を政元に托す。今や義植幽せられて鎌倉主なし。政元即ち義通を立てゝ將軍として名を義澄と改む。義植逃れて大內氏に頼る、大內義興兵を起して政元を討つ。此かる爭亂の中に後土御門帝崩じて、後柏原帝立ちしかば、即位の禮の行はれざるのみならず、幕府四方に徵發するも、費用至らざるが爲め、其柩を黑戶の御所に置くこと四十餘日、僅かに一萬疋の金を得て之を葬むる。政元の部下三好長輝、族人細川澄元、香西を殺ろし。細川氏の權三好長輝の手に歸す。越後の長尾爲景其主上杉を亡ぼして越後を領す。此の如き政權下移の變は國司より守護、守護より小城主に至るまで、到る處に聯發しぬ。

二百九十一節　大內義興京都の權を攬る、貴族食を四方に乞ふて生く

前將軍義植、長門にあり名を義尹と改む。永正五年大內義興、義尹を擁して京に入る。時に三好長輝、細川澄元、京師の權を執り、兵を攝津に出し、逆擊して勝たず。義澄を奉じて近江に走り、是より大內義興京師の權を執ること十一年。財用續かずして永正十五年、兵を引ひて國に歸る。義興、國富むが爲めに其京師にあるや、朝廷公卿、少しく窮乏を免れたりしに、今や義興去るや、朝廷、公卿の財源盡き、公卿多く義興に從ふて長門に逃る。義尹、義興を失して孤立し、細川高國の抄掠に堪へずして淡路に走る。高國即ち義澄の子義晴を播磨より招きて將軍とす。京師の窮乏、前古比なし、後柏原

*陣中左傳を講じ、死する時歳二十五。

天皇、此かる間に崩じて後奈良天皇の世となりたれども、即位の大禮は固より行はれず、衣食の費用すら缺き、公卿道を分つて近畿に遊説し、若しくは金銀、若しくは米穀を得て、用を足すに至りたれども猶は足らず、之より先き朝權衰へたりと雖も政權の衰へしのみ、其所領ありて以て朝廷の百官王公嬪御を養ふに足り、社會的榮譽の源泉たりき、今や然らず、政權と共に社會的榮譽の源たるべき光榮すら之を失ふに至り、堂々たる皇室、其日用の費にすら窮するに至る、古今大變の極と云はざるべからず、また從來は皇室、窮すれども貴族の或る者は猶は其躰面を保つものありしが、今や凡ての貴族もまた窮乏し、關白料と號し、公卿、袋を携へて京中の市民に米穀金錢を乞ふに至りぬ。

二百九十二節　貴族將軍を擁するも功なし

此の如く朝權已に地に落ちてまた恐るゝに足らず、幕府もまた空名となる、取るも得なく、失ふも惜しからず、故に何人が其主たるも、以て天下に號令するに足らざりき。細川高國已に京師にあり、朝倉孝景また天下に號令せんとして、京師に入つて高國と力を合す。然れども一も其威力を增加せず。大永七年、三好長慶、細川晴元と泉州堺によりて京を脅かし、遂に細川高國を擊殺す。將軍義晴即ち晴元を以て管領とす。晴元三好長慶と權を爭ふて戰ひ、三好の黨與數ば京を侵す。天文八年義晴亂を避けて八瀨の里に入る。此の如く京師の變動は、勝つも敗るゝも天下の勢を變ずるに足らず、極めて無意義無結果のものとなりしとき、東海、北陸に恐るべき大勢力を生じぬ。

二百九十三節　南人北人、疲勞して新勢力中央諸州に生ず

桓武天皇の勝利は南人を以て北人に勝ちたる歷史也。平氏の勝利もまた此の如し。源氏の崛起は北人を以て南人を壓したるの歷史也。北條氏の勝利もまた此の如し。高時の敗滅、後醍醐の失敗は、南北兩勢力の參差交錯したる結果也。此の如く南人の勝利にも北人の勝利にも、常に中間にありて刺激せらるゝものは其中間にある東海、北陸、東山の諸國也。此等諸國の武士は、南人北人との交戰往來によりて、其勇武と智慧とを感受したり。此等中央諸國の山林が北帶植物と南帶植物の相交互混和するがため、最も繁植する所なるが如く、南北人種の血液は、此等中央諸州に於て相混和し、文明の要素は、此に其の融化混湯を生じたり。故に高の師直師泰の其兵を用ゆるや、雄武精銳、天下比なきに至る。之に加ふるに北方は鎌倉が政變の中央たりしがため、幾十回の紛亂を經て已に其の積富の大半を費したり、南方は京師が政變の中心たりしがため、一起一仆の間に其實力を消磨したり之に反して中央諸州は何時も政治の中心に遠かりしかが爲め、中ごろ高家の管領となりて、南北に轉戰したるの外、其力を徒費せざりき、故に南北の氣力漸やく勞るゝの時、中央諸州は、其人民の繁富なる、其實力の廣大なる、遙かに他の南北に超過しぬ。此かる形勢の中より簇生せられたるものは、駿河の今川氏元也。甲斐の武田信虎也。三河の松平氏也。尾張の織田信秀也。越前の朝倉孝景也。越後の長尾輝虎也。是より天下の重力中央に集まる。

二百九十四節　駿河の今川氏

今川氏は足利の族黨にして、尊氏、鎌倉を出るとき相伴へる三十條族の中、最も尊榮せられたる者にして、其初吉良氏と一家にして、後分れて三河駿河を領す。故に時人將軍若し子なき時は吉良今川の一家より其人を出すべしと云ふ。今川氏の家聲此の如く高きに係らず、初より京都の政權爭奪に與からず、遠く駿河遠江に退きて國境を保つ。氏親の時に至り足利氏、政綱を失して天下壞亂するや、即ち四方の浮浪を集めて侵略を事とす。子義元、最も雄豪、大志あり。略ぼ文武に通じ、威恩を以て部下を勵まし、常格を破つて卑賤の徒を重用す。清見寺の僧大原と語り、其材を愛し、延きて幕僚となし諮ふに國事を以てし、遂に方面の將たらしむるに至りしが如き是也。故に國勢日に張り、三河を攻めて尾張に入る。

二百九十五節　武田晴信の人物、軍略、政治

武田氏は甲斐源氏の流也。逸見有直と共に甲斐を分領して、足利持氏に屬す。信滿に至りては上杉氏憲に黨して持氏に抗し、邑を失つて流浪し、逸見氏其邑を併す。信滿の子信長、歸つて逸見氏と爭ふて勝たず。已にして信長の兄、信重、歸りて舊封を復して、威勢漸やく大也。逸見氏恐れて臣屬し、甲斐全く武田氏に屬す。信重の後信虎に至り、南駿河の豪族、久島氏を擊つて之を併せ、今川義元と婚を通じ、西信濃に出でゝ平賀小笠原の諸領を侵し、威勢漸やく大也。信虎の長子勝千代、信虎の爲めに愛せられず、勝千代即ち其姉の夫、今川義元に結托して義元の奏請によりて、官職を得、將軍義晴の偏名を受けて名

を晴信と改め三條公頼の女を娶る。信虎之を如何ともする能はず。天文五年、信虎信濃海野口に平賀頼成を攻め、戰ふこと月餘にして拔けず。信虎意沮みて軍を旋す。晴信兵三百を請ふて殿し、頼成の兵四散するを窺ふて、急に襲ふて其城を取り、頼成を殺ろす。信虎其功を忌みて賞せず。益す之を疎じ、其弟信繁を愛して之を立てんとす。晴信即ち其家老飯富虎昌、板垣信形と謀り信虎を廢せんとして、情を今川義元に告ぐ。天文七年、信虎晴信を追はんとして之を義元に托すと號し、自ら送つて義元に至る、義元信虎を絷へて歸さず。晴信即ち自立して國主となる。是より數ば信濃に出でゝ諸族と爭ひ、大半之を取り。遂に駿河の今川、越後の上杉、尾張の織田、三河の德川と相爭ひ、四隣震驚す。晴信、剛果にして沈深、最も權數に富み、韜略に通ず。少小にして云ふ、五千の兵を以て天下を横行せば、何事か成らざらんと。彼は應仁以來の暗黑時代が生じたる典型的武將の最大なるもの也。彼は感情を有せず、一大意思あるのみ。其意志や氷の如く冷かに、鐵の如く堅牢なるものなりき。而して此の强固なる意思は、殊とに軍隊組織の上に現はれしかば應仁以來、賭博を以て、抄掠を以て、拔けがけを以て其生命とせる軍隊は、彼の國に於て初めて訓練あり、組織あり、持重して輕進せず、一たび進むや觸るゝ所皆な破るゝ最良の軍隊となれり。彼れ其軍旗に書して曰、不動如山、侵掠如火、其靜如林、其疾如風と、彼の軍隊は眞に此の如きものありて、全く其大なる意思の權現せるものなりき。

之より先き、武將は一個豪果敢爲の勇將のみ、文字の如きは其知らざる所、知るもまた一錢に當らざりき。今や足利氏の爲めに得たる小康は、文學をして武門に普通ならしむ。文學により て前言經行を鑑みるにあらずんば、以て志を得、人民を安ずる能はざるに至りぬ。古の武將は未だ十分なる封建の下にあらず。半ば戰士にして半ば代官、誅求、抄掠は其業なりき、今や封建漸やく成らんとして、國を有するものは、唯だ一の武將たるに止まらず、また民政を重んずる一の國主たらざる可からざるに至りぬ。故に此時代に於て勝利を得んには、多少の學術なかるべからず。民政を重んぜざるべからず。而して晴信また此點に於て實に代表的武將にして、詩文を知り、宗教を知り、最も志を民政に止め、民富を進めんとし、其採掘し且鑄冶せる甲州金は一代の通寶たり。西南諸道の武士が野武士、强盜の如き生活を營むの時、中央に於ては此の如く森嚴重厚の武將を生じたり。而して其居る所は秦の六國に臨むが如く、攻むる時は低地に臨みて下瞰し、守る時は險要によりて高地に居るがため、四隣、慴伏、恰かも六國が秦を見るが如きものありき。德川家康其隣國にあり、常に其兵法、民政を見て之を嘆美し、百事之を師として經營するに至る。家康が他年、天下に雄飛するに當り、機敏にして持重、一點の浮氣なく意思强健、民政を重じたるもの、其素質と雖も、また實に信玄に負ふ所多かりし也。

信長、一敗して其業挫け、信雄等、偏隅に流浪するのみ。信玄に至ては、信玄死して猶ほ久しく故業を守り、皆な族黨臣下、死して後、倒る。地勢の然らしむる所と雖もまた以て信玄組織の力大なりしを見るべし。

二百九十六節　織田信長

信長に至ては全く信玄と相反す。信長の先、世々越前にあり、足利高經の家臣たり。高經の子斯波氏と稱するに及びて朝倉、甲斐の二氏と共に其家老たりしが信秀に至り斯波氏を追ふて尾張を奪ふ。信長は信秀の子也。名古屋に築きて之に居る。資性磊落、情を縱にし、毫も制する所なし。然かも其勇邁の志、果敢の氣、能く部下を率ゆ。信玄は其意思によりて組織を爲し、組織によりて部下を用ゆ。信長は其個人的英發の氣によりて部下を鼓吹し、英雄を集む。然かも識見能く泥土の中より將軍を作り、膽氣能く敵人をして心を翻して己に仕へしむ。信玄は戰國が最も缺く所の組織を與へたり。信長は戰國が最も缺く所の意氣相使ふの風を與へたり。其立つ所以相異なると雖も應仁以來、士風敗頽して社會を結合する君臣、血族の制、已に滅し、淫色、賭博、利益の外人を動かすものなきの時、社會に新精神を鼓吹せるや即ち一也。然かも當時、一劍千里を橫行せんとするの壯心を懷き、有爲の主を奉じて事を爲さんとする者天下に充滿するの時なりしかば、信長の立つ所は信玄よりも最も時務に急なるものなりき。故に天下の士能く之に投じ、義元と戰ひ、齋藤秀龍を美濃に攻め、また族黨の內亂を鎭めて勢威、海道に奮ふ。

二百九十七節　德川家康

德川氏は其先新田氏より出づと稱す。曾つて二僧あり相模藤澤の遊行寺上人に從遊して參河を過ぎ、松平酒井二村の長に養はれて子となる。松平の村長に養はるゝ者を

德阿彌と云ひ、酒井に養はるゝものを長阿彌と云ひ、各々其村を以て性とす。德阿彌父の名を襲ふて太郎左衞門と改め、近傍の荒蕪を開墾して道路を作り、貧民を救ふて令名あり、遂に壯丁、罪人を募つて近傍を略して武士を業とす。松平氏は即ち德川氏也。此の如きもの一百餘年、族黨繁殖、勢威稍〻大にして遂に三河の岡崎に據り、數ば織田信長と戰ふ。廣忠に至り、織田氏の侵略を受けて勝たず、救を今川義元に乞ふ。義元質を徵す。即ち廣忠の子竹千代を質とす。信秀襲ふて竹千代を奪ふ。義元、兵を發して德川氏を助け、信長の族人を攻め將に之を殺さんとす。信長即ち竹千代を返して其族人と代ゆ。竹千代之より今川氏に質たり。義元將士をして岡崎に入り其政事を監せしめ、自ら竹千代の後見と稱し、他日其長ずるを待つて其城邑を返さんと云ふ。竹千代後、名を改めて家康と云ふ。義元、また家康をして西三河を攻めて信長と相當らしむるもの累年。斯の如くして家康は織田今川の間に狹まれて、未だ大に雄飛する能はざりき。

二百九十八節　朝倉義景、淺井長政　朝倉氏は織田氏と共に斯波の重臣也。甲斐織田の族、斯波氏を追ふや、朝倉敏景起つて甲斐を攻め、二十一戰して之を亡ぼし、越前を領し、其曾孫孝景に至りて幕府の相伴衆となり、孝景の子義景に至りて、一向宗の僧光佐の兵勢漸やく大也。即ち女を以て之に妻はし、兵勢漸やく大に、近江の淺井長政と相聯合す。長政は近江の人、世〻上坂

泰貞の從臣也。後泰貞を追ふて其國を奪ひ、數ば齋藤秀龍、六角定賴と戰ふ、其孫長政また能く戰つて常に朝倉氏と相聲援す。淺井朝倉二氏の雄を當時に稱するもの、實に京師と北方の通路を扼するを以て也。

二百九十九節　上杉景虎、山陰、九州、奥羽の豪族　越後の上杉氏は元と長尾氏にして、世々鎌倉の上杉氏に臣屬す。後長尾爲景越後にありて自立し、其近傍を侵略し、其主上杉顯定を敗つて之を殺す、越中越後を併せ加賀を伺ふ。爲景死するや四子景虎、最も勇武、十七歲にして內亂を戡定し、強臣不逞を夷げ、聲威四隣に震ふ。彼は獨り勇武のみならず、また俠義あり。獨り俠義あるのみならず、また天下に縱橫するの雄志あり。彼は信玄の如き強固なる意志を有せざりき。然れども其英氣俠骨は能く其欠點を補ひ、部下をして爲めに死戰せしむ。彼の軍隊組織、持重の點に於て信玄の軍に如かざりき。然れども其の輕俊快活の行軍は、殆んど信玄の持重をして價なからしめんとす。彼は大將として固より古今有數の大將なりき。然れども彼をして其地位を捨てゝ一個の兵士たらしむるも、また最上の兵士也。其將士、自任の心強よくして、殆んど叛逆的に、疎野にして健武、都會の風を冷笑するの氣あり。景虎の部下、若し都會の巷戰に抄掠することあらば、是れ自ら利せんがためにあらず、都會の風を面憎しと思ふが故也。景虎の軍若し敗北せば、其微弱の故にあらずして、其昂然自ら任ずるの餘りに深きが故也。越後は北人の

中、未だ曾つて都會の風に沈湎せず、固有の元氣を維持するものにして、實に北人の英華也。北人は今や其の匹夫の雄志に於て、其長上に對する反抗心に於て、其弱に對する俠氣に於て、其輕快奇變の擧動に於て、其健武、膽氣に於て十分に自家を代表すべき景虎を戴きしかば、凡べての長所、凡べての勇氣は勃然として起り、勇武剛健、天下殆んど比なく、中原の將士、戰に於ては景虎を稱し、兵法に於ては信玄を稱し、皆な其陣法を傳習するに至る。以上七氏の外、伊勢長氏は已に北條氏を稱し、鎌倉兩上杉の地を蠶食して威を八州に振ひ、伊豆には里見義寛あり、尼子經久は鹽谷高定の後を以て、山陰に陸梁して、七百貫の地より起つて出雲、伯耆、因幡、隱岐、石見、美作、安藝、播磨、備前、備中、備後の十一國を侵略し。大友宗麟は九州に起りて二豊二肥を併せ、佐竹義重は常陸に盤踞し、葦名盛重は會津に據りて四方を侵し、龍造寺隆信は肥前に雄峙し、島津氏は薩摩に負嵎し、東戰西鬪寧日なし、曾つて京師の政權爭奪に與かりし大族は、獨り大內氏中國に跋扈するのみ。其他は細川、山名の徒ありて四國中國に徘徊するのみ。而かも其權勢移つて下臣の手に入る。

三百節　寺院の武力、再發して數諸侯に匹敵す

而して宗教界に於ては叡山南都は其學問に於ては已に禪宗の五山に勢力を奪はれ、信仰に於ては日蓮宗、一向宗の爲めに其勢力を奪はれ、破戒無慚の僧徒の巢となりしが、猶ほ暫らくは兵力を以て天下に呼號したりしに、日蓮、一向二宗の民

信を得るに從つて、此二宗また天下の浮浪と連合して、一大勢力となりしかば、叡山南都は兵力に於ても、また新興の宗教に讓るに至りぬ。二宗の中、一向宗最も兵力あり。其高僧、末世は兵力を以て佛法を廣めざるべからずと爲せしかば、一向宗の到る所、浮浪必らず至り、浮浪の至る所、騷亂必らず起る。之を名づけて一揆と云ふ。越後の驍將、長尾爲景も加賀の一向一揆の爲めに暗殺せられ、加賀、能登、越前、越中、伊勢、山城、攝津の諸國、其黨與蔓延して寺院は即ち城廓、其門主は即ち上將、門主の家司は即ち管領に擬す。其家司下門賴秀、金を出して幕府の御供衆となり、加賀に入り、襲ふて富樫氏を亡ぼし、其地を本願寺に併す。僧兵の勢力此の如くなれば、武士もまた其下風に立て其助を乞ふに至り、畠山義英が父祖の故業を回復せんと欲し、足利の宗族、三好の一族、大和の筒井を語つて、木澤長政を飯森に攻むるや、細川晴元、其妹婿山科本願寺の門主を賴みて之を救ふ。門主攝津の石山(大阪)に下りて、近國の一向一揆に令を下すや、一揆、雲霞の如く集りて、忽ち義政等を破り、勢に乘じて堺に出で、三好長基を攻めて之を殺ろす。三好長基は阿波の御所義維を奉じて、勢威京畿に震ふるもの也。而して一戰して敗死せるを見ては一揆の勢力が如何に大なりしかを知るべき也。一向一揆已に畠山三好を亡ぼすや、勢を恃んで驕傲、却つて細川晴元を攻めんとして、先づ其臣木澤長政を攻めて、遂に晴元を堺に攻む。晴元防ぐ能はず、即ち急に日蓮宗の僧兵に救を求めて、僅

かに之に勝つを得たりき。之より一揆自ら其實力を知り、大和の一向一揆は越智氏と戰ひ、南都の一向一揆は雁金屋願了を大將として興福寺と戰ひ、大和伊賀の一向一揆は力を合して伊勢に侵入して、國司北畠晴具と戰ひ、京都の日蓮宗徒は叡山と戰つて、洛中の半を燒く。彼等は獨り僧兵のみならず、職工、農夫、山伏、僧侶を合せて戰ひ、獨り男子のみならず、女子もまた之れに加はる。彼等は獨り利益の爲めのみならず、己の敵を法敵と號して戰ふが故に、將軍も、管領も、一たび法敵の名を門主より付するや、其運命は最早や知るべきものなりき。一向日蓮の一揆、此の如くなるや、伊勢山田の神宮も、また一揆を發して神領を押領し、祭用に供せず、國司の命を奉ぜず、兵を四方に出して武士の所領を攻む。其首領を村山掃部助と云ふ。宇治、山田、河崎、二見、淺熊の神官悉く之に黨す、已にして北畠氏と戰つて敗るゝや村山、太神宮の拜殿に踞して自殺し、男山の神宮もまた一揆を起す。此の如く宗教橫流の勢、滔々として止る所を知らず。而して寺院神社は獨り善く人心を統一するのみならず、また財富あるの故を以て其勢威、遙かに諸侯に超え、數諸侯を併せて猶ほ一宗派に敵する能はず、諸侯其兇暴に苦しむ。此の如く舊結合を解き、新結合を起さんとするの勢、急潮の如くに流れつゝある は、實に文明より天文に至る天下の形勢也。

三百一節　上杉憲虎、武田晴信と戰ひ北條氏を攻む

天文十四年、義晴將軍職を其子義輝に讓る。十六年武田晴信、大兵を擧げて村上義清を信州上田原に攻む。義晴之を拒ぎて大敗し、其の豪將、清野、高梨、井上、隅田を携へて越後に入り、長尾景虎に賴つて國を復せんと乞ふ。景虎即ち少しく兵を出して、先づ信玄と海野原に戰つて、其兵法を觀る。此より連年兵を交ゆ。此の時に方つて北條氏益〻强大にして、兩上杉力を合して之を拒ぐと雖も敵せず、遂に扇谷の上杉は武州松山の城に蟄居し、山內の上杉は上野平井の城に蟄居し、諸將多く背叛して北條氏に屬す。上杉氏の全く亡びざるものは、僅かに今川義元が北條氏の背を掣するが爲也。此の如く上杉氏國勢日に感るを顧みず、天文十五年晴信が村上義清と戶石に戰つて、其二將を失せるを聞き、兵を出して晴信を攻む。晴信即ち碓氷を越えて、來つて平井を攻め、翌年北條氏康また來つて攻む。憲政守らず、二十年遂に越後に入りて長尾景虎に賴り、其姓上杉と關東管領の職を之に讓る。之より景虎、天下に縱橫せんとして、數ば兵を上野に出して北條氏を攻め、永祿二年、二千の兵を率ゐて路を諸國に借つて京師に入り、將軍義輝に謁し近衞前久を請ふて北國の主とせんとして戴いて歸る。義輝其志を好みし其名の一字を取つて輝虎の名を與ふ。太田道灌の玄孫資正、八州の士心を知り、里見氏を說き、成田氏を說きて、輝虎の地を爲す、八州の士之が爲めに輝虎に向ひ、小田原城を圍むに至る。北條氏侵略の鉾之より鈍る。

三百二節　西洋諸國と交通し、基督教來り、大內義隆亡ぶ

上杉氏が此の如く武田北條の二氏と信濃、上野、

武藏に爭ふに方りて他の方面に於てはまた大變革を生しつゝあり。上杉憲政が越後に走つて景虎に據るの年、陶尾張守晴賢、其主大内義隆を殺ろして長門周防の近傍を奪ふ。之より先き南北朝の頃より倭寇、朝鮮、支那を侵して遂に南方フイリツピン諸島に至る。四國、九州、中國の沿岸は事實に於て已に是等の諸州と消息を通じつゝありし也。而して當時天下海上の權を占有するものは葡萄牙、西班牙にして、宗教と貿易の權によりて天下を横行し、南島多く其有となる。而して其南東に來る宗教は多くはゼシウイット派にしてイグナシウス、ロヨラが英雄の姿を以て、封建時代の軍隊の精神と、教會傳教の精神とを合して、征服圖躰を作るや、其勢威向ふ所敵なきに至りぬ。天文八年、葡萄牙の船、初めて薩摩の種子島に來り、種子島時堯に傳ふるに鐵砲を以てす。時堯大に喜びて其術を習ひ、之を高野、根來の僧に傳へ、また幕府に獻ず。之より天下傳唱して鐵砲を得んことを欲す。已にしてゼシウイットの聖僧ザヴエー、來つて豊後の大友義鎭に謁し、其許可を乞ふて基督教を傳ふるや、商船もまた之に從ふて至り、珍器奇寶、未だ曾て見聞せざるものを傳へしかば、西國の諸侯必しも基督教を好むにあらざるも、貿易の爲め彼等に交り、遂に轉じて基督を信ずるもの多し。中につきて鐵砲は戰國武將の好んで捨つる能はざる所也。之より基督教西國に盛ん也。已にして宗教貿易また長門周防に入る、大内氏は歷代貿易の利を知るもの也。而して義隆最も文字あり、義理に通じ、基督教を尊び、其家老内藤興盛以下之を信ずるもの、最初の一年にして三千人に達す。佛僧恐惶、嬖臣と謀つて基督教を排撃して至らざる所なし。已にして大友氏の部下また基督教を喜ばざるものあり、神官僧侶と圖つて葡萄牙船を攻めんとす、此に於てか海峽を距てゝ、兩岸には排基督教の氣焰大に上る。義隆は性情高潔にして、當時貪亂是れ事とする武將中稀れに見る所にして、最も貴族的の趣味と、貴族的王制の南人思想を有す。故に天下紛々、各々疆土を拓くを事とするの時に方り、後奈良帝の貧しくて即位の大禮を缺くを見るや、金穀を奉つて之を助け、以て其禮を遂げしめ、功を以て太宰大貳となり、菊桐の旗號を受くるに至る。故に公卿もまも同氣相求めて長門に下る。其顯著なるものは三條公頼、二條尹房、日野資宣、廣橋兼秀、冷泉紹惠等也。是より義隆益す貴族の習氣に染み、遂に皇居を作りて天皇を迎へんとして果さず。家臣等其の和歌、儀禮に習ふて、漸やく武士に遠からんとするを見て之に服せず。義隆已に基督教を信ずるによりて佛教徒の心を失し、また貴族的生活によりて士心を失す。家臣陶晴賢久しく異志を蓄ふ。今や人心服せず、宗教的動亂生せんとするを見て、天文二十年、急に兵を擧げて義隆を殺ろし、其一族、戚緣、寄寓の公卿に及び大内氏全く亡ぶ。

北時に方つて毛利氏、安藝にありて稍々著はる。毛利氏は其先大江廣元より出づ。初めに徵にして七十五貫の食邑あるのみ。其隣邑に武田元繁あり、平生相好からず、

共に尼子經久に服屬す。尼子氏元就を重する武田氏に如かず。即ち去つて大內氏に仕ひ、其力を藉つて近傍を侵略して遂に尼子氏と戰ひ、數ば之を破り、聲威漸く大也。陶晴賢の亂を聞くに及び、急に兵を發して之を攻め、其衆を嚴島に殲くして、大內氏の國を領す。之より毛利氏の威、山陰山陽に振ひ、數ば九州の大友氏、出雲の尼子氏と爭ふて、日夜其疆を擴む。永祿九年遂に尼子義久を出雲の富田城に攻めて之を下し、尼子氏全く亡び、元就の領邑十國に跨る。

*或は云ふ元就初め自立の志あり陶を數駿して背叛せしむと

三百四節　京都の無政府　此時に方つて京師の窮乏愈よ甚しく、僅かに山城一國に行れし幕府の威令も、今は京師に止り、京師の中すら行はれさる所あるに至り、一向一揆、日蓮一揆は數山の僧侶と相戰ひ、平和柔順なる京都の士民、今は刀劍を取りて富家を攻め、德政と號して財寶を奪ひ、貸借を消滅せしむ。幕府は其無權力にして窮乏せるや、皇室と異らず、唯だ皇室に異なる所は、猶ほ其奇翫異寶の賴つて食ふべきある顯族にして衣服を有せさるものあり、人あり常盤井家に詣らんとするに、常盤井氏辭するに裏衣裝束を恥づるを以てす、至れば即ち衣冠禮樂きて出づるに遇ふ。後奈良天皇は此の如き光景中に崩じ、子方仁親王立つ、之を正親町天皇とす。時に弘治三年九月にして、毛利元就が陶晴賢を亡ぼしたるより二年の後也。

三百五節　武田北條今川の同盟、織田信長、今川義元を亡ぼす　京師は此の如く無政府の慘狀を生したるに方り、中原の豪傑は縱橫の策を盡くして攻伐を事とし、北條長氏の子、氏綱、其子氏康は織田信長と聯結して、今川義元を攻め、義元は武田晴信と聯結して之に抗し、上杉輝虎は晴信と氏康を攻め、珠連亹延、西支東吾各々其の覇王の業を爲す能はず。兵禍連年、結んで解けず。尾張の臨濟寺、善德寺の僧、此間に誘說して兵を已めしめんがため、義元の子氏眞の爲め、氏康の女を娶らしめ、晴信の子義信の爲めに義元の女を娶らしめ、氏康の子氏政の爲めに晴信の女を娶らしめ、三氏和を媾して信長、輝虎のみ其の同盟に外れたりき。此より三氏の間事なく、晴信氏康は專ら輝虎に當り、義元は專ら德川氏を提けて信長に當る。永祿三年上杉輝虎、小田原を圍むの年五月、義元西上して京師の主たらんとし、駿河、遠江、三河の兵二萬を集めて尾張に入り、鷲津、丸根の二城を攻む。信長時に淸洲の城にあり、其兵力、遙かに義元に如かず。部下多く敵を恐れ、城によりて守らんことを欲す。然れども信長は何の時にありても防禦の地に立つものにあらず。彼の精神には無休の活動あり、彼は窮苦に對して何時も打勝つの氣力あり。彼は何時も暗黑の中より一道の光明を發見し、守勢の中より常に攻勢を發見す。若し萬事爲す能はざる乎、彼は其運命のある所に任せて、突進せんとす。此の如くして敗れて死するもまた可とす。彼は其の汚辱の生存を以て享くるに足らざるものと爲すもの也。此性情は彼が一生の最大困厄に際して最も其光輝を發しぬ。彼れ部下の諫爭を容れず、三千の兵を以て新勝の

*美濃の齋藤秀龍、其女を信長に娶はし、之によりて尾張の情僞を察報せしむ

義元全力を以て鷲津、丸根を拔かんとして其本營兵少きに衆じたる也。

勢に乘じたる二萬の大軍を攻めんとし、一夜其徒を集め、宴を設け徹宵歡飲す。信長即ち自ら『人生僅か五十年夢幻の如くなり』と古曲を歌ふて舞ふ。一坐感慨、皆な慷慨の涙にむせぶ。即ち翌日急に起ち風雨雷電に乘じて、義元を桶挾間に襲ふて之を斬る。是より信長の威名四方に震ひ、四隣の土豪皆附屬し、美濃の半ば其威勢に服す。是より中原諸豪權力の平均、漸やく覆らんとす。京人立入宗繼、信長の威名、人物を聞きて其風采を想望し、天下を救ふもの或は此の人ならんかと信じ、中納言、藤原の惟房に說き、皇室をして信長に賴らしむ。惟房即ち公卿と計つて、宗繼を使として私かに信長に說かしむ。信長之を諾す、時に永祿五年十月也。

三百六節　信長、家康と同盟す、三好、松永、義輝を殺す、信長、上洛す

此の如くして信長の前途、益す開くるに方り、諸道の豪傑は益す攻伐に寧日なし。五年長曾我部元親は四國に起りて土佐を取り、六年武田晴信は上野に入りて其七部を略し、上杉輝虎は越中、上野、下總を略し、七年、北條氏康は里見義弘と鴻の臺に戰つて之を覆へし、大友義鎭は筑後の七城を攻めて之を取る。而して信長もまた此年を以て美濃を攻めて齋藤を亡ぼし、居所を岐阜に移し、其西上の道を開らく。已にして意外の事變は、信長をして西上を急がしむるに至りぬ。初め將軍義輝の立つや、三好長慶京師の權を專らにし、管領細川晴元と隙あり、細川氏綱を立てゝ管領とし、晴元を追ふ。已にして長慶の臣松永久秀權を專らにし、長慶の族人、康長、政康、岩佐成通また黨を樹てゝ相爭ふ

*此時、義照琵琶湖上にあり月光を見て詩を賦す。『落魄江湖暗結愁、孤舟一夜思悠々、天公亦慰吾生否、月白蘆花淺水秋』以て猛烈なりし北人の子孫が閑雅なる公卿となりしかを見るべし

世に之を三好の三黨と云ふ。三黨專橫兇惡至らざるなし。義輝惡みて之を除かんとす、義輝の從弟義榮將軍たらんことを欲し、之を三黨及び久秀に計る。永錄八年、義輝二條の第に徙り、門扉未だ成らざるに乘じ、久秀等襲ふて之を殺ろし、義輝の弟僧周嵩を殺ろし、また弟義照に及ばんとす。義照其侍者細川藤孝と密かに脫して近江に入り、其妹*の夫武田義統に依り、また出でゝ越前に入り朝倉義景に寓す。已にして信長の聲名を聞き、細川藤孝をして出でゝ信長に說かしむ。信長之を迎ふ。義照は義輝の弟也。此に於てか信長遂に意を決して西上せんとす。然れども信長は其聲威の張ると共に、三河を隔て美濃につゞきて、信玄の恐るべき勢力と相接近するに至りぬ。此に於てか三河の德川家康と攻守同盟を約して、信玄が海道より進むに當らしめ、更に金幣を厚ふして信玄の厚意を求め、猶ほ其背叛せんことを恐れ、信玄の女を娶つて信忠の室たらしむ。家康族黨、勇武と雖も國小に勢微なれば、信長に附庸するの外なかりし也。信長已に信玄と和するを聞くや、上杉輝虎もまた北條氏康と和し、氏康の子三郎を養ふて子とし、以て其八州に於ける大望を捨てゝ、直ちに京畿に向はんとし、頻りに加賀、能登、越中を略す。輝虎の勇武已に北方に鳴り、其黑色の綿衣を着け、鎧を着けず、頭を包み、靑竹を提げて馬を走らすや、雄武剛果の北條氏すら見て避易す。況や北陸の諸侯をや。皆風を望んで降る。唯だ信玄其後を躋み、其脇を衝かんとするを見て、中原略定の志を遂ぐる能はず。此の

如く群雄相制するに乘じ、永錄十一年十月、信長遂に意を決して西上す。時に三好松永の黨與、義榮を立て將軍とす。近江の佐々木承禎、三好松永に黨して信長を防ぐ。信長擊つて之を走らし、義照を擁へて京に入り、三好、松永、細川の黨與を近畿諸州に攻めて之を下す。時に義榮已に死す。即ち義照を立てゝ征夷將軍とし、其將羽柴秀吉をして、止つて京師を守護せしめて、岐阜に歸る。秀吉法令嚴峻、不逞の徒を懲治せしかば、應仁以來一百年にして京師の人心初めて安んず。

第三百七節　信長、淺井、淺倉を破り、比叡山、本願寺の僧兵を敗り、基督教を保護す

信長已に西上するや、信玄兵を出して駿河を攻め、今川氏眞を破つて其國を奪ひ、伊豆に迫る。北條氏康今川氏を救ふて信玄と戰ふ。德川家康また頻りに兵を出して遠江を征して、居を濱松に搆へ、大井川を以て信玄と堺を接す。而して信玄が眼前大敵たるを以て、深く信長と結托して以て之に當らんと欲し、凡そ信長の征伐、必らず之を助けさるなく、同盟軍の向ふ所天下敵なし。元龜元年六月信長、朝倉義景を攻むるや、近江の淺井長政、佐々木承禎之に應ず。信長即ち返つて德川家康の援を乞ふて之を討つ。義景また兵を發して淺井を助く。兩軍、近江の姉川に會戰し、義景、長政、遂に敗走す。已にして八月、三好の殘黨、義繼、康長、攝津の野田に起り、齋藤義興福島に起り信長に敵す。本願寺光佐また石山の壘によりて之を助く。信長自ら出でゝ之を討たんとするや、朝倉淺井の二氏また三萬の兵を擧げて、比叡山の麓に據り、其後を窺ふ。信長還つて之を防き、滋賀の宇佐山に陣す。武田晴信、信長の窮窘を聞きて其後を襲はんとし、兵を出して遠江三河を攻めて、數城を取る。尾州長島の一向宗徒、また起つて信長に敵す。信長の諸將之を征して勝たず。比叡山の僧徒また無賴を募りて遙かに晴信に應じ、寺中に婦女を姦し、酒に醉ひ肉に飽き、破戒無慚を極む。信長使を發して順逆を詰けども聽かず、凡そ近畿に於ける凡べての兵力、凡べての宗徒は、皆な信長に敵したりし也。然れども遂に彼を屈する能はず、朝倉淺井先づ走つて諸城皆な信長に下る。信長即ち諸將を比叡山に遣はし、其破戒無慚を責めて火を放つて、一山を燒き其衆徒を殲くす。是より比叡山遂に兵力なし。此に於てか本願寺の光佐も來つて降を乞ふ。武將のみならず宗徒もまた彼に屈したる也。信長早くより基督教に嚮ふ。今やまた一向、比叡の僧侶が、反覆常なく兇惡を逞ふし、私利に殉し、順逆をすら顧みさるを見るや、即ち彼等の宗敵たる基督教に好意を表して、其教師を保護するに至りぬ。基督教は之より先き已に中國、九州に盛なりしが、三好長慶、松永久秀の時、京師の僧基督教の云ふ所を奇なりとして、書を豐後にある宣教師に發して之を招く。已にして京師に入るや三好長慶之を信じしかば、京師堺の間之を信するもの忽ちにして二萬餘人に達す。將軍義輝の如き其死するに先ちて、己に其徒となる。已にして山僧市民を相煽揚して松久永秀に迫つて、宣教師を追はし

む。之かため基督教は一時衰へしと雖も、今や信長の保護を得るや、民心靡然として之に向ひ信長の子信忠も之を信ずるに至りぬ。

第三百八節　信長の政、義照、信長を忌む。晴信の死

信長は獨り武將たるのみならず、また實に改革者の氣象を有し、嚴峻にして公平也。彼の統治は極めて廉價にして、行軍に要する所は、草鞋と握飯のみ。彼の民政は簡明にして公直、足利氏が歷代附課したる濫役、重稅は悉く革除せられ、京師の民皆な再生の思を爲しぬ。皇居は彼の爲めに造營せられぬ。彼れ皇室に財貨を奉らんとするも却て寇盜を皇室に招かんことを恐れて正金を以てせず、金を京畿の富豪に貸し、每月其利を皇室に奉らしめしかば、皇室も二百年來初めて枕を高くして眠るを得たり。强盜は京畿に跡を秘め、山僧は覆されて跡なし。北條氏以來、彼か如き政治を與へしものは未だ曾てあらさる也。故に上下皆な其慶により、其世の長からんことを欲す。獨り之を欲せざるものは義照とす。義照已に幕府の奢移非政に習ひ、寺院の狡獪冷血に慣れ、信長の爲めに立てられて將軍となるや、榮華足らずとなし、奢侈滿たずとなし、信長の崇尊足らずとなし、信長の立てし法を敗り、秀吉の行ふ施設に背き、收斂、濫課して民を苦しめ、私かに信長を除かんて欲す。信長固より義照に盲從すべき義務を有するものにあらざるが爲に、義照の非政十七條を數へて之を責む。義照憤慨す。三好細川の殘黨、志を新政に得さる公卿と相懲憑し、義照をして書を以

*義照走つて信長に賴るの前、僧侶たり

て輝虎と晴信を招かしむ。時に北條氏康死して氏政立つ、晴信の部下喪に乘じて之を擊たんとす。晴信聽かず。其老死の時已に迫れるを知り、生前、中原の主たらんことを欲して信長を攻めんとす。已にして德川氏の質子、逃れて國に歸る。即ち北條氏と和し其質を取り、元龜二年二月遠江、三河に入りて數城を略す。德川氏援を輝虎に乞ふ。三年四月輝虎兵を出して聲援を爲す已にして冬に入るや、晴信輝虎の雪に沮まれて出る能はざるを知り、十二月、兵を進めて三形原に陣して家康の居城濱松に迫る。信長私かに兵を以て之を助け、勉めて堅守して戰ふなからしむ。家康肯せず、戰つて大に敗れ、殆んど獲られんとす。此役、晴信、信長の部將平手汎秀を獲て之を證として、信長と絕ち、宜言して敵國と爲す、天正元年三月三萬人を以て美濃に出づ信長敗走す。即ち轉じて三河に入る。已にして晴信疾あり、諸將に托するに後事を以てし、其子勝賴を戒しめ、武を弄する勿からしめ、且つ云ふ、我死せば天下唯一輝虎あるのみ。彼れ俠武にして信實あり、若し援を乞ふて國を托するあれば、彼れ必らず汝に不利ならざるべしと、遂に死す。北條氏偵して之を知り、輝虎に告ぐ。輝虎正に食す、報を聞き箸を擲て長嘆して曰く、惜むべし、好漢遂に逝く、天下また英雄なしと。二人の信ずること此の如きものありしや、義照思へらく信也。諸將喪を秘して發せず。

第三百九節　義照信長と戰ふて敗る

之より先き、晴信、兵を三河に出すの報あるや、義照思へらく信

長北顧の憂あるに乘ずべしと、即ち塞を近江の石山と堅田に築きて、兵を擧げ、以て信長を除かんと謀り、信長が和を乞ふも聽かず、益す無賴の徒を募る。信長即ち柴田勝家、明智光秀、丹羽長秀をして、擊つて之を破らしめ自ら京師に入る。義照惶恐、和を乞ふ。信長其の再び事を擧げんことを察し、丹羽長秀をして、豫しめ大船數十を作らしめて岐阜に歸る。義照信玄の已に死せるを知らず、猶之を恃み、七月また宇治の槇島に據りて兵を擧ぐ、信長また擊つて之を降し、奏して其官爵を削り廢して庶人となす。是に至つて足利氏全く亡ぶ。其世を保つこと十三代二百四十年、是よりまた將軍なし、信長勢に乘じ越前を攻めて朝倉義景を亡ぼし、還つて淺井長政を攻めてまた之を亡ぼし河内に三好義繼を亡ぼし、天正三年、家康を助けて武田勝賴と三河の長篠に戰つて大に之を敗る。之より地を割きて諸將を賞し、越前の大部を猛將柴田勝家に與へて、北方の藩鎭たらしめ、以て上杉輝虎の前路に備ふ。天正三年十一月入朝して權大納言左近衛大將となり覇業殆んど成る。

三百十節　小黨滅亡、大侯崛起の運、政權下に移る、舊社會の聯鎖悉く絶ゆ

此の時に當つてや天下の氣運、益す小黨滅亡、大侯崛起の時に嚮ひ、武藏、相摸を中心とせる八州は殆んど北條氏の威を仰ぎ、北陸道は上杉氏に屬し、中國は殆んど毛利氏に族し、中央諸州は織田氏に屬し、四國は長曾我部氏に服屬し、九州は大友、龍造寺、島津の諸氏に分領せられ、唯だ奥羽は佐竹、最上、伊達の諸氏に分屬し、近畿及び近江越前のみ本願寺光佐の黨與、三好、細川の殘黨と相煽揚す。其他の小諸侯は漸々減却し、若しくは衰頽して、新結合の勢日に大也。而して此の新結合の連鎖たる全く舊時のものにあらずして、新勢力なりき。古へは同族によりて結び、異族によりて戰ひぬ。今や同族相救ふの連鎖は全く跡を止めず、族人相戰ふものと異族の同盟と相均しきに至りぬ。例せば信長は其舅齋藤秀龍と戰つて之を亡ぼし、妹婿淺井長政は朝倉義景と連合して信長に敵し、信長の同族は權を爭ふて相殺戮し、德川家康は其の族人と相戰つて力を外に伸ばす能はず、細川畠山は同族の戰に亡び、足利氏もまた同族攻伐に亡びしが如き是也。古へは北方南方の氣質の差、政治思想の差異によりて戰ひぬ。今や足利氏の一統の爲め、東西南北の血族混淆せるがため、氣象、思想の差異また混蕩融和しぬ。伊勢の長氏が八州に覇を稱するが如き、大江廣元の子孫、中國に入つて毛利一家を起せしか如き、土肥實平の後、小早川氏となりて、賴朝の從者吉河氏の後、中國に入りて、共に毛利一家に合したるか如き、島津氏が北人の血族に出るが如き是也。古へは貴族と平民とによりて黨を分ち、門閥を以て相爭ひぬ。今や政權漸を追ふて下に下る。皇室の權、藤原氏に移り、藤原の權源平二氏に移り、源氏の權北條氏に移り、北條氏の權、足利氏に移り、足利氏の權、山名氏に移り、山名氏の權、細川氏に移り、細川氏の權、三好に移り、三好氏の權、松永に移り、松永衰へて織田氏興る。更らに他の諸侯の

一家に就きて云へば、足利氏衰へて、斯波氏起り、斯波氏衰へて織田氏興り、足利氏衰へて上杉氏起り、上杉氏衰へて、長尾氏興る。是れ一部の顯象にあらず、全國を通じて皆な然り。此の如く政權漸を追ふて下に移るのみならず、貴族もまた其身を雲上より民間に下すや、勢威漸く大也。京師の貴族が餓死に瀕するとき一條敎房の孫、土佐に入つて九十六族を兼併して細川氏に代りしが如き、西園寺氏、伊豫に入つて漸やく大なるが如き、北畠氏の子孫伊勢の宮司となりて、南朝の爲めに固守せしより、子孫連續信長の時に至るまで伊勢の七人衆と號して、盤根亡びさるが如き是也。此の如く血族も地方氣質人種の差違も、階級も以て社會を結合するに足らず、唯だ利を同ふするによりて相結合したるは、應仁前後の天下の形勢也。

三百十一節　社會の新結合力、忠戰心の發芽

此の如き形勢は長く繼續すべからず。繼續せしむべからず。早晩新道德を起し、新連鎖によりて新結合を起さゞるへからず。新道德は起り、新結合は起りぬ。誰か之を起したる、是れ學者にあらず、聖人にあらず、天皇にあらず、大立法家にあらずして、却つて無學無識なる山林の英雄なりき。彼等の中には名譽ある祖先の歷史を有するものなきにあらず。然れどもそれすら、口碑に存するのみにして、以て人を服するに足らず。彼等は財貨なく、官職なく、强固なる族黨なく、郎黨なく、赤裸々無一物の者として天地の間に生れ來りぬ。然れども彼等の心中には、至大なる寶貨を藏しぬ。彼等の勇猛にして死を恐れざるの心は、幾多の猛夫をして之を抑かしめぬ。彼等の剛果、敢爲の氣象は、幾多の勇士をして甘じて其下に立たしめ、彼等の寬洪、物を惜しまず、士を割き財を分つこと、弊履の如き心は部下をして信任して戰はしめぬ。彼等は妻子よりも勇士を重じ、族人よりも浮浪の徒を愛しぬ。彼等は藏くさず、僞らず、落々たる心事を以て其部下を率ひしかば、部下は父母妻子に別れて其主領と合しぬ。智勇辨力を以て天下に呼號せんとする浮浪は、隨所に存しければ、一分此美質を有するものは、一分多く天下の材を致せしを以て、主從意氣を以て相結ぶの心は、血族、法律、階級、人種に代りて天下を結合するの新聯鎖となりぬ。之より先き、王朝より北條氏を通じて忠義なるものなし。之あるは個人の間のみ。國民的思想として未だ發達せさりき。血族に對する親愛、法律に對する服從、階級に對する尊敬ありしのみ、學者の所謂る忠義なるものに至ては、未だ曾て國民的思想たらず。北畠親房の如き神皇正統記を著はして、國君に對する忠義は利害强弱得喪の外にありて爲さんとしたるも、遂に成功せず。眞乎の忠義心なるものは、元龜天正の英雄によりて作られし意氣投合なる精神が、歷史と積憤とによりて粉飾し、醇化せられしに初まる。

三百十二節　兵農の分別、城下の發達、戰術の變遷

而して此新結合は最も健全にして最も有力なる結合なりき。何となれば此かる社會に於ては、信賞必罰は其最大急務たり、愚者弱者にして上に昇

り、智者强者にして其下に立たん乎。衆心遂に服せざらんとす。衆心服せずんば事業遂げざる也。故に此かる組織の下にありては、民政は周到ならざるべからず、物産は開けざるべからず。然れども此かる時代の賜として、一大弊害の存したるはまた掩ふべからず、即ち兵農全く二に分れたること是也。是より以前に於ても、兵農は分れざるにあらず。然れども、猶ほ其附近の土豪に於て、先づ最下の族黨を組織し、國主は此の土豪を集めて大族黨を作るが故に、武士なるものは地方農家の小中心にして、土豪は即ち大地主、大地主は即ち武士なりき。今や然らず。智勇辨力あるものをして、其個人的力量によりて競進せしむるがため、土豪は社會の單元たらざるに至りぬ。加ふるに連年干戈絶えず、何時、敵軍の進擊し來るか知るべからざるがため、武器の發明進歩したるがため、戰鬪の法進歩して、個人的鬪爭より軍隊的勝負の時となりしがため、また舊時の如く、武士をして地方に散在せしむる能はずして、此に城廓を構へて其中に集團せしむるに至りぬ。固より古來城廓なきにあらず、然れども古の城廓は唯家居の大なるものに過ぎず、大和朝廷時代にありては城とは稻を積みて其中に立て籠るもの也。平安朝の頃より壯大家屋を作るの習ありと雖も以下數百年、南北朝以後に至るまで、城廓とは家屋の大にして高きものに過ぎざりき。今や長鎗の發明あり、小銃の輸入あり、遂に大砲を輸入して、國崩と號するに至る。*此の如き精銃の武器に對しては、古の族黨組織の遺物にして、一騎先づ進みて其系

*天文二十年、石火矢と云ふ大鐵砲二挺南蠻羅馬國の國王（法皇か）より進物として、大友義鎭に贈る。一挺は筒口四寸餘り、一挺は穴口三寸餘りあり國崩と名けたり。（增補大友興廢記）

*此頃より石垣により、天主臺によりて、十分の防禦あるを城と云ひ、家屋防禦を陣屋と云ふ。

譜を述べ、勇力を述べ、戰を挑むの風は廢せられて、自然に組織訓練ある兵を生せさるべからず。之と共に其城廓は唯だ柵を立てゝ、敵を防ぐのみならず、石垣により、高樓によりて防禦を爲し、且つ其周圍を大にして、武を業とするもの皆な此中に居住し、一旦緩急あらば全力を一時に集合する城郭たらざるべからず。*此の如くして武士は田畝を離れて一所に集り、所謂る城下なる町を生じ、家中なる一族を生ぜざるべからず。武門武士なるものゝ純乎たる別階級となりしものは、實にまた此の新結合の結果にして、元龜天正の間に成りしもの也。而して此の軍國を最も能く代表したるものは織田氏也。

三百十三節　信長の城廓陣法、世風を一變す、部下の人物、毛利征伐

織田氏は其居る所の地勢重要、四方の會にして、天下の智を集るがため、其新氣風を代表するに於ては、最も他に優り、其の安土に築ける城は、中央に高樓あり、高さ十丈、以て四方を望見すべく、之を周らすに石壘を以てす。其高さ七丈。壕を深くし、疊むに石を以てし、堤を高くし、殊とに其の京師の權を取り、鐵工に巧に、銃砲の製作に妙ある堺に命令するの便あるを以て、銃砲を利用するの一事に於ては他に優り、天正三年武田勝頼を攻むるや、三千の銃士を一隊とするに至りき。之より諸國皆な之に摸して其軍制を改め一時天下を風靡す。而して其の謀臣猛將の雲合霧集するや、また一代に卓絶す。柴田勝家は猛勇を以て名あり。丹羽長秀は沈勇を以て名あり。羽柴秀吉は才畧を以て

名あり、瀧川一益は膽氣を以て名ありて其銃術天下比なし。淺野長政は公直にして勇武、以て將たるべく、以て相たるべし、明智光秀の軍學に明にして機才ある、其他池田信輝、前田利家佐々成政、塙九郎左衛門、森可成、築田左衛門、河尻與兵衛の如き皆な當世得がたきの材武也。德川家康の如きは、信長に臣事せざるも、また其屬庸にして其持重の質、周到の見、質實の風、直哉の氣、鐵石の意志、一代稀有の材也。信長已に柴田勝家をして、上杉輝虎に備へしめ、德川家康をして北面を守らしめ、東北憂ふるに足るものなし。時に足利氏、足利義照を容れて之を保護し、再び京に入らしめんとし、また石山の本願寺光佐を助けて、京攝の間を亂さしむ。播磨の人黑田官兵衛孝高、頻りに信長を慫慂して之を征せしむ。此に於てか遂に羽柴秀吉をして之を征せしむ。時に天正五年、信長、紀州根來、雜賀の僧兵賊徒を平げ、松永久秀を攻めて之を大和の信貴に殺すの年也。

光佐後に近衛氏の周旋によりて織田氏に降る。

第二十三章　秀吉の一統　神武紀元二千二百三十八年より二千二百六十年に至る

第三百十四節　秀吉の人物及び地位　第三百十五節　武田氏亡ぶ
第三百十六節　明智光秀信長を殺す　第三百十七節　秀吉高松城を取り毛利氏と和す　第三百十八節　秀吉光秀を亡ぼす　第三百十九節　秀吉天下の權を取る　第三百二十節　德川家康織田氏に黨して秀吉と戰ふ　第三百二十一節　根來僧兵の降服、秀吉關白となる、新民嶼輿の勢極まる　第三百二十二節　佐々、上杉、島津、德川の服屬、諸侯の誓文金配り　第三百二十三節　東北諸豪の來附北條氏政の降服、伊達正宗の屈伏　第三百二十四節　民戶の武器を沒官す　當時の經濟事情　第三百二十五節　學問の欠乏、東常縁、紹巴、藤原の惺窩　第三百二十六節　社會の行樂　第三百二十七節　宗教の權力盛にして信仰衰ふ、秀吉基督教を抑へんとす　第三百二十八節　當時國民の氣風習俗、法律及び道德　第三百二十九節　倭寇の猖獗、呂宋の入貢、秀吉明を攻んとす　第三百三十節　秀吉子を失す

外征の議決す、第三百三十一節、秀吉親軍の軍容、征明軍の部署
第三百三十二節　明の國狀、朝鮮の微弱、行長平壤を取る　第三百
三十三節　秀吉援兵を發す、行長明軍を破る、諸將の不和、秀吉兵
力の不足に泣く　第三百三十四節　北京の狼狽、沈惟敬、行長と和
を議す　第三百三十五節　朝鮮土寇起る、愛親覺羅の族朝鮮を助け
んとす、李如松、平壤を取る、明軍の大敗　第三百三十六節　和議
再び起る、秀吉の意氣衰ふ　第三百三十七節　日明兩國兵を退く、
朝鮮抄掠の爲めに衰ふ、第三百三十八節　秀賴生る、秀次殺さる、
淀君出づ　第三百三十九節　沈惟敬の詐僞發はる　第三百四十節
兩度の外征、諸將功なし、秀吉病を得て死す、諸侯の紛爭、第三百
四十一節　外征軍歸る

天文五年正月生る

三百十四節　秀吉の人物及び地位　秀吉は尾張の賤民の子にして姓氏を審にせず*、少小僧となり、奴僕となり、慧譎にして多く容れられず。市井無賴の群に入り、尾張美濃の間に轉徙す、信長の識鑑能く舊格を破つて人を用ふるを聞き、永錄元年、信長を道傍に干して之を仕ひ、堅忍、忠實、信長に知られんことを求む。信長之を會計に試み、土木に試み、戰鬪に試み、其材を知つて遂に大に之を用ひ、宿將老臣の上に位せしむ。彼は應仁以來の風雲が麟生せる最大人物の一にして其氣象開爽にして快活、智力博大にして明確、殆んど古今の英雄が達したる最高峰に達し、如何なる窮境に處しても、其思想畫策を失はず。如何なる困厄に處しても其の快然たる心情を失せず。殆んど北氷洋上に踏舞する佛人の風ありき。彼は家康の如き持重の質、鐵石の意思を有せず。然かも其明確なる智力、湧くが如き才思は能く、其缺點を補ふに足れり。彼は信長の如き感情と膽氣とを有せしや否や疑ふべし。然れども其強固なる智力は、能く彼をして膽氣と同一の勇氣を有せしめ、彼をして望外、望を生じて、殆んど大感情によりて生ずる小說的幻想の如き力を有せしめぬ。信長は大局に過たずと雖も、往々小事を忽にして、爲めに大計を過ちぬ。彼は大業を志すと雖も、小事に忠實なるを忘れざりき。信長は疎落なりと雖も、時に猜疑に落ちぬ。彼は信長の如く落々たりしと雖も、明白なる腦髓は、疑ふべき餘地を止めざりき。信長は應仁以來大亂が生じたる一半の氣質を代表して、多殺の缺點あり。秀吉は大亂將に收局して、統一治平ならんとする氣質を代表して殺を貪らず。若しそれ僞善に至ては彼の知らざる所也。失望は彼の夢にだも知らざる所也。然かも彼の智力は放縱驕傲なる天才のみにあらず。快活にして疎磊。嚴肅にして厲酷に近き信長を崇拜して、信長に訓練せられたるがため、極めて屈伸あり、極めて敎育せられたる智力なりき。彼の天才は之を父に負へり、彼の智力を

以て凡べての場合により教訓を受け、凡べての場合に己を適應せしむべく、己を作る可變的智力たらしめしは信長の賜也。彼の偉大は一半は天才也。一半、信長の賜也。信長は殆んどフレデリック大王也。落々たりと雖も、偏狂に近く、嚴峻或は粗厲に近し、秀吉に至つては朗々、洒々、抵滯する所なし。彼の匹儔はそれ曹孟德乎。此の如き人物は戰國武士が慕望せざる能はざる所なりき。彼等は信長に於て主君らしき首領を得たるを悦べり。今や彼等は秀吉に於て、首領らしき主君を得んとす。故に其の所領天正二年に於ては近江の十八萬石に過ぎずと雖も、無名の英雄其幕下に集まるもの無數、福島市松正則は工匠より起り、黒田孝高は貧寒なる播州の土人より起り、加藤虎之助清正は秀吉鄉里の頑童より起り、小西行長は大坂の藥商より起り、長束政家は商家より起り、石田三成は觀音寺の茶童より起り、竹中半兵衛は亡命より起り、皆な秀吉に一身を委ぬ。信長の將士は多く宿將にして世祿あり、若しくは土豪なるもの少なからず秀吉の部下に至つては、皆な微賤にして名なく、其祖先すら分明ならざるもの也。而して其材武に至ては、却つて信長の將士に勝り、秀吉をして赫々の功勳、他の宿將を超えしむ。而かも秀吉多く信長の旗下に屬して戰ふがため、自ら擅にする能はざるの故を以て將士久しく鬱屈せしが、天正五年、中國の管領となりて山陰、山陽、九州を隨意に切取すべしとの許諾を得るや將士踴躍、已に自立したるもの〻如し。秀吉の雄才是より初めて伸び、城を姫路に作り、進んで因幡、伯耆、備中、淡路を取り、擊つて浮田を破り勢威中國に震ふ。

三百十五節　武田氏亡ぶ

天下、信長の恐る〻所は信玄輝虎の二人のみ、而も信玄已に死し、輝虎もまた中原に出る能はずして、天正六年三月を以て死し、其二子景勝景虎、權を爭ひ、景虎、信州善光寺に據り、景勝高田の春日山に據りて相戰ふ。武田勝頼、景勝を助けて景虎を襲ふて殺ろす。此の如くして上杉武田已に内亂によりて勞る〻や、信長遂に意を決して之を攻めんとす。適ま木曾義昌、信長に内附せんことを乞ふに遭ふ。即ち天正十年二月檄を北條氏政に傳へ德川家康と共に兵を發して武田勝頼を攻む。勝頼時に信濃の諏訪に在り、信長の子信忠五萬人を以て岐阜より木曾口に入り、信長七萬人を以て伊奈口に入り、金森五郎八三千人を以て飛驒より入り、家康三萬人を以て駿河より進み、氏政兵を國境に出して遙かに信忠に聲援す。甲信の諸將多く已に勝頼を厭ひ、風を望んで解走す。勝頼即ち諸將の質三百人を焚殺して天目山に入る。信忠近躡、瀧川一益をして土寇を煽動して之を殺さしむ。此の如くして武田氏は亡びぬ。

三百十六節　明智光秀、信長を殺す

信長大に功を論じ賞を行ひ、瀧川一益に上野及び信州の二郡を與て關東管領とし、家康に駿河を與へ四國を三男信孝に與ふ。以下各差あり。此に至て信長の領邑二十餘國に跨り、北條氏以下皆な財貨を献して款を通じ、天下一統の業殆んど成らんとす。

時に秀吉備中高松の城を圍む、城將清水長左衛門尉、善く防ぎ、毛利輝元また中國の安危此一擧にありとなし、銃士を送つて之を助く。秀吉即ち山谷の水を濳へて之を苦しめんとして城邊三里の堤防を築く、城將さに落ちんとして輝元、其族人小早川隆景、吉川元春等をして精銃を盡くして之を救はしむ。兩陣の間十餘町、相持して未だ戰はず。六月、秀吉急使を發して援兵を信長に求め、援兵をして城を圍ましめ、自ら毛利氏を攻めて長驅席卷せんと欲す。信長即ち池田信輝、高山右近、中川瀨兵衛、明智光秀をして秀吉を救はしむ。光秀は十兵衛と稱す、美濃の人にして世、齋藤秀龍に仕ふ。光秀に至り四方に流寓して細川藤孝に仕へ、其老臣米田氏と隙あり、去つて信長に仕へ、數は戰功あり、丹波を領して龜山の城主たり。其軍學、材武、智惠、一代の名流たり。然かも性、狷介にして偏狹、沈鷙にして物に感じ易し、且つ自ら負ふこと實に過ぎ、矯飾にして快活の氣を欠く。彼は武人よりも寧ろ衣冠禮樂の朝廷に立ちて、法家たるべき者にして、疎曠なる信長の幕中にあらんには餘りに眞面目なりき。彼れ信長に從つて數は戰功ありし中にも、丹波の八上城を攻むるや、光秀、城主秦秀治を招降せんとして其母を送りて質たらしめ、秀治兄弟を招きて之を執ふ。光秀思らく母を質して敵を下す、一大功勳なりと。信長即ち命して秀治を焚殺せしむるや、城中また之に酬ひて光秀の母を焚殺す。光秀の沈鷙なる信長を含まざるを得さる也。信長宴を開くや將士歡飲亂雜喧囂を極む。獨り光秀飲む

能はず。一日光秀酒に堪へずして走るや、信長之を執へて其背に跨り、刀を拔きて曰く、酒を飲まずんば能く之を飲むかと、遂に其頭を擊つて鼓に擬す。是れ神經過敏なる者の堪ふる能はざる所也。此の如くして感情の差異は恩讐を生じ、光秀の信長に平ならざるや一日にあらず。今や信長德川家康を安土に饗し、光秀をして饗應を司らしむ。光秀禮法に通ずるに於て多少の負誇なきにあらず。盛に供張を整ふること十餘日。饗應未だ開けざるに、また直ちに先鋒として秀吉を助くべしとの命を受く、是れ矯飾自負者の堪ふる能はざる所也。思へらく信長遂に己を除かずんば已まざるべしと。我彼を殺さずんば、彼我を殺さん、今や佐久間は北越にありて出る能はず、秀吉は毛利と戰つて退く能はず、丹波長秀は四國にあり、瀧川一益は北條氏と相拒ぐ皆な急に歸る能はざるべし、信長今ま京師にありて兵備なし、今にして之を殺さずんば時なかるべしと、遂に其部下明智光春、齋藤利三、溝尾義朝、藤田行政、明智光忠等を集めて志を告げ、渡つ曰く、若し以て非となさば請ふ我首を刎ねよと、衆皆な誓つて共に死すべしと云ふ。即ち國中の兵三萬人を擧げ揚言して曰く、中國に下るに先つて軍容を信長に示さんと、已にして桂川を渡るや鞭を擧げて京師を指して曰く、我敵は本能寺にありと。兵を麾きて之に迫る。本能寺は信長の居館也。時に京師兵燹の後を承け、市街荒涼、本能寺より桔梗の旗、遠く曉風に翻るを見る。信長初めて光秀の叛を知り、切齒して出て之を防ぐ、左右一百餘人皆な甲を着

くるの暇なく、短刀接戰するも衆寡敵せず、信長即ち火を放つて自殺す。* 光秀同時に信忠を二條城に攻めて之を殺ろす。之より兵を分つて信長の族人を求めて之を殺ろし、遂に家康に及はんとす。家康走つて和泉に藏くれ、吉野の間道を經て遠江に歸る。光秀衆心を得んとして京師の戸稅を除き、安土にある財貨を取つて之を將士に頒つ、天皇使を下して數ば之を勞ふ。

三百十七節　秀吉高松城を取り毛利氏と和す

此時高松の城主力已に盡くるを以て自殺して將士を救はんことを乞ふ。** 秀吉之を許るして其城を收め、毛利輝元と對陣す。毛利氏遂に秀吉の敵にあらさるを知り、備中、備後、伯耆を割きて和せんことを約す。約正に成つて信長兇變の報至る。秀吉毛利氏に告くるに事實を以てし、猶ほ三國割讓の約を守らんとするかを問ふ。是れ固より秀吉の胸中、利害の計算已に明かにしたる後に出でしものなりと雖も、敵人は見て以て膽氣となし、小早川隆景主として秀吉の人物、到底天下の主たらんずば已まざるを論じ、寧ろ約を守つて恩を賣るに如かずと爲し、遂に秀吉若し光秀を打たんとせば、貸すに兵を以てせんと云ふ。秀吉大に悅び五百挺の鐵砲、百挺の弓を借り、急に京師に出でんとして尼ヶ崎に至り、使を發して信長の諸將を會す。時に高山右近は高槻の城にあり、中川瀨兵衛は茨木の城を守り、池田信輝父子は有岡、尼ヶ崎、花熊の城を守り、丹波長秀は近江の佐和山にあり、織田信孝は神戸にあり、其威望生平、秀吉の上にあり。然かも非常の事變は人物の階級を打破し、彼等皆な秀

*信長の死する時四十九歳

**高松の城主筏によりて使を發し、書を秀吉に與ふ曰く「謹而奉述愚意、當地永々御滯陣楚辛勞力乍恐奉察候、然者當城極運之義彌近奉覺候清水兄弟難波傳兵衛尉近松左衛門尉代衆命可致切腹之條被御隣懇籠城之輩被施於寛仁君德悉於御助成者忝可奉存候、依回章明日四日中可及切腹候然者小舩壹艘并美酒佳肴聊預恩賜候者且忘籠城之辛苦且可散老兵之疲勞候恐々謹言」清水兄弟は城主にして難波近松は毛利より援兵さして送りしもの也。秀吉之を見て感佩して、部將をして返書せしめ、其の子弟を自殺せざらしむ。曰く「御狀の趣筑前守令相

吉の催促によつて尼ヶ崎に會し、其命を聽き前後を部署して山崎に至る。

三百十八節　秀吉、光秀を亡ぼす

光秀、秀吉が此の如く急奔殺到するを慮らず、安土、淀の間に徘徊せしが、秀吉來攻の報を聞き、急に其二男を質として、大和の筒井順慶を招く、順慶依々應ずるが如く、應せざるが如くす。光秀即ち兵を發して秀吉を山崎に逆へ擊たんとす。秀吉の總軍三萬六千五百人、光秀の總軍一萬六千人、光秀先づ天王山を取つて、高きによつて山崎を打たんとす。秀吉もまた天王山を爭ふ。已にして秀吉の兵先づ天王山を奪ひ、勢に乘じて進擊す、光秀大敗して勝龍寺に入り、また伏見に走らんとして小栗栖の土寇に襲殺せらる。秀吉、光秀の父を殺ろし、父子の首を梟す。此に於てか諸將相議して信長光秀の故地を分ち、信忠の子三法師を立てゝ主とし、近江の三十萬石を捧げ、織田信雄をして事を攝せしむ。

三百十九節　秀吉、反對黨を亡ぼして天下を取る

信長の生前勝家の聲望遙かに秀吉の上にあり、今や秀吉大難を定めて、威望頓に高く、正親町帝之に右近衞中將を與へんとし、京師にありて天下の政治に當るを見て、勝家怏々として樂まず、數ば秀吉を凌辱す。丹羽長秀、秀吉に勸めて曰く天下を定めんと欲せば先づ勝家を斬るべしと、秀吉笑て曰く我豈に敵せん耶と。却て質を納れて之と和親す。勝家釋けず、瀧川一益、佐々成政を聯ねて擧げ秀吉を攻めんとす。織田信孝、また信雄が隱然、織田の族長たらんとするの勢あるを見て喜ばず、また勝家と聯結す。秀吉之

達之處各四人代衆命籠城之諸人可有御助成之結構一入被相感即可被應御望之旨候、然者小舩一艘、酒肴十荷並上林檎極上三袋令進上候明日檢使出候樣にさ御使者被申候得其意存候四人の外假雖長男連枝切腹有之間數旨被申候」城主等遂に舩中に自殺す。戰國武士の氣象此の如きものなりき。

***六月六日高松を退き、七日洪水によりて滯留し、八日姫路に入り、一日休息して、八日に出發し、十一日午前尼ヶ崎に入る。秀吉の軍は一番高山の兵二千、二番中川の兵二千五百、三番池田の兵五千、四番丹羽の兵三千、五番織田の兵四千、六番秀吉の兵二萬。

を聞き急に岐阜城を攻めて信孝を下だす。時、初冬にして雪深く勝家の國越前にあり兵を出すの道を塞ぎ、已にして天正十一年正月七萬五千の兵を起して伊勢に入り。瀧川一益を攻む。勝家之を聞き兵を擧げて近江に出づ。秀吉一軍を分つて一益に當たらしめ、自ら長濱に出でゝ勝家と相對す。已にして信孝岐阜にありて再び兵を擧げ、勝家に應ず。秀吉憤激、信孝の母の來つて質たるを執へて磔殺し、疾く進んで大垣に至り、擊つて信孝を破る。勝家の將佐久間盛政秀吉のあらざるに乘じ、近江の軍を攻めて、中川瀨兵衛を破つて之を殺ろす。秀吉また急に美濃に歸り、盛政を賤ヶ岳に攻めて之を破り、首を斬ること五千。長驅席卷、勝家を追ふて越前に入り、北の莊を圍む。勝家火を放つて自殺す。秀吉が大垣を發したるは二十日の正午にして、北の莊を陷れしは二十三日也。其軍を遣るの速なる此の如きものありし也。之より勝に乘じて加賀能登を平げ、還つて信孝を亡ぼし、一益を下だし、天下の大勢、遂に秀吉に歸す。德川、毛利、上杉の諸侯皆な使を發して戰勝を賀せしむ。之より先き秀吉、勝家、丹羽長秀、池田信輝各々一人の所司代を京都に措き、合議によりて事を決せしが、勝家亡びて丹羽池田もまた其の所司代を已めしかば天下の政治、一に秀吉の手に決す。秀吉遂に覇府を開かんとして地を相し、本願寺の僧光佐が籠れる石山の地勢、西南は中國、九州、四國の咽喉を扼して東北中原諸

國を控制するに足り、沃野に連り、大江大海に通じて、輸送に便なるを見て、遂に近畿十餘州に附課して此に築く、大坂城是也。

三百二十節　家康、織田氏に黨して秀吉と戰ふ

是より秀吉殆んど天下の主たり。其領邑の大、威力の强、聲望の隆、信長の上に出で、天下また信雄を語らず。信雄憤慨、秀吉を除かんことを計る。秀吉即ち其老臣を誘ふ。天正十二年三月信雄遂に老臣を殺ろし、使を發して池田信輝、德川家康を誘ふ。家康は信雄に寵し、信輝は秀吉に誘るゝを以て聽かず、却つて秀吉の先鋒となつて尾州に入り犬山城を取る。時に信雄、家康淸洲にあり、相携へて小牧山に陣し、柵を立て壘を築き、犬山と相對す。信雄、家康の聯合軍二萬にして、秀吉の兵十二萬五千、兩陣相持して戰はず。已にして信輝、秀吉に建策して潛かに參河に入擊つて之を長久手に破りて信輝等を殺ろし、また軍を旋して小牧山に入り、また兵を出して尾張蟹江の城を攻めて瀧川一益以下、秀吉の黨與を降す。此時に方てや秀吉の威名全國を掩ひ、其勇武才畧、鬼神の如く語られぬ。家康渺たる一軍と戰ひ、其神機妙算、秀吉をして送迎に暇なからしむと云ふや、家康の名望一朝にして高し、長曾我部元親之を聞き、遙かに家康に應じ、四國より大坂に出んとし。根來の僧兵また家康に應じて秀吉の後を絕んとす。蓋し德川の一族、常に强國の間に挾りて戰鬪なきの年あらず、殊とに

家康長久手より歸り小幡に陣すと聞き、秀吉憤慨、大軍を發し本多平八郎小牧山守將を擊て走らしむ。即ち一人也。の篭るに二三百人の大軍に並び立て、秀吉をして進むに五六町、其間に其勝氣に乘じ三河武士の風此の如きものありき。

讀人石川丈山は天和元年大坂の役に與かれる勇者也。林羅山に與ふるの書に於て、信長と秀吉の戰術を論じて日く、凡秀吉之所長者克乘臨機應變之勢間不容髪不伹敵獲窺情氣幷呑四洲指揮三軍實敵國掌握之中運等决勝者匪諸將之所能及信長之所長、不拘土地之嶮雖不辨兵卒之多寡出於不意擊於無備十戰十勝能獲其全者也。::是皆奇戰非正戰至其行軍用兵則如風之發如電之過::是以屬信長之麾下者雖老將軍未當間出師有號令云由是觀之秀吉頗用正戰信長常用奇戰有形于秀吉之軍無形于信長之軍。是れ實際の言也。

*根來最も武器を擇ぶ。鳥銃の最も早く用られしは、薩摩、根來、堺也。また其物

其西隣は武田晴信の精銳なる軍隊を引受けて、一日も武備を怠らざりしかば、三河武士は嚴毅猛烈、殆んど上杉の勇猛、武田の訓練を兼ねたるものとなれり。唯だ戰鬪は常に信長の下に戰ひしを以て赫々の名なかりし也。今や其材武は天下の諸侯をして秀吉以外また一大英雄の存するを知らしめ、其遺孤を助けて戰ふの一事は、其高義賴むべきを信ぜしめぬ。而して天下最も此を知れるものは、小弱諸侯にあらずして、其敵手たる秀吉なりき。秀吉能く戰ふと雖も、彼の最大伎倆は兵戰にあらずして、英雄の心を攬るにあり。彼の戰は信長の如く奇變に富まず、家康の如く嚴毅ならず。唯だ天下の力を集めて正面より掩擊するにあり。若し將軍としての個人的伎倆を論ずれば、決して信長に如かず。信長、また家康に如かず。故に力征を以て相爭はんとせば秀吉、家康の屈すべからざるを知りて思らく、長く家康と戰ふは決して利にあらず。速かに和して之を羅致せざるべからずと、十月使を信雄に發して和を乞ふ。信雄之を諾す、即ち犬山城を、信雄に與ふ。家康引て國に歸り長曾我部元親の畫策もまた廢絕す。

三百二十一節　根來僧兵の降服、秀吉關白となる、新民崛興の勢極る

然れども秀吉は目的なしには徒らに和せざる也。彼は信雄よりも急に除かざるべからざるものを有したり。紀州根來の僧兵也。* 九州の島津也。北方の北條氏也。根來は其祖覺鑁天子の上に位するもの僧侶の外なきを信じて寺院に入り、空海を駕せんとして眞言新義を唱へしより其僧多く覇氣あり。足利氏の末に及びては

產も多し、根來の漆器の如きは天下に冠たり。精

*秀吉關白となりて豐臣姓を用ゆるや、部下悉く豐臣を用ゆ、一門一家は勿論、浮田秀家、前田利家、家康の子秀康、信長の弟信秀、京極高資、金山忠政、筒井順慶の子定次、大友義統、稻葉貞通、蜂屋賴高、細川

已に嚴然たる一個の諸侯となり、兵を近傍に出して民財私產を奪ふ。雜賀の黨また之と結托して數ば信長に抗す。時に服屬することなきにあらずと雖も其巢窟未だ曾て轉覆せられざるを以て、海によつて南海と相通じ、益す猖獗に、家康と相應じて秀吉に抗し、高野の僧、また兵を擁して攻伐を事とし、無賴亡命の徒を集めて民田を奪ふ。此に於てか天正十三年秀吉先づ十萬の兵を發して根來を攻めて之を破り、進んで雜賀を攻め、其將五十人を執へて磔殺す。高野の僧侶之を聞きて震恐し、關を廢して民害を除き、民田を還へす。區々の僧兵を擊つに十萬の師を要す、以て其の勢威の大なりしを見るべき也。之より四國を攻めて長曾我部氏を下し、遂に征夷大將軍たらんと欲す。秀吉の大望なるも其無學は其望を此に止まらしめし也、今出川晴季、近藤前久、秀吉に勸めて關白たらしむ。秀吉曰く關白とは何ぞと。二人其人臣の極なるを云ふや、秀吉大に悅で關白を望む。九條植通極力之を排し、藤氏以外の子、關白たるべからざるを云ふ。朝廷聽かず、豐臣の新姓を與へて關白たらしむ。* 凡そ源平以後、大臣將軍となりて時の執權たるもの、假令ひ平民の奉戴する所となるも、其血管中には皆な多少、貴族の血液を有せざるなく、好し有せざるも有すと稱せざるはなし。獨り秀吉に至つては純乎たる平民也。一滴貴族の血を有せず。其下に立つて大諸侯たるものも、また多くは虛飾なき純乎たる平民也。而して人怪まず、自ら耻ぢず、我より古を爲すの心あり。此に至て政權

の下移、其勢を極め源平以後の幾爭亂を釀成せる新民嗣興の勢は、其極所に達し、上下混淆、南北合一、舊日本の歷史を組成したる凡ての要素悉く崩壞し、新歷史の端此に開らく。

三百二十二節　佐々、上杉、島津、德川の服屬（諸侯の誓文、金配り）

然れども虛名は彼を滿足せしむるに足らず、官爵は彼の無休の精神を沮む能はず。彼の大望は即大業也。一統の大業成るまでは心を滿足せざる也。併かも彼は無謀の戰を好むものにあらず。必しも攻めず、必しも窮迫せずして服屬せしむるに足るものは、談笑の間に服從せしめんとす。天正十四年八月十萬の師を起して北陸に入るや、佐々成政之を防ぐ。秀吉使を上杉景勝に發して曰く、佐々成政、命を奉せざるを以て之を攻む。請ふ救ふ勿れと。景勝故らに兵を起して越中に入り、宮崎の城を取り、火を放つて歸り秀吉に言はしめて曰く、越中は我先君の領する所、佐々氏の掠むる所也。我が之を回復せんと欲するや久し、敢て爲さゝるものは、聊か以て公の言を容るゝ所以也。我が兵を用ゆる此の如し、請ふ爲す能はすと爲す勿れと。秀吉其膽氣剛愎を重んじ、佐々を下すの後、二騎三十八卒を從へ、私かに秀吉の使者と稱し越後に入り、左右を却けて景勝に會し、之を諭して入朝せしむ。時に景勝の傍にあるもの直江兼續のみ、秀吉の傍にあるもの石田三成のみ。是れ北方武士の嘆美服從せざる能はざる擧動也。景勝遂に秀吉に服屬す。此に於てか秀吉更らに家康の歡心を求めて得す。適家康妻を失す、秀吉即ち異父妹の佐治日向に嫁せるを奪ひ、改めて家康に嫁せしむ。*家康猶ほ入朝せざるや、秀吉更らに生母を送つて質となす。弟秀長怒て曰く、家康の亡狀何ぞ此の如くなるや寧ろ一戰して雌雄を決せんと。秀吉笑つて聽かず、家康已むを得すして入朝す。三河の家臣、秀吉の生母を一室に居らしめ、屋外薪を積み、家康の身若し變あらば直ちに火を點せんとして待つ、家康至れば秀吉之を待つこと極めて禮あり、酒饌饗應、豐美を極む。家康意稍安ず、秀吉即ち中心を開きて家康に語つて曰く、我微賤より起つて高位に上り、人心或は服せさらんことを恐る。足下若し恭敬、余に下つて諸侯に示めすに典範を以てせは、天下の事成らん、我足下に求むること、是より多からずと。家康また到底秀吉の敵にあらすして人心靡然として之に服し、和平の氣日夜に興るを見て、意を屈して之れに從ふ。十一月秀吉諸侯を其聚樂第に會す、家康、首坐にあり、秀吉に仕ふること恭敬を盡くす。是より諸侯皆な相告けて曰く、家康にして此の如しと。天下滔々、相率ひて秀吉に服す。獨り服せさるもの南方に薩摩の島津義久あり、北方に相摸の北條氏政あり。秀吉書を送つて義久に諭し、仙石權兵衛をして身を商賈に粉して、其地理を探らしむ。天下變遷の風は猶ほ未だ薩摩の奧に入らず、彼等は猶ほ賴朝を鬼神の如く信じ、朝廷の公卿を詩歌的に崇敬す、秀吉の書を見て曰く、賴朝以來近衛殿の外、上洛を促せしものを聞かず、猿面冠者我を屈せんとするかと。秀吉到底之れを打擊するの外、警醒する能はざるを知り、十二月畿內五國、北陸の五國、近江、美濃、

*此時秀吉家康の必らず異議あらんことを慮り、一書を裁す、已にして使者家康に會すれば、果して異議あり。曰く秀吉の妹を娶るは可、然れども長子已に國に當るが故に、質たらしむるを得す。新婦を世生めるを世に封ず。我死するも封を得ざらしむるを得たらしむるを得せば、使者書を出せば、秀吉已に此事を約す。思慮の周密此の如きものあり。

天正十四年十一月正親町天皇位を皇太子周仁親王に讓る、之を後陽成天皇とす。十四年十二月秀吉太政大臣となる、此歲方廣寺を建て、大佛を作る。

尾張、伊勢、伊賀、南海の六國、中國凡べて三十七國より三十萬人の兵を徴し、一年の糧食、二萬疋の馬料を具へしめ、天正十五年二月、海陸、道を分つて九州に向ふ。戰は先づ豐後の府内に開かれぬ。薩人、敗れて退き、馬嶽の城もまた敗れぬ。秋月もまた小熊の城を献じて下りぬ。彦山の惡僧も震慴して歸伏しぬ。*之より諸城風を望で解走す。豐臣秀長は日向より上陸し、前田利長は大隅より上陸し、三方等しく鹿兒島に向ふ。薩人は初めて上國の兵の恐るべきを見ぬ。義久方盡きて剃髪して來り降る。秀吉即ち島津氏の侵地を削り、政令を更始して歸る。之より先き天正十四年の冬、天皇位を太孫に讓る、之を後陽成天皇とす。秀吉九州より歸るや二皇兩后皇太子を聚樂第に饗して歡を盡くし、首として諸侯を率ひて相約し、永く朝貢を廢するなからんことを誓ひ、諸侯また關白に對して決して負かざるは已に事實也、而かも青天白日の下、天皇の前、萬衆の眼前に於て之を誓ふは、是れ明かに諸侯を臣屬たらしめしもの也。是に於て秀吉の覇業全く成る。秀吉即ち京師の租税を全く皇室の御料とす。其入る所地子銀五千五百三十兩、地子米八百石也。また近江高島郡を以て公卿及び諸親王の采邑とす、其入る所八千石也。秀吉已に天下の主たり、財貨蓄ふるに足らずとなし、其藏する所を出し金三萬枚銀五千枚及び三十六萬五千兩を諸侯に分與す。

*彦山は久しく衆徒を養ふて兵力強大、叡山の京師に於けるが如く久しく九州の亂元たり、大友の亂に彦山僧徒の力也。

**侯の誓文は左の如し、

敬白　起請
一就今度聚樂第之趣、被仰出儀、以難有儀、忽疎意一事
一禁裏御料所地下井に公家門跡衆所々知行等若無道行族出有之

東北の邊鄙も長く此の盛德大業に盲目なる能はず、其豪族、伊達、南部、津輕、佐竹、岩城、相馬、秋田、里見、結城、那須、葦名、蠣崎の諸氏、皆な欵を容る。獨り北條氏政、悍然として抗す。秀吉戰はずして之を壓せんと欲し、百方之を誘ふ。氏政猶ほ聽かず。此に於てか天正十七年意を決して之を征せんとし、駿河越後、以南の四十五國に兵を徴し、京師の留守を毛利輝元に托し廿六萬の大軍を率ひて進み、兵を分つて武藏、相摸、上野の諸城を攻めて之を取り、全軍皆な韮山と小田原に集る。已にして韮山また落つ。小田原猶ほ抗拒す。秀吉反間を放ち城中をして相疑はしむ。氏政事爲すべからざるを察し、遂に出でゝ降る、秀吉其勇武事を起さんことを恐れ、迫て自殺せしめ、氏直を高野に放つ。之より遺臣族黨賴る所なく亡命して乞食するに至り、猶ほ他家に仕ゆるもの少なし。而して德川家康移されて其後を襲ひ、太田道灌の故地、江戸に築く。秀吉更らに進で下野の小山に入り、伊達政宗に會して其侵地を削り、蒲生氏卿をして會津白河を領せしめ、木村伊勢守をして葛西大崎を領せしめ、政宗をして其間に居らしむ。且つ云ふ削地若し不可とせば、即ち退きて城壘を治めよと。之より先き政宗已に小田原に謁す。秀吉大言して曰く公等草野の私鬪に慣るゝのみ、何ぞ王者堂々の戰を見ざると。盛に軍容を張つて之を示めす。政宗仰ぎ見るを得ず。膽氣已に秀吉に屈す。また爭ふ所なき也。此に於てか天下全く一統す。

*各堅加二意見一、當分の義不レ及レ申子々孫々無二異議一之樣可二申置一事、
一關白殿之仰聽之趣於二何樣一聽二違背一不レ可レ申候、
一條々雖レ爲二公儀一違背天帝釋四大天王總日本國中小神六十餘州大小神祇別而伊勢天照大神宮八幡大菩薩天滿大自在天神部類眷族神罰冥罰各可レ罷蒙一者也仍起請如件

**當時黃金は一の奇寶なりしが故に、秀吉奉行を立て人名を奧ふるに之を與んで諸侯悅んで之を受けたり。

秀吉の小田原に出陣するや作り髯し、且つ服裝を美にして涅齒す。(太閤記)

秀吉小田原を下すや、鎌倉に入つて頼朝の塑像を見、其背を撫して語つて、曰く、一旅の師なくして天下を取るもの唯だ公と僕とのみ、然れども公は門閥あり、余は微賤に起る且つ僕、遂に區々日本の統一を以て足れりとせず、正に明に及ぼさんとす、公もまた僕に如かざる乎と。また道尾張を經るや、遙かに一村を指して曰く、我郷里は彼處にありと、即ち輕鼓して中

騷亂の基たらんことを慮り、秦始皇が天下の兵器を收めて金人十二を作りしに倣ひ、天正十六年七月天下に令し悉く民戸の兵器を收め新たに作らるべき大佛の釘を作ると稱し宗教によりて民心を抑ゆ。是より先き平民もまた刀を帶ぶるもの少なからず。平民の黨を作つて諸侯たるもの少なからず。今や此の法令によりて兵器全く民間より絕へて、武士と平民との別全く立ち、封建の勢遂に成る。其所業は純乎たる秦の始皇也。而して彼れ天下に令して堯舜の政を行ふ**と云ふ。此くて秀吉また法度、衡量、租稅を一にして、全國初めて統一の治に從ふ。而して此一事に於て彼を助けしものは、長束大藏の大輔、增田右衛尉なりき。彼等は先づ使を發して天下の田地を檢して、其の廣狹長短を定め、三百六十歩の段を改めて三百歩と爲し、六尺三寸平方を一歩とし、其の收穫を三分して一を農夫に與ひ、二を領主に納れしむ。足利氏の末より信長の時に至るまで田制三あり。三百歩を大步とし、百五十歩を中步とし、百歩を下步とし、百歩以下は之を藥田と稱して租稅を課せず。其租は六公四民、若しくは五公五民、若しくは北條氏の如き仁政を布くの地にありては、四公六民なるものありき。此の如き不畫一なる政治の下にありて足利義輝の時、壹岐對馬の二島を除き(北海道は當時存せず)日本國中の總高千八百六十九萬七千二百四十二石なりしに、今や段步を改め、隱田を暴きしがため、八百萬石を增加せり。加ふるに二公一民の制となりしかば、萬民は古今未だ曾てあらざる重稅を課せられし也。然れ

村に入り、父老を召き、談笑時を移して去る、今ま名古屋城に上れば中村を望むを得べし。

**條々

一諸國百姓等、刀、わきざし、弓、てつほう、其外武具のたくひ所持候事堅令停止候、其仔細者、不入道具相たくはへ、年貢所當を難澁せしめ、一揆を企、自然給人に對し非儀の働をなす族、勿論御成敗あるべし、然者其所の田畠令不作知行ついゑに成候間、其國主給人代官等として、右武具悉取あつめ、可致進上事、

一右取をかるべき刀、わきざし、ついゑにさせらるへき儀にあらず、今度大佛御建立候釘かすかいに被仰付へし、然は今世は可及申、來世迄も百姓相

ども秀吉が法令***を一定して農民をして領主の侵掠を免れしめ、度量衡を一定して僞詐なからしめ、また水旱によりて一段の收穫一斗に充たらざるときは、租稅を全免するが如き方法を設けたるによりて、また多少の救治を得ざるにあらず。然れども兎に角、重稅たりしは事實也。然かも應仁以來英雄割據の形勢を生し、族黨の制敗れ、勇士募集の法起り、個人的勇力の價減し、武器の精英を競ふの風となり、最も要する所は富なるがため、英雄競ふて殖產を勵まし、民產頓に進み佐渡、甲州の金山皆な騷亂中に採掘せられ、黃金の多き古今此の如きはあらず。錄四十二目を黃金一枚に換ゆるほどなりしかば(有馬文書)是等の重稅も足利の貧苦にして濫役なるに比しては、寧ろ幸なるものありて天下乞食なきに至りき。

三百二十五節　學問の欠乏、東常緣、紹巴、藤原の惺窩

此の時に方つてや文學は應仁以來の禍亂のため殆んと地を掃つて空しく、僅かに紹巴の連歌に巧なるあり、紹の正轍の和歌に巧なるありと雖も、一代の光明を爲す能はず。北條氏の末、足利氏の初より、文學の權公卿の手を離れて禪僧の手に歸せしが、禍亂の爲め禪僧其の衣食の道を失したるより、文學を業とするものなく、僅かに一の東常緣ありしと雖も、常緣東國の亂を平げんがため下るや、京師また文學の大宗なきに至る。其他太田道灌の後土御門の時にある、細川藤孝の秀吉の時に於ける、皆な一代の名家たりと雖も、僅かに其限ある子弟を敎ゆるに止りぬ。人あり四書の素讀の師に求めて得ず、公卿の

山科氏、學問深甚の名あるを以て往て之を問ふに、大學、中庸、論語を教へ、孟子に至つては其書を有せすして教へず、實は師自ら孟子を讀むを解せざりし也。此の如くして公卿は其文學の權をすら失ひぬ。然るに越後上杉の重臣直江兼續、英雄の姿を以て學を好み、長門の小早川隆景、また學を好みしかば、地方武士の間に於ては學問漸やく起らんとし、藤原惺窩出るに至つて儒學興隆の端漸やく開けたるも猶ほ文教一代を動かす能はさりき。社會は猶ほ生存の計に餘裕なかりしが故也。

三百二十六節　社會の行樂　然りと雖も社會の行樂に至つては、早く已に發生しつゝありき、當時明及び葡萄牙西班牙との貿易漸やく發達したりしかば珍器異寶は日夜に至りしかば、上流社會に於ける生活の程度漸やく高く、之と共に秀吉が天下の大軍を集めて、南島津を攻め、北、北條氏を制するや、天下の財貨は數百年來干戈の衢たりし五畿近傍に遺されしがため此の近傍に於ける社會の逸樂は漸やく隆起して、義政時代にありては金を明に送つて錢を買ひしに、今は外國貿易に對しては金銀板を拂ひ、內地の賣買に於ても銀塊を切斷し、量目を量つて之を通貨として用ゆるに至り、之より後久しからずして金銀貨幣を作るに至り、慶長判の名は、後世、善良なる貨幣の標準となりぬ。以て社會の生活が如何に高く上りしかを見るべき也。故に貧寒なる公卿は殿上に歌會を催ふして、豆餅を以て歌賃とするに方りて、秀吉以下の諸侯、及び近畿の

*定*一諸奉公人侍事は申にをよばず申間こもものあらし子に至るまで其主にいさまこわす出候義曲事候間、相抱へからす但まへの主に相届け合點こたすかる儀に候事

一百姓は農具さへもち、耕作を仕候へば、子々孫々まで長久に候百姓御あはれみを以如此出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ、天下を令二鐵撰一寶劍利刀を農器に用候ためし、此旨を守り善其趣を存知、百姓は農業に精を入へき事、右道具急度致進上、不可油斷候也、

天正十六年七月日

御朱印
（阿部文書）

一百姓其在所に有之田畠あらす、其給人其在所へあいこし百姓と令二相對檢見一遂二分一百姓に即米三分一百姓に未進なく給人とるへき事

一自然其年によりかんすいそんの田地あらば、一段に米一斗よりの內は農料に不可拂之條、拂之百姓に其まゝとらせ、翌年の毛をせ付候や、壹斗に致すに付候、壹斗より上は右に如相定に三分二おうすへき事

一百姓年貢を仕らざる以下は、夫役之、隣國他郷へ相越へからす、若置輩に申にいたしては不レ及其在所中曲事たるへき事

一其國その在所給人、百姓等諸事迷惑せざる樣に令分別、年貢をば全とり候やうに、百姓等惡せざる樣に、給人をば不レ仕之、隣國他郷へ相越へからす、若置輩に申にいたしては不レ及其在所中曲事たるへき事

一百姓其在所に有之田畠あらす、其給人其在所へあいこし百姓と令二相對檢見一遂二分一百姓に即米三分一百姓に未進なく給人とるへき事

一自然其年によりかんすいそんの田地あらば、一段に米一斗よりの內は農料に不可拂之條、拂之百姓に其まゝとらせ、翌年の毛をせ付候や、壹斗に致すに付候、壹斗より上は右に如相定に三分二おうすへき事

一百姓年貢を仕らざる以下は、夫役之、隣國他郷へ相越へからす、若置輩に申にいたしては不レ及其在所中曲事たるへき事

一其國その在所給人、百姓等諸事迷惑せざる樣に令分別、年貢をば全とり候やうに、百姓等惡せざる樣に、給人をば不レ仕之、隣國他郷へ相越へからす、若置輩に申にいたしては不レ及其在所中曲事たるへき事

一百姓は農具さへもち、耕作を仕候へば、子々孫々まで長久に候百姓御あはれみを以如此出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ、天下を令二鐵撰一寶劍利刀を農器に用候ためし、此旨を守り善其趣を存知、百姓は農業に精を入へき事、右道具急度致進上、不可油斷候也、

天正十六年七月日

御朱印
（阿部文書）

*定*一諸奉公人侍事は申にをよばず申間こもものあらし子に至るまで其主にいさまこわす出候義曲事候間、相抱へからす但まへの主に相届け合點こたすかる儀に候事

一百姓は農具さへもち、耕作を仕候へば、子々孫々まで長久に候百姓御あはれみを以如此出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ、天下を令二鐵撰一寶劍利刀を農器に用候ためし、此旨を守り善其趣を存知、百姓は農業に精を入へき事、右道具急度致進上、不可油斷候也、

天正十六年七月日

御朱印
（阿部文書）

*定*一諸奉公人侍事は申にをよばず申間こもものあらし子に至るまで其主にいさまこわす出候義曲事候間、相抱へからす但まへの主に相届け合點こたすかる儀に候事

一百姓は農具さへもち、耕作を仕候へば、子々孫々まで長久に候百姓御あはれみを以如此出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ、天下を令二鐵撰一寶劍利刀を農器に用候ためし、此旨を守り善其趣を存知、百姓は農業に精を入へき事、右道具急度致進上、不可油斷候也、

天正十六年七月日

御朱印
（阿部文書）

*定*一諸奉公人侍事は申にをよばず申間こもものあらし子に至るまで其主にいさまこわす出候義曲事候間、相抱へからす但まへの主に相届け合點こたすかる儀に候事

一百姓は農具さへもち、耕作を仕候へば、子々孫々まで長久に候百姓御あはれみを以如此出候、是國土安全萬民快樂の基也。異國にては唐堯のそのかみ、天下を令二鐵撰一寶劍利刀を農器に用候ためし、此旨を守り善其趣を存知、百姓は農業に精を入へき事、右道具急度致進上、不可油斷候也、

天正十六年七月日

御朱印
（阿部文書）

富豪は、茶の湯、茶器、展覽會を催すに至りぬ。此中最も奇なるは秀吉が自家の珍器と、市民の珍器を競はんがため、北野の松原に茶會を催ふしたるにあり。此會や貴賤を問はず、志あるもの皆な會するを得、堺の市民は京の市民と、互に其風流を競ふに至りき。此の一事に於ては秀吉等猶は義政の風流遺韻を仰がざる能はざりき。

三百二十七節　宗教の勢力盛にして信仰衰ふ、秀吉基督教を抑へんとす　宗教は其初め天台宗の政治的勢力の衰ふると共に衰へて禪宗起り、禪宗、其皆空の見によつて信を衆民の間に博する能はざるの時一向、日蓮の二宗起り、天下の騷亂に乘じ、兵力を以て其教義を弘むるや、燎原の火の如き勢あり、信長を苦しめ、家康を苦しめ、甚しきは家康の家臣が長島の一向一揆に誘はれて家康に敵するや、一步退けば一步地獄に近しと叫びて、殆んど家康を亡ぼさんとするに至り、遂に天下の大勢力となりしが、其勢の張ると共に、其眞正の信仰は漸やく衰へぬ。此時に方つて基督教の一派ゼスウイツト宗の來るや、其聖僧ザヴェーの堅忍高德なる、其の財富に富める、其の軍隊的猛氣ある、頓に九州一圓を靡かし、中國を經て近畿、東山、北陸に蔓延するに至り、其堅信勇猛の心恐るべきものとなりぬ。其傳る所の化學は魔法の如く傳唱せられたり。其の施所の仁惠は國を買ふの價なりと說かれたり。僧侶之を內に讒し、愚民外に之を傳ふ。之に加ふるに基督教を信ずるもの、多くは九州の諸侯、新進、有爲の才あり、事變を好むの少年武士な

うに可申付候代官以下に不レ任念を可レ入次對百姓等いれざる樣な申懸やからあらば其給人可爲曲事十合の樣に有樣に以左右手可打、うちかりはに一升な以、以左米は一石につぬて十合可爲二升、其外升一切役米ある一切ざる事其國々在所堤以下あらば正月中農作に手間不入折から可加、但其つゝ修理、破の時百姓不レ及二自簡一者、可被達上聞爲上曲事

一御朱印御服の外は綿うたるべし但我儘には不可成之條、四月一日わたぬきたる間よりのちきそれよりのうたるべき事

一諸侍しきれはく事一切停止也、御供の時は足なかたるべし中間こものは不

斷あしなかたるへき事はかまたびにうら付へからさる事

一中間こもの、わたびはくへからさる事

右條々若有違犯之輩者可處罪科

天正十四年正月十九日

（西村文書）

石高を呼ぶに貫を以てせるも、また此頃より廢せられて現今の如くなれり。貫は米五石に當る。草蘆雜錄によれば、一坪を一文とし、一千坪より一貫とし、千坪より籾十石を得ると定めて、之を五合掛とせば五石となる也。然れども地方により一定せず、一貫即ち一石なるもあり。

天正以前日本國民の衣服は、上流の者は絹を用ひ、下流の者は麻布、葛布を用ゆ。木綿あるは

傳敎するの自由を得たり。然れども秀吉の大方針は常に基督敎を抑ゆるにありき。

三百二十八節　國民の氣風、習俗、法律、及び道德

當時國民の氣風は佛敎の感化によれる厭世思想なく、純乎たる日本固有の戰士的氣質となりぬ。凡そ如何なる時にありても宗敎の高遠なる敎義は、時の詩歌、散文、小說の力によりて社會に注入せらるゝを常とす。何となれば國民の多數は、其錯綜せる敎理を自ら咀嚼するの識力なきが故也。今や應仁以來社會の文敎は全く跡を絕ち、文學なるものは殆んど忘れらんとしたり、固より國民に佛敎の厭世思想を附與するの機會なかりし也。況んや應仁の大亂、天下を一大軍營たらしめ、殺伐の氣風、天下に充滿するに加へて、厭世的佛敎は已に一たび禪宗に打破せられ、再び眞宗、法華宗の今日主義のために薄弱ならしめられたり、是等の原因は相集つて一大急潮の如く、國民の厭世思想を洗ひ去りしかば、國民の氣風は其最初の狀態に歸りて、無垢なる戰士的氣風となりぬ。戰士的氣風は敵に對しては殺伐なれども情あり。其威を惡みて其窮を憐れむ也。戰士的氣風は義烈を尊ぶが故に、ストイツク的にして　情を矯むること多きがため、其調沈鬱也。戰士的氣風は必しも事の正邪を問はず、道の善惡を論せず。操守殉情を主とするが故に、其音悲愴也。此の如くして此等の氣風や、人實の制や、敗者を窮迫するの風や、法律の行はれざるの風や、相合して一種の戰國的道德を生じぬ。戰國的道德は、敵ながらも强者を賞嘆するの風也。昧方なからも死を惜しみたる者を疏

此頃外國と交通して、其種を得たるに初まる、其他玉蜀黍、蕃椒もまた此頃より來る。

＊定一日本者神國たる處、きりしたん國より邪法を授候儀甚以不レ可レ然事

一其國郡之者を近付門徒になし、神社佛閣を打破し、前代未聞を行等給人に被下候儀は、當座事に候、天下よりの御法度相守諸事可レ得其意候處に、下々として猶儀曲事候事

一伴天連其智惠之法を以、心さし次第檀那を持候半と被思召候處、如右日域之佛法を打破候事曲事候條、伴天連は被レ追上一日之間に可レ用意仕候、其中下々伴天連に不レ謂族申懸者あらば可レ爲二曲事一

一黒舟之儀は商買之儀に候間各別に候、年月經諸事賣買可仕候事

一自今以後佛法之妨を不レ成輩は商人の儀は不及申候、何にてもきりしたん國より往還苦候條、可レ成二其意一事

天正十五年六月十九日　御朱印

切支丹邪宗門由來書の二書多し、當時の世は實に此く信じたる也、

南蠻寺興廢記及

笑ふべき事妄誕と雖も、

勸誘を受けながら肯せず、歌を殘して猛火の中に自殺したるが如きは、稀有の事にあらず。當時の氣風を代表せるものなりき。また市民の妻にして一旦夫のために離緣せらるゝや、近傍の朋輩を募りて、先夫の家に亂入し、新婦を打擲するが如きは珍事にあらざりき。戰士的の氣風は凡べてを一貫したる也。此の如き無垢なる氣風の民にして、善政、英雄、善法を有すれば、是れ進歩あり希望ある國民也。然らずんば野蠻に復らんとす。日本國民は秀吉の爲めに野蠻に復るの運命を免れたり。彼は威力を以て治平を與へたるが如く、法律を以て治平を與へぬ。此法律の＊ため、諸侯は關白の許可なくしては、婚を通ずる能はず爲れり。武士は徒黨を作るの禁を得たり、多く妾を畜ふの風は排せられたり、大酒は禁せられたり。訴訟の方も定めたり、殊に其の海路諸法度と稱する海上法に至りては、習慣風俗を基として立てたるものにして、他の普通の法律の漠然たるに比して、周到緻密、今日の眼より見るも稱贊すべきもの少からずして、船主と荷主の關係、船主と船長の關係、其權利義務、其契約より生ずる結果、其天變より生ずる損害の負擔、船舶衝突に關する規定等を明記し、其の風波に際して船足を輕くせんがために、海中に投ずる積荷の損害を他の積荷と均分するの法に至つては、近時英國の法律と相近きものあり、而して此等の法令を布達するに、皆な小早川隆景、毛利輝元、前田利家、浮田秀家、德川家康五人の名を以てせり。是より國人康安、希望洋々として生ず。

三百二十九節　倭寇の猖獗、呂宋の入貢、秀吉明を征せんとす

なく、言は法律となり、行は命令となる。此に於てか使を四方に發して、朝貢を促がすや、朝鮮、琉球先を爭ふて入貢す。此時に方つて、倭寇の勢益す盛にして明の海岸、遼東、山東より廣東に至るまで、倭寇の至らざる所なく、澎湖島を取り、臺灣に入り、呂宋に入る。呂宋は元龜二年、信長比叡山を燒くの年、西班牙の水師提督レガスピーの征服する所となり、純乎たる西班牙領となり、軍艦大砲を以て其要所を防禦せらる。然れども倭寇は之がために其志を廢せず、絕へず攻撃を加へしが天正八年、パシアドル港に於ける大戰に於ては、倭寇の舟、西班牙軍艦に衝破せらるるや倭寇直ちに躍つて軍艦内に入り、短兵相接して殆んど一艦中の水兵を盡さんとするに至りぬ。天文二十二年上杉武田河中島に戰ふの年は倭寇大擧、數百の戰艦海を掩ふて支那大陸に迫り、浙東、浙西、江南、江北、一時に其侵略を蒙り、太湖、燕湖、南京も其襲ふ所となるに至りぬ。英雄豪傑が區々の境域を爭ふの時、國民は外に向つて此の如き絕大の遠征を試みつゝありし也。故に此等の南北の遠征に加はりし冒險功名の徒、常に堺に出入して京攝の間に居り、頻りに秀吉を干して其說を勸めしかば、誇大自ら悦ぶ秀吉の胸中、更らに一個の新天地を發見しぬ。封侯は彼の望なりき。今や望は遂けられたり。天下の統一は彼の夢なりき。今や夢想は事實となりぬ。成功は人をして更らに大望ならしむ。今や秀吉は更らに其望

秀吉已に天下を一統して諸侯服せざるものなく、言は法律となり、行は命令となる。此に於てか使を四方に發して、朝貢を促がすや、朝鮮、琉球先を爭ふて入貢す。此時に方つて、倭寇の勢益す盛にして明の海岸、遼東、山東より廣東に至るまで、倭寇の至らざる所なく、澎湖島を取り、臺灣に入り、呂宋に入る。呂宋は元龜二年、信長比叡山を燒くの年、西班牙の水師提督レガスピーの征服する所となり、純乎たる西班牙領となり、軍艦大砲を以て其要所を防禦せらる。然れども倭寇は之がために其志を廢せず、絕へず攻撃を加へしが天正八年、パシアドル港に於ける大戰に於ては、倭寇の舟、西班牙軍艦に衝破せらるるや倭寇直ちに躍つて軍艦内に入り、短兵相接して殆んど一艦中の水兵を盡さんとするに至りぬ。天文二十二年上杉武田河中島に戰ふの年は倭寇大擧、數百の戰艦海を掩ふて支那大陸に迫り、浙東、浙西、江南、江北、一時に其侵略を蒙り、太湖、燕湖、南京も其襲ふ所となるに至りぬ。英雄豪傑が區々の境域を爭ふの時、國民は外に向つて此の如き絕大の遠征を試みつゝありし也。故に此等の南北の遠征に加はりし冒險功名の徒、常に堺に出入して京攝の間に居り、頻りに秀吉を干して其說を勸めしかば、誇大自ら悦ぶ秀吉の胸中、更らに一個の新天地を發見しぬ。封侯は彼の望なりき。今や望は遂けられたり。天下の統一は彼の夢なりき。今や夢想は事實となりぬ。成功は人をして更らに大望ならしむ。今や秀吉は更らに其望

*英人ホーノマン　フヒリッピンの群島志によれば大守は秀吉と攻守同盟を結びたりと云ふ。大守とは固より臣屬するの權なければ事實なるべし。然れども秀吉誇大の念なる、此の如き文字を以て對峙の同等なりしなるべし。恐らくは原由等其間を滲糊せし乎。秀吉朝鮮の使を延見するや小兒を懷きて堂中を徘徊す、秀吉笑つて小兒溺す、侯人を呼びて之を授く。

を大にして海表に號令して南北東西を混一せんと欲するに至りぬ。思らく、區々の倭寇猶ほ能く明朝と呂宋を破る。天地の特寵を得たる乃公の雄才大略を以て之に臨む、何事が成らざらんと。天正十八年小田原を征するに先ち、原田孫七郎を使として、呂宋に入つて服屬を命せしめ、聽かずんば直ちに征服軍を起さんと云ふ。呂宋は已に西班牙の領地となりフヒリッピンと號せらる。其大守ダスマリニヤスは固より西班牙の命を聽かずして其の運命を定むべきの權なしと雖も、秀吉の聲威隣近に震ひ、且つ已に倭寇の猛勇を熟知するが故に假に、使を發して方物を獻じ、且つ和親を乞ふ。*秀吉また朝鮮王、李昭に命じて、明を促がして入朝せしめ、聽かずんば道を朝鮮に假て明を征伐せんと云ふ。朝鮮王笑つて曰く、秀吉眇たる一身、即ち明を窺はんと欲す、是れ蜂の龜甲を刺さんとするに等しきのみと。秀吉大に怒り明の亡命汪五峰と共に、天文二十二年の大倭寇を起せる者の殘黨を招き、明の形勢を問ふ。彼等の語る所によれば、當時の倭寇の一黨三百人を以て、直ちに南京に入つて福建に下るに、向ふ所風靡せざるはなく、明將の我を恐るゝ乳虎の如しと云ふ。秀吉遂に意を決して對馬の國守宗義智をして、商賈に紛して朝鮮に入り、形勢を探らしむ。

三百三十節　秀吉子を失す、外征の議決す

之より先き淺井長政の世にあるや、織田信長の妹を娶つて三女を生む。已にして長政の亡ぶるや、其妻改めて柴田勝家に嫁し、勝家の亡ぶるや自殺し、

三孤、頼る所なくして民間に藏くる。秀吉其長女の美を聞き、之を納れて寵愛比なく、男鶴松を生むや、熱愛して措かず。天正十九年鶴松三歳にして死す。秀吉時に年五十五。哀悼悲傷して已まず、殆んど寢食を忘るゝに至り、數ば出遊して以て憂を消さんとす。一日清水寺の塔に上り、四方を望み、慨然として古今を懷ひ、人生の恃むべからざるを感じ、悲愁、中心より湧き來る。彼をして厭世時代の思想を有せしめば、彼は剃髮して世を退き、豪華一世を驚かすを以て最後の事業としたりしならん。然れども一代の戰士的氣風と、彼の强固なる智力は、彼をして義政たらしむるを許さず、彼をして悲愁の中に突進し、大業を以て悲愁より免れしめんとす。彼思へらく榮華は一朝のみ、何ぞ前古無比の大業を以て、名を萬世に遺すに如かんやと。遂に斷然として朝鮮にいりて明を征伏せんと欲し、家康、輝元、隆景、利家、秀家の五大老、生駒雅樂頭、中村式部少輔、堀尾帶刀先生の三中老、淺野彈正少弼、前田玄以法印、增田左衛尉、石田治部少輔、長束大藏大輔を大坂城に召して外征の議を咨ふて曰く、今や天下統一せりと雖も、明主猶ほ我命を奉せず、余此時を以て之れを夷げ、皇室を支那に移し*、四百餘州を割きて諸侯を封せんと欲す。故に先づ朝鮮不服の罪を問ふて之を責め、若し服すれば先鋒たらしめ、服せずんば先づ之を亡ぼし、長驅して支那に入らんと欲す。[三]余今ま愛子を失つて悲悼禁ぜず、然れども人生百歳の壽なし、何ぞ欝々の間に終るべけん耶。余が心已に決す、卿等以て如何となすと。此時、天下一百五十年の大亂より初めて泰平となり、行樂漸やく起り、諸侯各々劒を鞘にし、弓を囊にして、治平を樂まんとす。固より秀吉の誇大自ら樂しむの氣象を知るを以て、頼朝の故事を追ふて富士の征狩を起し、若しくは大土木を起すが如きは之あるべしとは豫想せしも、未だ支那征伐あるべしとは思はざりき。今や此言を聽き、愕然として或は狂となし、或は喪心とす。一人敢て可否を云ふものなし。暫くして浮田秀家、席を進みて之を賛せしかば、衆已むを得ずして之に和す。秀吉大に悅び天正十九年三月令を發して兵を徵す。其の徵兵の標準は諸侯の領邑の大小に應じ、一萬石につき四國九州は六百人、中國紀伊は五百人、五畿は四百人、近江、美濃、伊勢は三百五十人、遠江、三河、駿河、伊豆は三百人、是より北方諸州は二百人、若狹より能登は三百人越後出羽は二百人を出さしむ。また沿海諸侯をして十萬石ごとに大船二艘を作らしめ、海港の民、百戸より十人の水手を出さしめ、凡て公役に應ずるものは其租を免じ、軍人役夫、軍を脫して逃るゝものは殺ろすのみならず、其親戚を誅すべしと令し、役夫、外に在る間は鄕黨邑人相助けて其田地を耕さしめ、田若し荒るれば其の責を鄕人に負はしむべしと。また城を肥前の名護屋に築き、十萬の役夫、百萬の金を費し、壯麗宏大、古今比なし、曰く此より號令を發して、外征の紀念を百世に垂れんと。

三百三十一節　秀吉親軍の軍容、征明軍の部署

已にして關白職を其義子秀次に讓り、自ら大閤と稱して

*文祿元年五月先鋒京城を取るの報に接し、名護屋より秀次に送れる秀吉の書中云へるあり
大唐都へ叡慮うつし可申候、可有其御用意候、明後年可爲行幸候、然者都廻之國々十ヶ國可進上之候、其内に諸公家衆何も知行可被仰候、下之衆可爲十倍增候、其上之衆は可依仁躰事、大唐關白右如被仰候、秀次え可被爲讓候、然者都之廻百ヶ國可被成御渡候、日本關白は大和中納言備前宰相兩人之内覺悟次第可被仰出事、日本帝位之儀、若宮八條殿何にても可被相究事、高麗之儀者、岐阜宰相歟不然者備前宰相可被置候、然者丹波中納言は九州に可被置候事、震旦國え叡慮爲被成候路次例式行幸

之可爲儀式候、御泊々今度御出陣道筋御座所可然候、人足傳馬は國限に可申付事、秀吉の經綸の委細を見るべし、彼は天子を支那に移さんとし、日本天子の後を豫定し日本朝鮮支那の關白職すらも之を豫定し、印度をも席巻せんと欲したる也。

軍事を統轄し、文祿元年二月十八日親軍三萬を率ひて京師を發す。發するに先つて諸將に命じて曰く、此役空前絶後の大業也。衣服、軍器、旗幟を美麗にして金銀を鏤め、采色を施し、彼の輩をして笑はしむる勿れと。故に其親軍の軍容整正、約束嚴明、六十六の旗を立てゝ日本統一を示めし、劍戟の光、日に映し、甲冑の美、人目を眩射す。秀吉自ら錦の戰袍を着て大刀を帶び、金甲馬に跨り、一隊の將士をして修驗者に粧ふて螺を吹きて前駈せしむ。足利義照もまた數百騎を率ひて旗下に屬す。已にして四月、大軍肥前に集まる。即ち號令を發して一切の抄掠、一錢斬を以て之を禁じ、金銀を惜しみて敵國人民の心を失はざらしめ、殺を嗜むなからしむ。地圖を諸將に分ち色を以て國を分け、其向ふ所を部署す。小西行長等第一軍たり。加藤清正等第二軍たり。黒田長政等第三軍たり。島津義弘等第四軍たり。福島正則等第五軍たり。小早川隆景等第六軍たり。毛利輝元等第七軍たり。浮田秀家等第八軍たり。淺野長政等第九軍たり。羽柴秀勝等第十軍たり。九鬼義隆、藤堂高虎、加藤嘉明等水軍の將たり。秀家總大將を兼ね、小西加藤の二軍先鋒たり。大軍次を以て海を掩ふて互る。

三百三十二節　明の國狀、朝鮮の微弱、行長平壤を取る

此時に方つてや支那は明の天下にして、古今最も廣大なる一統を遂けたる時也。其主神宗、權臣張居正の家を族滅せしより、大臣族威の禍起り、下には處士、直名を賣つて大臣と相排するあり。加ふるに神宗闈中亂れて事を見ず、朝政漸や

く亂れ、訓詁、考證の學大に盛んにして、兵備日に怠り、連年、倭寇のために海邊を蹂躪せられて、地方官等之を防ぐ能はず。古ひ元人侵略の古途たりし寧夏の地、また叛亂し、傾覆の勢漸く成らんとす。明人許儀後、薩摩にありて醫を業とす。秀吉の書策を錄して百萬の大軍起程すとなして私かに之を福建府に報じ、琉球王また其臣鄭禮をして、福建巡撫に至りて事情を報せしむ。明主之を朝鮮王李昭に質す。之より先き朝鮮王、金誠一等を日本に送りて情僞を察せしむ。誠一歸つて曰く秀吉もまた凡物のみ、決して軍を起さゝるべしと。故に李昭猶未だ秀吉の眞に遠征の意あるを信せず、誇張の辭として明主の心を安んず。已にして秀吉實に大軍を起すと聞き、倉皇狼狽、守備を治む。然れども其將士多く日本を恐れて相推諉し、適ま城壁を作るも用に當らず、天變地異また皆な倭朝鮮を亡ぼすの兆として傳られ、妖言數ば起り、國民故なくして驚くもの數ば〳〵、相傳つて云ふ世久しからず變すべし、生前醉飽するに如かずと、宴樂數十日、千百群をなして、或は笑ひ、或は哭す、曰く將相の其器にあらざるを笑ひ、國朝の將に阨んとするを哭すと。已にして小西行長、宗義智等、釜山を攻めて一擧に之を拔き、八千人を殺ろし二百餘人を擒にし進んで東萊を攻め、蔚山郡守李彦誠を執へ、朝鮮王に與へて道を假るの書を附して王に送らしむ。李彦誠、中道遁逃して書達せず。王、申砬をして京畿黄海の二道を守らしめ、李鎰をして忠清全羅の二道を守らしむ。二人、虚名あるのみ、兵を知らず。唯だ至る所

兇威を恣にして民に厭はるゝのみ。已にして行長中路により大丘を經、鳥嶺を越えて、清正等東路により、蔚山より慶州、永川、龍宮河を經て、竹嶺を越えて、長政は西路により金海、秋風嶺を越えて、大軍等く三道より京城に向ふ。諸城風を望んで解走し日軍の進むや無人の地を行が如し。已にして小西行長先づ京城に入れば、王昭已に出でゝ義州に走る。已にして秀吉遙かに命を傳へて朝鮮を分つて、諸將の向ふ所を示めす。清正咸鏡道を得、行長等平安道を得、長政等黄海道を得、吉成等江原道を得、輝元等慶尚道を得、隆景等全羅道を得、正則等忠清道を得秀家は京城に止つて京畿を鎭壓す。已にして行長清正兵を併せて臨津を渡り、開城を取り、大同江に迫る、清正兵を分つて咸鏡道に出で烏梁海（チャンカイ）に至り、其二王子を擒にして歸る。烏梁海（チャンカイ）は今の露領浦鹽斯德港の近傍の地也。斯の如く兵鋒向ふ所勝たざるなし、然れども缺く所は水軍の力にして朝鮮の水軍の將李舜臣が我水軍を巨濟島に扼するや、藤堂高虎等戰つて勝たず。後ち來島通之また李舜臣と戰つて敗死す。我陸軍已に開城に入つて、水軍猶ほ之に伴はず。故に糧食給せず、士卒漸やく勞る。此時國王昭平壤にあり、使を明に發して援兵を乞ふ。適ま遼東巡撫郝杰また明王に奏して朝鮮を救はずんば、倭遂に遼東より北京に入らんとすと云ふ。北京の朝廷群議囂々たり、或は兵を遼東に出して國境を守りて、蟲蚌の爭を傍觀すべしと云ふあり。或は浙江、直隸、福建の水軍を集めて、直ちに日本を衝くべしと云ふあり。兵部尚書石星主とし

此役毛利輝元、其銃士なして甲冑を著ざらしめ、以て行軍に便にす、是れ近時輕裝兵の始也。

李舜臣の船舷上錐を植ゑて攀づる能はざらしめ、銃眼を穿ち、銃士船中に藏れて狙撃す、之を龜船と云ふ。

て援兵を發するの說を持し、一面陸兵をして、一面沿岸諸國に命じ、水軍を集めしめ、以て日本を衝かんと欲す。援兵未だ至らず、王の從臣驚恐すること數ば、遂に王を奉じて咸鏡道に逃れんとす。尹斗壽之を排すれども聽かず、先づ寵臣をして出しむ。市民之を見て憤激して曰く、汝等生平金衣玉食して今乃ち國を誤り、已に敵を禦ぐ能はず、また主をして我を捨てしめんとする乎と、囂々嘖々及を揮ふて宮門を塞ぐ。眙力めて之を排して平壤を出づ。尹斗壽、金命元、猶一萬人を以て平壤を守り、沿岸一帶に營を作り、舟を奪つて悉く北岸に集む。一夜金命元江を隔て日本軍士の倦怠せるを見、宗義智の營を斬て之を亂し、また長政の陣に及ぶ。已にして全軍悉く起るや、命元敗走、流を亂して走る。行長等初めて淺瀨の在る所を知り、長驅進擊遂にまた平壤を取る。

三百三十三節　秀吉援兵を發す、行長明軍を破る、諸將不和、兵力足らずして秀吉泣く

行長書を朝鮮王に與へて其出師の意決して朝鮮を蠶食せんと欲するにあらざるを辯じ、また人を京城に遣はして秀家に謂はしめて曰く、平壤より以北、一の鴨綠江あるのみ、江を渡れば即ち明地也。請ふ速に大兵を發して繼いで至れ、全軍長驅して明に入らんと。諸將朝鮮未だ全く服せざるを以て、明に入るを難ず。即ち使を發して援兵を秀吉に乞ふ。秀吉即ち增田、長束、石田以下十一將に五萬六千人を附して朝鮮に入らしむ。此時に方りて明、漸く援兵の議を決し、其總兵官祖承訓をし

此時小早川隆景は全羅道を徇へ、少壯、氣ある土人を兵となし、衣服を變して弓矢を取らしめ、內地の叛亂を鎭撫せしむ。

て遼東の兵五千人を率ひ、參將郭夢徵、戴朝弁、遊擊史儒、王守官と共に朝鮮を救はしめ、先づ史儒をして發せしむ。朝鮮王李昭、其至るを望み、倉皇狂喜、感泣涕下り、其馬を下りて史儒を拜して曰く、獘國の存亡大人の肩にありと。史儒傲然として曰く憾らくは平壤を救ふに及はざりしをと。已にして祖承訓至るも、義州に止つて敢て進まず、朝鮮の斥候誤つて報じて曰く、倭兵多く京城に退くと、承訓之を聞き義州を發して平壤に向ふ、道に土人に問ふて曰く倭兵退きし乎。土人曰く未だし、承訓天を仰きて大笑して曰く、倭兵退かず、是れ天、我をして功を爲さしむる也と。即ち疾く兵を進む、史儒先鋒たり。順安より馳せて平壤に至り、風雨に乘じて城壁に潛み、翌曉齊しく皷驟して進む。事不意に出で、平壤の市門鎖されず、且つ行長正に中和に築かんがため、兵士を發し、城中にあるもの多からず。諸將甲を環せすして短兵接戰す。此時承訓の兵多く遼東の騎兵にして、平壤道夾く、馳突に便ならす。日本軍士、巷衢の要衝によつて要擊し、擊つて史儒、戴朝弁、張忠、馬世隆等を殺ろす。承訓大敗して走り、死するもの一千餘人。已にして黑田孝高秀吉の命を奉じて京城に入り、諸將を會して相議して曰く、明の先鋒敗れて還らば、大軍再び至らん。宜く此城を修築して死守せざるべからず。また平壤より京城に至るの通路、等しく城壘を築きて備へさるべからずと。行長曰く明人、已に其膽を落とす、再び鴨綠江を越て來らざるや必せり、患ふるに足らずと。遂に從はず。此時に方りて石田三成、增田長政、大谷吉繼監軍たり、三人共に行長の親友たり、行長已に電擊雷馳して平壤を取り、功勳最も大也。諸將其功を嫉みて助けず、監軍の之と私するを疑ひ、軍氣漸やく怠る。而して諸將、朝鮮を衝くや疾風の如く當る所摧けさるなしと雖も、撫安防備は其長所にあらざるがため、禽奔獸散したる韓人、所在相集つて土寇を起す。是より攻勢變して守勢となる。且つ藤堂高虎の敗、來島通之の死の後、李舜臣、日本水軍の薄弱を欺き、進で見乃梁に來りて、日本より朝鮮に至る水路を斷せんとす。協坂安治之と戰つて勝たず、舶船悉く其の燒く所となり、二百人の兵士島上にありて歸るを得ず。加藤嘉明、長曾我部元親もまた之を救ふて大敗す。已にして北方の寒威漸やく强よく、糧食益す乏しく、軍氣沮喪す。且つ征韓の師初めて出るもの十萬、後に援兵として出るもの五萬なりと雖も、處々の城邑を鎭壓するの要あるがため、前進して明軍と戰ふに足るものは行長、淸正に屬する二軍のみ。秀吉、內にありて日夜、家康、利家と議を交へて兵を增さんとするも、十萬は如何にしても京畿の守護として存せざるべからず。十萬は如何にしても肥前大營の守護として存せざるべからず。此外國力を盡くすも以て朝鮮に入らしむるの兵を出すの策なし。快活、廣懷、曾て泣かざる秀吉も談此に及ぶや、切齒扼腕して泣くに至る。未だ明の大兵に接せずして形勢漸やく非也。

三百三十四節　北京の狼狽、沈惟敬、行長と和を議す

日本の國力、內に勞ること此の如くなるに方つて、

*明史記事本末によれば、大同江以南を日本に與ふるの約ありと云ふ。

**秀吉明主との約
一和平誓約無相違者天地縦雖盡茲矣不可有違變也、然則迎大明皇帝之賢女可備日本之皇妃事
一兩國年來依間隙勘合近年及斷絶矣此時改之官船商舶可有往來事、
一大明日本通好不可有變更之旨兩國朝權之大臣互可懸誓詞事
一於朝鮮遣前驅伐之矣至今彌爲鎮國家安百姓雖可遣良將此條目件之領納者不顧朝鮮之逆意對大明分八道以四道幷國城可還朝鮮國王且又前年從朝鮮差三使投木瓜之好也、餘蘊與附四人口實也
一四道者既返投

北京の朝廷もまた實に狼狽を極めたり。石星初め、日本の力を圖らず、其急進電馳、此の如く一ヶ月を出でずして、早く平壤を取らんとは信せざりき。已にして祖承訓大敗の報を聞くに至て、初めて事態の容易ならざるを知り、銀一萬兩、伯爵を懸けて能く日本と戰ふものを募る。然れども一人遂に應せず、即ち外交の術によりて、日本の兵鋒を緩うせんとして遊說を善くする者を募る。時に明人、倭寇に加つて日本に來往して、情僞を知る者あり。浪士沈惟敬功名を希ひ、之に從ふて日本の情僞を知る。石星之を招き策を問ふ、惟敬曰く秀吉を屈する名號を以てすべきのみと。石星即ち惟敬を神機三營遊擊將軍とし平壤に至て行長と會して和議を談せしむ。行長曰く明人詐多し。若し約する所天地に誓つて變せずんば、之を大閤に奏して和を議せんと。惟敬惟々諾々す。時に三監軍また平壤にあり、行長之と議して條件を呈出して曰く、**明主の女を以て日本天皇の皇妃たらしむべし。朝鮮を分割して其四道を日本に與ふべし。朝鮮の二王子を還へすと雖も、一人を日本に送りて永住せしむべし。日本、明と和好する舊の如くなるべし。朝鮮の太政大臣をして、入つて日本に質たらしむべし。朝鮮をして日本に服せしむべしと。惟敬、皆な諾す。行長則ち五十日を以て休戰の期となし、此間に北京の批准を取らしむ。

三百三十五節 朝鮮の土寇起る、愛親覺羅の族朝鮮を助けんとす、李如松平壤を取る、明軍の大敗

此時に方つて日本の諸將、朝鮮全國に散在して土寇を防ぐに汲々として、平壤以北に力を伸ばす能はず。故に

之、然則朝鮮王子幷大臣一兩員爲質可有渡海事
一去年朝鮮王子二人前驅者生擒之其人順凡間不混和四人度與沈擊(沈遊擊乎)可歸舊國事
一朝鮮國王之權臣累世不可有違却之旨警詞可書之如此者爲四人向大明唐使繼々可陳語之者也
文祿二年癸未六月廿八日
秀吉朱印

從來の歷史多く石田三成、小西行長等を惡みて倭姦の士となす、故に小西、沈惟敬の賄遺に迷ふて秀吉を欺き、日本國王に封するを以て條件とせりと爲し、小西の治態に明かならざるを責む。然れども事實此の如きことあるべからず。小西をして倭姦の徒ならしむるも、其詐謀は歸朝と共に現れ、自首處を異にせん。是秀吉

朝鮮の諸將、休戰を幸として、多く亡命を招き敗兵を集む。行長約を守つて之を攻めず。而して北京にありては石星、鋭意兵備を整へて、遼東一帶の地守備を有せざるの地なきに至る。此時、朝鮮會寧府に接近する寧古塔の夷種、愛親覺羅氏漸やく大に、傍近の部落を幷呑して、文祿元年に至り其主奴爾哈赤、長白山北、鴨綠江の地を略有し、數ば朝鮮を伺ふ。今や朝鮮の危急に瀕せるを見て、使を發して援兵を出さんことを云ふ。朝鮮其禍心を察して之を拒む。愛親覺羅氏は他日の清朝也。此の如くして行長が惟敬に約する五十日は經過せり。然れども惟敬來らずして明の驍將、李如松其部下を率へて遼東に入る。如松は元と朝鮮の人、走つて明に入り其族人、如柏、如楨、如梓、如梅等皆な武人たり。如松先きに寧夏の叛亂を夷げて大名あり、今や五萬一千人を率へて至る。之より先き行長韓人を用ひて諜者たらしめしに、韓將之を執へて殺ろせしかば、敵軍已に義州に入るも行長之を知るを得ず、已にして文祿二年正月二十六日李如松の先鋒急に進み、行長の斥候二十騎を執ふ。二騎逃れて之を行長に報ず。之より先き平壤より京城に至る間に七城を築き、大友義統、黑田長政、久留米秀兼、小早川隆景、吉川廣家兵を分つて之を守る。行長等即ち急を大友に報じ、遞次相報ぜしめ、二萬八千人を以て平壤を守る。已にして李如松二十萬の大軍を率ゆと聲言して平壤を攻む。時嚴寒に際して供給意の如くならず、防戰二日にして城中の死者千六百人に達し逃遁するもの相繼ぎ、存する所六千人の

み。首を擧げて援兵を待てども至らず。即ち議を決して城を捨て、大同江の氷を踏み、京城を望んで退き、大友の營に至れば疾く逃れてあらず、諸將風を望んで京城に退く。獨り小早川隆景、開城を守つて動かず、必らず李如松と戰はんと云ふ。秀家等人を遣はして百方之を說く、隆景即ち京城の先鋒たらんことを約して京城に退き、南大門の外、碧蹄館に陣す。已にして李如松勝に乘じて進み朝鮮の士兵また其後に屬し、大軍京城に迫る。諸將或は壁守せんと欲す、立花宗義主として野戰を主張す。戰は小早川隆景、黑田長政、毛利輝元、立花宗茂によつて開かれぬ。野戰は明兵の長所にあらず、李如松の兵少しく靡くや、浮田秀家以下の全軍之に乘じて明兵を斬ること三萬八千人、李如松大敗、傷を負ふて走る

如松已に敗走すと雖も、日本の軍士もまた漸く糧食の乏しきを苦しみ、浮田秀家主として京城を捨てゝ釜山に入らんと主張す。加藤光泰之を駁して曰く、今ま加藤清正、鍋島尙重、北邊にあり。之を捨てゝ退かんとするは國辱の大なるものならずやと、秀家曰く、糧盡くるを如何せん。光泰曰く糧盡きなば砂を食はんのみ。余初め足下を敬稱して中納言殿と云へり、若し强ひて退かば中納言權兵衛と云はんと。已にして加藤鍋島も歩を一句、明の地を占むるもの少しく敵の糧食を得たりしかば、退軍の事も行はれざりき。此より先き惟敬、已に行長の條件を諸すと雖も、北京の朝廷が果して之を諸するや否やを知らざるを以て、將士の間に遊說す。諸將士皆な決して地を割くべからざるを云ふを以て、徘徊期を失す。今や李如松大敗してまた立たざるを見て、即ち頻りに誇張して、北京を動し、また行長と和を議せんことを促がす。行長時に京城の附近龍山にあり、浮田秀家、增田右衞門、石田三成、大谷義隆、小早川隆景等と議して惟敬の和議を秀吉に通ず、此時に方つて秀吉の弱點は最も明白に現はれ來りぬ。彼は家康の如き强固なる意思を有せず。智力の湧く所に任せて縱橫すと雖も、然かも永久之を持して移らざるの忍耐力を欠けり。彼が北條氏政を攻むるや、僅かに五ヶ月の征戰に倦みて歸らんとす。其大なる智力に伴ふべきの意志を有せず。成功の連續するに方つてや、翻々揚々として止る所を知らずと雖も、蹉跌一たび來るや、彼れ長く之に堪ゆる能はざる也。彼は何人よりも已に久しく外征に厭けり。而して彼れまた秀家が大將の器にあらざるを知りながら、德川家康を以て之に代ゆるの危險を見たり。家康を外にしては一の蒲生氏鄕あるのみ。併かも氏鄕が已に與へなば、容易く之を征服すべしと云へるを聞きて悅ばず。年老は快活大望の精神を衰弱せしめ。衰弱は猜疑と倦怠とを生じ、寢をして行長等の和議を聽かしめて曰く、朝鮮大明に猛威を振ふも益なきことにして上下莫大の費に堪へず。宜しく明使の請ふ所を容るべしと。此の如にして文祿三年五月、明の媾和使參將、謝用梓、副使、遊擊、徐一貫、名護屋に來る。秀吉は大饗應を供せり、彼等は明、日本と和し、同盟軍を起し

秀吉農夫となりて瓜を賣り、家康はあし賣となる、秀勝は瓠瓜を賣り、織田常信は僧となり、前田利家は高野僧となり、蒲生氏鄕は菜賣となりて茶を秀吉に賣りて高價を貪り、秀吉の侍女藤壺、旅店の婢女となりて載る。

て韃靼を擊たんと云へり、秀吉の尊とんで得ざる寶物は何物なるかを問ふて、歸つて必らず之を秀吉に贈らんと云へり。秀吉遂に行長等が初め呈出せる條件を基として、和を講せんことを明に通知し、增田、石田、大谷、小西の四人をして其局に當らしむ。已にして明使去るや、秀吉將士と共に假裝會を名護屋に催して歡を極め、樂を盡くして、まだ朝鮮の事なきものゝ如し。盖し、秀吉意滿ち氣驕り、年邁き、老重なり、小罪に盛怒を發し、小蹉跌に心を惱まし、其腦力はまた昔日の秀吉にあらざる也。小兒の死によりて適ま憤を發して外征の師を起こせしに、今や寵姬淺井氏、また第二兒を生まんとするに至りしかば、家鄕蟄居の里遠征の大氣魄、何時か已に衰へたる也。

三百三十七節　日、明兩國兵を退く、朝鮮抄掠の爲に衰ふ

本國に於て惰氣の起る已に此の如くなれば惰氣遍ねく朝鮮陣の諸將に渡り、三軍監兵を釜山に退けて和議を決するを待たんと云へば、已に疲勞し已に糧食なき諸軍、一人、異議を唱ふるものなし。然れども土寇明兵の後を追はんことを恐れ、小早川隆景の策により、火を王城に放ちて灰燼とし、敵をして據るの地なからしめ、煙に乘じて大軍一時に釜山に退く。之より先き日本軍隊の進むや、約束嚴束にして抄掠少かりしが、其歸るや劫奪抄掠太しく、大石巨木をすら抜きて歸るに至る。已にして釜山に歸るや、兵を近傍に分つて十六城を築き、また晉州城を圍みて之を販る。此時、朝鮮王昭開城府にあり李如松、京城にあり、此報を聞きて沈惟敬を責む。惟敬即ち小西行長を責む。行長惟敬を罵つて曰く、兩國和を講じて撤兵せんとするに、明兵獨り進軍するは何ぞ。獨り晉州を取るに止らず、不日兵を進めて京城に入り、破約の明兵を攻めんと。惟敬即ち如松に說きて、兵を引ひて遼東に歸らしむ。如松の兵沿道處々劫掠を恣にす。朝鮮は南方已に敵人日本のために抄掠せられ、北方また友國明兵のために奪掠せられ、之より財寶重器地を拂つて空しく、二十九ヶ月間の蹂躙によりて生じたるの傷痍は爾後一百年を經て猶ほ癒えず。

三百三十八節　秀賴生る、秀次殺さる、淀君出づ

秀吉大に喜び之を立て、嗣となさんと欲す。然れども關白秀次、殊に之を讓るの志なし、秀次は秀吉異父の妹、智子の生む所にして秀吉の養つて子とせるもの也。秀吉の征伐に從つて數ば功ありと雖も、秀次の大材なくして其盛怒を有し、少小富貴を極めしがため、兇惡の習を得、將士の怨を買ふもの多し。秀吉、之をして朝鮮に入り秀家に代らしめんと欲して諷するも、風波を厭ふて敢て從はず。已にして秀賴生るゝに及び、功を希ふの臣、淺井氏と秀次の間を讒するものあり、秀次意を秀吉に得ず、不平勃々、酒を被つて益す兇惡に陷り、手から近臣を及し、城上より市民を擊殺し、或は胎婦を割かんとするに至る。淫荒度なく、右大臣晴季の女一たび嫁して寡居するを娶り、また其先夫によりて生む所の女を納れ、母子並びに寵し、其他公卿諸侯

の子女の美なるものを漁し、寵姫の多き數百人に至る。秀吉之を惡みて之を廢するの意ありと雖も、之を云ふを憚る。已にして秀吉、大坂を秀賴に與へて伏見に隱遁せんとして大に伏見に築き、朝鮮及び名護屋に一部の軍を屯せしめ、餘は悉く之を召還して伏見の土木を助けしむ。秀次之より深く危疑して、兵を集めて自ら守り、諸侯の親近なる者に迫つて曰く、太閤沒するの後と雖も、必らず秀次に叛くなからんことを誓へと。毛利輝元、其書を献ず。秀吉乃ち人を遣はし、秀次を詰へて之を高野に放ち、後迫つて自殺せしむ。時に年二十八、其子女妻妾三十四人、皆殺さる。其墓に題して畜生塚と云ふ。時に淺井氏淀の別邸に居る世に淀君と云ふ。秀次死して、秀賴關白たるべきを見るや、天下の將士爭つて淀君に仕ゆ。是より淀君の權漸やく大也。

三百三十九節　沈惟敬の詐僞現はる

文祿二年八月、明使楊方亨、沈惟敬、明主の批準を携へて至る。朝鮮の使者黃愼、弘朴長また隨伴す。秀吉朝鮮の使者を責めて曰く我已に兵を朝鮮より班して、朝鮮猶ほ未だ地を割かず、是れ約に背き我を欺くもの也と。遂に之を見ずして、唯だ明使を見る。之より先き沈惟敬單身名護屋に來りて、王者の用ゆべき衣冠、地圖、武經、駿馬三百を献ず。秀吉明の使者を見るや、自ら惟敬が送る所の衣服を着け、列侯をしてまた之を着けしむ。此くて明の使者進んで國書を呈するや、秀吉僧承兌をして之を讀ましむ、書中『玆特封爾爲日本國王』と云ふに至り、秀吉激怒、驟かに顏色を變じ、其衣服を脫し、國書を奪つて地に擲つて曰く、日本我掌中にあり、王たらんと欲せば王、帝たらんとせば帝、何ぞ外奴の封を待たん耶、と遂に明使を追ふて國境の外に出でしむ。惟敬、秀吉の呈出せる條件の外、明主の地歩を占めんがため、且つは秀吉を悅ばしめんがため、封冊の一事を加へて却つて事を破りし也。而かも猶ほ北京を欺かんがため、道に奇器珍寶を買ふて之を明主に奉り、秀吉悅で封冊を受け、謝恩として奉る所と稱す、後事露れて獄に下る。

三百四十節　再度の外征、諸侯功なし、秀吉病を得て死す、諸侯の紛爭

秀吉の大志は再び激怒のために喚起せられぬ。慶長二年二月、復た兵を起して朝鮮を擊つ。小早川秀秋、毛利輝元大將たり、前役の諸將多く之に屬す。兵集るもの十六萬一千九百人。先づ使を發して朝鮮王を責めて曰く、速に地を割くこと約の如くせよと。また小西加藤の兩先鋒に云つて曰く、此行若し功なくんば汝等の妻子を磔殺せんと。朝鮮王之を聞き急に使を明に發して援兵を乞ふ、明即ち楊鎬、麻貴、劉挺等をして之を救はしめ、且つ沈惟敬が敵國本國を幷せ欺けるを怒り之を罪せんとす。惟敬恐れて行長に下らんとして、明將、刑介の爲めに捕へられ、即ち其部下をして明軍の情僞を行長に洩さしむ。行長之によりて策を立て、先づ朝鮮水軍の將、元均を誘ふて之を破り、兵を進めて南原を取る。黑田長政また明將解生を全義館に敗る、京城震驚荷擔して走る。然れども此役

は征戰の性質已に惡戰也。諸將の前頭には大明侵略の希望ありて光輝を放つにあらず、唯だ敵を破りて憤を霽らさんとするもの多し。故に其士民の服從せざるもの前役よりも甚しく、戰鬪に大經略なきや前役よりも甚し。且つ前役に方つてや明兵の來る、行長平壤を取りし後にあり。今や明兵已に朝鮮の中心にありて、日本兵の未だ京城に近かざるに先つて、南下し來る。加ふるに朝鮮水軍の將、元均已に行長の破る所となりしと雖も、李舜臣猶ほ在り、李舜臣は初め元均に讒せられて軍柄を失せしが、今や元均の敗によりてまた水軍を指揮す。彼は最も日本水軍の弱點に通じ、且つ水軍によりて日本の糧道を絶たば戰はずして之を屈すべきを知るもの也。即ち盛に水軍を放つて對馬釜山の間を抄掠して兵糧を奪ひ、菅正隆を錦島に攻めて四千人を殺ろすに至る。加ふるに朝鮮は前年の兵亂によりて井邑荒敗せしかば、糧食を得べからず。故に日本兵已に南原を取つて京城に向ひなば、また徐ろに兵を引きて釜山近傍に歸り、持久の策を畫せざるべからざるに至り、行長順天にあり、清正蔚山にあり、其他の諸將を分つて尙州、梁山、密陽、大丘、金海、東萊、泗州の地に陣せしむ。是より明兵益す勢を得て南下し來る。其兵凡そ十四萬人と稱し、刑介總軍を領し、李如松左將軍たり、李萬春、解生右將軍たり、朝鮮の將士皆な之に屬し、進んで蔚山を圍み、兵を梁山に出して釜山との交通を絶つ。加藤清正、淺野幸長等蔚山にあり、孤城堅守、馬肉を食ひ、人溺を飮むに至り、僅かに釜山順天の援兵を

慶長二年、家康大久保長安の策により、東海北陸東山の三道に一里塚を作らしめ、六十間を一丁とし、三十六丁を一里とし、一里塚極上を植ゆ、是れ織田信長が其領邑中に行ふ所なりしを擴充したるもの也。

得て、免るゝに至る。此他、小西行長は順天を守りて劉綎と對抗し、島津義弘は新塞に茅開器等の大軍を破りて二萬人を殺ろし、藤堂高虎、九鬼義隆、脇坂安治等濟州島に明の水軍の將、陳隣を破ると雖も、局面を一變するに至らずして、殆んど守勢に立ちぬ。此の如くして慶長二年も暮れて三年となるや秀吉の心身益す衰へて外征に倦み、使を發して秀秋、行長、清正、義弘幸長等十餘將十萬人を朝鮮に止らしめ、餘は皆な召還す。慶長三年六月、秀吉、伏見にありて病を得、時に年六十三。秀吉の世にあるや天運人事一として彼に幸せざるはなく、彼れ自ら天の寵兒と信じ、何ものも寵兒に爲し得ざる事なきを信じたりき。然れども彼が爲し得ざるものは二ありき。即ち明の征伏也。早く子を得る也。若し彼をして壯年にして子あらしめば、猛臣謀將をして之を守らしめ、天下を諸侯の權力平均の上に据へて、安然として死すべかりし也。然れども彼れ晩年までも子を得ず、其病を得て死の近きを知りし時は、秀賴の年僅かに七歲。以て人を率ゆるに足らずして、人に率へられんとす。加るに秀吉の正妻杉原氏と、妃淺井氏と交も權を爭ふ。而して淺井氏才色双絶、年齒また秀吉より若きこと四十一歲、深く新進の文官に結びて其力に賴る。故に新進の文官に心よからざる舊諸侯は、自ら杉原氏の門に入つて淺井氏を疎んずるに至りぬ。是より諸侯文官の間、正妻黨と妃黨とを生じ、更らに之を區分すれば文官黨と武官黨となり、才華自ら進む者と、勳閥によりて自ら立つものとなる。是れ何の時代

も世漸やく治平となるや、必然生ずる所の現象也。而して秀吉は心身漸やく疲勞したる時、此現象を見、思へらく群侯相爭ふの結果、天下再び亂れて、秀頼長く其位を保つ能はず、顚覆の禍足利氏の如くならんと、即ち諸侯を會して淺井長政、前田玄以、石田三成、增田長盛、長束正家の五奉行をして之に諭さしめて曰く、列侯群臣、交も相疾爭して傾覆せんとするの狀あるを見て、余が心實に憂へて息まず。宜しく宿怨を解きて、互に幼主を輔佐すべしと。然れども諸侯は實に多く此五人と爭ふもの也。固より服せずして曰く、幼主を奉するは謹んで命を奉せん、宿怨を忘るゝは即ち能はずと。五人入つて之を秀吉に報ず、秀吉默然、暫らくして之を家康に托す。家康出でゝ聲色を勵まして諸侯を責む。諸侯即ち誓つて怨を忘れんと云ふ。秀吉之を聞き大勢已に德川氏に歸せんとするを見る。而かも天下の大亂を憂ふるの公義と、秀頼の安全を希ふの私情とは、秀吉をして家康に謂はしめて曰く、余死せば國難必らず起らん。今ま天下を以て足下に附す、請ふ心力を盡くして太平を謀れ、秀頼長じて後、其材能立つべくんば立てよ、廢すべくんば廢せよと。然れども秀吉は劉備にあらず、家康は諸葛亮にあらず。家康辭して曰く家康は其器にあらずと、強ゆる再三、固く辭して受けず。秀吉之を三成長盛に告ぐ。二人曰く殿下獨力天下を征して大業を創む、何ぞ一旦之を他人に附すべけん耶。殿下の遺孤の爲め死せんとする猛臣謀將、雲の如く雨の如し、後事憂ふるに足らざる也と。秀吉之を頷き、更らに片桐且元小出吉政をして秀頼の傅たらしめ、且つ云ふ、天運を恃む勿れ、天運は人事にあり、人心苟も輿みす、天下の大も恐るゝに足らず、決して秀頼をして我名を恃みて家康と隙を生ぜしむる勿れと。彼れ已に天下の到底、家康に歸せんとするを察したる也。併かも猶ほ其子の安からんことを欲して、秀頼を前田利家に托し、外征の收局を三成に托し、即ち家康、利家、景勝、秀家、輝元の五人を年寄と稱して、國家の大事に當らしめ、五奉行をして小事を決せしめ、中村一氏生駒親正、堀尾吉晴の三人を中老として、年寄奉行の間を調停せしめ、また諸侯をして相誓はしむ。曰く秀頼に仕ふる太閤の如くなるべしと。曰く從來の法令を守り、政事は多數の議に從ふべし。曰く互に私怨を捨つべし。曰く徒黨を立てず、爭議あらば親戚朋友及び秀頼の親近者と雖も、法を枉げずして之を匡すべし。曰く所領增減等の事は秀頼の生長して事を見るを俟て改變すべし。曰く秘機を洩らすなかるべしと。五年寄をして各々五奉行に誓はしめ、五奉行をしてまた五人に誓はしめ、遺命終るや、即ち曰く十萬の師をして海外の鬼たらしむる勿れと。八月十七日其の曾つて尼孝藏主に與る所の歌を取り自ら花押を書し、半ばにして遂に死す。歌に曰く『露と起き露と消えぬる我身かな浪花の事は夢の世の中』、智力博大、止る所を知らず一世を籠蓋して猶ほ足ることを知らざる英雄も、興亡今古の事を思ふては、遂に英雄の一身、渺たる滄海の一粟に等しきを感じ、恰かもナポレオンがエルバ島に人生の奥義を悟りたるが如くな

りき。

三百四十一節　外征軍歸る　三成、名護屋に至りて、遙かに遺命を傳へて朝鮮の諸將を召喚す、諸將潜かに行李を治む。福建巡撫諜して秀吉の死を知り、之を北京に奏す。明主大に喜び命を朝鮮の諸將に傳へて、日本兵を追撃せしむ。秀秋先づ釜山の軍を抜て歸り、清正、義弘、繼で兵を收めて發す。行長また順天より歸らんとするや、劉挺兵を進めて之を圍む。清正義弘返つて行長を救ふて舟に上る。明韓の水軍其全力を盡くして行長等を追ふ。清正先づ去り、義弘且つ鬪ひ且つ退く、敵軍鋭を盡くして行長を圍む。行長憤撃して之を破り、鄧子龍、李舜臣を殺ろす。已にして力盡きて島嶼に上り、敵巢を奪つて之に據る。義弘適ま來つて之を救ひ、撃つて敵將を殺ろし、遂に名譽の退軍を爲しぬ。此くて十一月を以て諸將皆な名護屋に至るや、三成秀吉の遺命を宣ぶ、諸將皆な涕あり。然れども秀吉追懐の涕は、須臾にして乾かざるべからざるものありき。

第二十四章　徳川氏霸權の確定　神武紀元二千二百六十一年より二千二百六十六年に至る

第三百四十二節　徳川家康の人物及び位地　第三百四十三節　家康の敵手　第三百四十四節　石田三成の人物及び位地　第三百四十五節　家康の擅私、三成等家康を責む、細川忠興三成の策を破る　第三百四十六節　上杉景勝、直江兼續、佐竹義宜、三成に黨す　第三百四十七節　三成の反間成らず、景勝兵を擧げ家康之を攻めんとす　第三百四十八節　三成諸侯を糾合して兵を擧ぐ、家康の躊躇　第三百四十九節　家康、三成兩軍の形勢　第三百五十節　關が原の戰、三成黨の大敗　第三百五十一節　景勝以下家康に服屬す　第三百五十二節　家康府を江戸に開らく、征夷大將軍の任官

三百四十二節　徳川家康の人物及び位地　凡そ日本歷史ありて以來、人物の輩出せるは元龜天正時代を以て其頂上とし、殆んど支那の六朝五代の如きものありき。而して之を平定して統一せるは秀吉なりと雖も、秀吉勤閥あるにあらず、力征と氣象を以て壓服したるのみ。英雄豪傑固より甘んじて其下風に立つも、彼等は秀吉の個人的力量に服したるのみにして、其の家に服したるに

櫻井光裕氏が其友人の古記中より拔きて如闌社話に揭げし一節、最初に於ける德川君臣の狀態、三河武士の氣質、家康の風采を想見すべきものあり。其文、家康の臣石川又四郎なるもの初め淨土宗徒なりしに後、一向宗徒となりて一向の亂に與みし、他國に漂流して歸つて三河にある時、家康遙に之を見たるを叙して曰く、あれに居候は、石川又四郎めとみゆる、譜代の主を、檀那坊主に思ひかへて、我等方を出、爰かしこと經めぐりても、埒明ぬゆへ、又舞戾たるとみはたり、不屆なる奴かなと被仰、御通り過きさせられけるが、如何の思召にや、又四郎めに供をしてうせおれといへとの御澁に付、御

あらず。故に秀吉一たび去るや、中原の鹿はまた彼等の競取力爭に附せられたるものと信ずる也。而して當時彼等の中聲望最も高きものを德川家康とす。家康は多年武田、今川の豪族に挾まりて攻戰鬪伐、寧日なく、流離艱苦を極めしがため、其意志、堅實にして冷靜、些しの小說的感情なく、成敗、利害の打算、殆んど寸毫を差はず。彼れ嘗て其子孫を戒しめて曰く、世人金銀の貴きを知つて、鐵の貴きを知らず、鐵なかつせば禍亂何によりて治まらんと。彼は實に鐵の如くなりき。一たび戰に臨むや直裁、鋭進、前に敵なきが如し。彼の天才は之を其父より受けたり。然かも彼の堅實鐵石の如き意志は、之を信玄に學び、膽氣直裁の風は之を信長に學びぬ。彼は小國を以て敵を四方に受け、民政に注意して土田を拓らき寸々尺々を伸ばさゞるべからざるがため、周到緻密、民を憐みて之を助長せざるべからざるを解したる政治家となり、農、工、商を以て武將の三寶となせり。秀吉は信長に屬して、早く天下の勝地を占めしがため、土地を割き財物を與ふる糞土の如くにして、其の大を好むの心を以て、諸將飽くなきの心を皷舞して之を用ひたり。然かも其の賞功は人に存して子孫に存せず。家康は强國に挾まりて、彈丸黑子の地に起りて、土地財物を得る容易ならざりしがため、恩威を以て部下を統べて、氣節を厲まし、且つ其人を取るのみならず、また其家門子孫を取りて心を安んぜしめ、普代恩顧の士なるものを作ること、恰かも賴朝が天下の諸豪を家人とするが如くなりき。然かも秀吉の諸

近習衆、其段被申聞候へば難有と申て、御步行衆の中へ入交りて、御供仕候處に、暮に及び御歸の節、又四郎と仰に付、御前へ罷出候へば、胸ぐらを御取被ㇾ遊、汝元の淨土宗になるまじきかといやならばいやといへ、首を切てと被ㇾ仰ければ、又四郎承り、たとへ、首を切なされ候とも、宗旨をかへ申儀は、罷成不ㇾ申と御請を申を御聽被ㇾ成、扨々情のこわき、にくき奴かな、ゆるすぞとの御意にて、御つきはなし被ㇾ成候へば、又四郎は後ざまに二三間ほど、よろ〳〵とし、あふのけに倒れしが、やがて起直り、兩手をつき、元の淨土宗に罷成可ㇾ申と申を、御聞被ㇾ成、已めは身共がいふ時は不罷成」

將飽くなきの心を皷して之を用ゆるに反して、其部下を戒飭して、謹愼節欲せしめて之を用ゆ。彼れ嘗て其部下に敎へて曰く、五字七字の秘傳ありと。部下之を問へば即ち曰く『上を見な』『身の程を知れ』と、此の如くして彼は其部下をして族人の一大集會の如くならしむるを得たり。彼は沈毅にして老成、堅實にして大膽、殆んど意志の化石したるが如く、平和に於ても一等、戰鬪に於ても一等なる人物にして、正しく秀吉が智力に任かせ、成功に乘じて、大業を擴充せるを收拾すべき天分を有したりき。然かも彼は信長の疎落なく、秀吉の開爽なく、一點の色彩の人を眩惑するものなく、一個の魔力の人を魔するものなく、其爲す所陰險なるがため、成功すれども人に解せられず。其行ふ所冷酷なるがため、勝利を得れども、人に嘆賞せられず。成功と勝利とは、適ま以て人に厭惡せらるゝの基なりき。彼の容貌風采趣味は彼の人物を代表しぬ。短身にして肥大なるは其骨格也。醜汚にして品格なきは其容貌也。拙劣、蕪草の如きは其の文學也。咄々啞の如きは其辯也。而かも其の戰場に立つて、采配を振るや、其聲音雷の如く、十七八町の外に聞へ、恰かも摩利支天の地より生へしが如くなりき。彼は物を惜しむこと、殆んど客嗇翁の如きものありき。然かも與ふの取るがためなるに方つてや、天下の半ばも惜まざる也。彼は色を好むこと秀吉よりも甚しかりき。然かも彼は肉慾家のみ。秀吉の如き小說的戀情を有せざりき。彼れ早く秀吉が天下を一統すべきを信ずれども、其武を示さずして和するは、

永久の屈伏なるを知り、一たび戰つて之と和し、長く客將の地を占めて畏敬せられき。然かも秀吉の誇榮心を知るが故に、之に仕ふる恭敬にして、曾て其誇榮心を傷ざりき。彼は秀吉世にあるの日、其武力と、富と、膽氣と、聲望に於て、已に秀吉の後繼として信せられき。今や秀吉死す。天下の大勢は自ら此の冷酷なる鐵石漢に歸せんとしつゝありし也。

三百四十三節　家康の敵手

然かも當時の英雄は皆な彼の如く、能く屈するを知るものにあらざりき。前田利家は其の封土の大、士馬の銳、人物の信用あるを以て秀吉の附托を受け、秀頼を奉じて家康と拮抗し、毛利輝元また中國の大を恃みて家康に下らず。然かも彼等は多く武將にして、家康と相下らずと云ふのみ。未だ自ら主動の地に立ち、家康と鹿を中原に爭ふの膽氣、識見を有せるものにあらず。眞に家康と相爭はんとするものは石田三成と、上杉景勝のみ。

三百四十四節　石田三成の人物及び位地

石田三成は近江の人、家貧にして少小觀音寺の僧に寄寓す。秀吉曾て狩獵して觀音寺に至り茶を求む。三成出でて之に侍し、初めは冷茶を進め、中ごろ暖茶を進め、終りに熱茶を進む。秀吉其慧敏を愛し、携へて歸り、左右に侍せしむ。時に歳十三歳四千石を領す。其人、才思湧くが如く、膽勇武將に越へ、無限の執着力を有し、其事を爲さんとするや經營慘憺、必らず遂げずんば已まざらんとし、秀吉の陰謀秘計多く其手に成る。彼をして初めより身を武將の地に置きて天下の形勢にならしめしならば彼は一大諸侯として重を天下に爲せしならん。不幸にして彼は武將の家に生れず、茶坊主を以て秀吉の幕中に入りしが故に、彼は帷幄の臣となりぬ。然かも彼は一日も其不幸を醫すを忘れず、帷幄の臣たるに滿足せず、必らず一大武力を備へずんば已まざらんとし、財を盡くして勇士を門下に集む。彼初めて近江の四萬石を領するや、一萬五千石を以て島左近を養ふ。左近は才氣勇膽の名あり、自ら負ふて諸侯に仕ふるを肯せざるもの也。其他大谷吉繼、增田長盛の如き皆な三成の舊友にして、彼の推薦によりて諸侯たりしもの也。三成常に曰く、凡そ人に仕ふるもの其主人より得る所を殘すべからず、また浪費して得る所より過ぐべからず、殘して畜ふるは盜也。驕りて債を起すは愚也と。彼は獨り口に之を云ふのみならず、また之を實行す。故に戰鬪の大功なく、多く文筆を以て進めるに似ず、其士馬精英、部下順服、恰かも譜第の如く、當時の大諸侯中、比類少なきものなりき。彼は固より家康に匹敵すべき偉大を有するものにあらず。然れども其の機才は以て木強無文の徒を糾合するに足るものありき。彼れ固より戰場の雄あらず。然れども其の政治の才は、諸侯宿將をして餘儀なく其下風に立たしむるに足れり。彼は固より正論謂々の士にあらず。然れども其の白刃の上を步するが如き危險を犯して陰謀を畫するの膽氣は、殆んど鬼膽

を破るが如きものありき。彼は敵に對しては極めて慘酷なりき。然れども味方に對しては信義を保つて變せず、約束に殉ずるの節操あり。此の如き人物は當時に稀有にして、諸侯中陰謀に於ては細川忠興、才略に於ては黒田如水の外は相類するものなかりき。彼は新進の身にして、多く武將の輕侮する所たるを知り淺野長政、加藤清正、福島正則等の雄將、多く秀吉の正妻杉原氏に緣固ありて其の信を固むるを見て、其寵姬淺井氏に結托して其信任を固めしかば、益す宿將と相反目するに至り、銳意宿將の力を殺がんとして、多くの陰謀を施して其敵手を退けぬ。然れども宿將の勢猶ほ盛にして獨力其怒に對する能はざるを以て、宿將の分裂に乘じ、黨與を其中に作り、此の如くして彼は一方には文權を代表して、舊諸侯と相爭ふ。小西行長は武將中の彼の黨與也。加藤清正と國を隣り、最も相憎惡し、共に先鋒となりて功を朝鮮に爭ふ。已にして清正蔚山に明兵に圍まるゝや、行長順天より赴きて之を救ひ、行長順天に圍まるゝや、清正、島津義弘と共に之を救ふ。之より兩人の交情稍や熟し、行長、清正に向つて互に其の宿怨を忘れんと云ふや、清正曰く余もまた之を欲す。獨り子が三成と善きを如何せんと、遂に相合せず。已にして諸將、秀吉の喪に遇ふて歸るや、三成之を勞して曰く諸君、伏見に至り少君を見て、各々國に就くべし。明年の秋、大に茶の會を催して相會せんと。清正冷然として答へて曰く、諸君內にありて茶事に熟す。余の如きは前

當時の江戸は太田道灌の經營せる城趾につきて之を廣充せるものにして、其市民中の富豪は多く京、大坂、岡崎より家康に從屬し來れるものにして、德川氏の之を眷顧するこ

と他の市民に異なるもの有り。嬉遊觀樂に、江戸城開始の頃、農民、商人に弄せらるゝ風を叙して曰ふ。

一むかし江戸の町みせの棚のさまは、見聞集に今江戸繁昌記に、今江戸屋作代未だ美數事前代未聞なれば、田舍人見物に來りくん、十ゆく愛宝町の棚にの云ふ五三耶道横道なる人有そらはかもをつくり田舍もの近付て巧みて物を買ひげんむさせ紙頭へはさせ市へ目上の引かぶり綴りたる綿入の小袖着木綿むくなごなだれかたるなをつしまぐり手に長數珠をつなぐり口に題目をとなへ棚に慶長元年此ごろ打かいこれり頃なり此ごろ和のるもみせ棚といへりいふをばそかりしてと後年に至りても

後七年、外征に勞れて家貧し、以て諸君に報ずべきなし。諸君茶を與へなば、余は稗の粥をすゝりて之に酬ひんと。清正は其の出身に於ても秀吉と親しく、其勳功に於ても宿將第一たり。清正已に此の如くして三成と惡し、故に豐臣氏の宿將多く三成を憎みて、陰險姦謀の徒となし、忠姦相排して黨を分つ。今や天下の權、豐臣氏を去つて家康に歸せんとするとき、忠實の名を以て自ら標幟する宿將之を傍觀して勢利に走るとき、姦謀の名ある三成こそ却つて、豐臣氏の爲めに家康と戰はんとす。

三百四十五節　家康の擅私、三成等家康を責む、細川忠興三成の策を破る之より先き、秀吉已に死するや、家康世

變の決して遠からざるを慮りて、四方の形勢に注目し其の子秀忠をして走つて江戸に歸つて兵備を嚴にせしめ、また島津の一家と懇親を結び、增田長盛を訪ひ、長曾我部元親を訪ひ、新庄直頼を訪ひ、細川幽齋を訪ひ、遂に大膽にも諸侯私婚の禁を犯し、伊達政宗の女を其子忠輝に娶り姪松平康成の女を子として、福嶋正則の子正之に娶はせ、小笠原秀政の女を養ふて子とし、て、蜂須賀至鎭に配せんとす。秀吉の下にあつては醇々として無爲を裝ひし家康は、今は惶々として、席暖まるに遑まなし、何人も曾な其異志を疑はざるはなし。此に於てか三成主として大老奉行を糾合し、相連署して家康の異志を責め、且つ若し分疏明白ならずんば、十人衆の班より除かんと云ふ。家康服せず、異志ありとは何人の證による乎。請ふ先づ證人の名を聞かん、

婚姻の如きは適ま制禁を忘却したるのみと。兵を集めて自ら守り、其部下、榊原康政、本多正信等一萬の兵を率ひて勢田草津を塞きて東國より上るものを抑留すること三日、行人止るもの數萬人に及びて之を放つ、民衆京師に入るもの洪水の一時に至るが如く、風説して曰く江戸の兵數十萬騎至ると。京師大坂大に驚愕す。秀吉死して墳墓の土未だ乾かずして家康專横背理の行あり。大老皆な之を憤る。三成即ち前田利家を奉じて主となし、秀吉の寵姫淺井氏年猶ほ若きを以て、改めて利家に嫁せしめ、利家をして繼父たるの地位に立ちて秀賴を助けて家康に當らしめんと欲す。新進の武將、文官多く之に同ず。獨り加藤清正、福島正則、池田輝政、藤堂高虎、淺野長政、細川忠興、京極高次、有馬則賴、金森長近、黒田如水、同長政等之に服せず。一は三成に對するの憎惡嫉妬より、一は大勢已に家康に歸するを觀望するより、家康を助けて利家に敵せんとし、各〻兵を以て家康を伏見の城に守る。此の如くして三成天下兩分の策漸やく成らんとするに方つて、私かに三成の策を破るもの出來りぬ。細川忠興是也。忠興は幽齋の子にして最も縱橫捭闔の才に長じ、木强の武人中、最も公卿的陰謀の才あり。其父幽齋が足利義照より移つて織田信長無二の從臣となりしが如く、忠興は秀吉の部下より轉じて、利家の親友となりしが、今や利家、家康と相鬪かんとするを見て、即ち周旋往來、利家と家康の間を和解せしむ。二人遂に和し、利家次で死し、三成其賴る所を失ふ。清正等の宿將擊つて之を殺さんと欲す。佐竹義宣三成と善し、即ち兵を發して三成を守り、家康に投せしむ。家康初め三成を殺ろさんと欲す、本多正信之を諫めて曰く、彼をして生存せしめよ。天下の大亂を生ずるものは必らず彼ならん、彼こそ天下を德川に與ふるものなるべしと。家康之を許るして其奉行職を奪つて佐和山に退かしむ。之より家康の勢全く成らんとす。慶長四年七月即ち諸侯に告げて曰く、余秀吉に代つて庶政を裁す。宜しく國に歸り、家康大坂に移り、秀吉の夫人、杉原氏を西城より京師に移して自ら西城に入るべきを見たり。

三百四十六節　上杉景勝、直江兼續、佐竹義宣、三成に同盟す

三成の景勝を知るや實に、秀吉が越中より輕裝して越後に入りて强ひて會見せる時に初まる。當時、秀吉左右を退けて景勝と密談す。坐にあるもの獨り景勝の權臣、直江兼續と石田三成のみ。秀吉が景勝と談ずる所、外間得て知らず。思ふに家康の地を賂物として景勝を招ける乎。其後景勝秀吉の爲めに會津に移され一百二十萬石を領し、直江兼續、米澤の三十萬石を領し、士馬精强輝虎以來の家名を落さず。景勝は輝虎の豪膽に加ふるに、更らに一層傍若無人なる擅横の氣を以てす。彼は飽まで北人也。其心性、